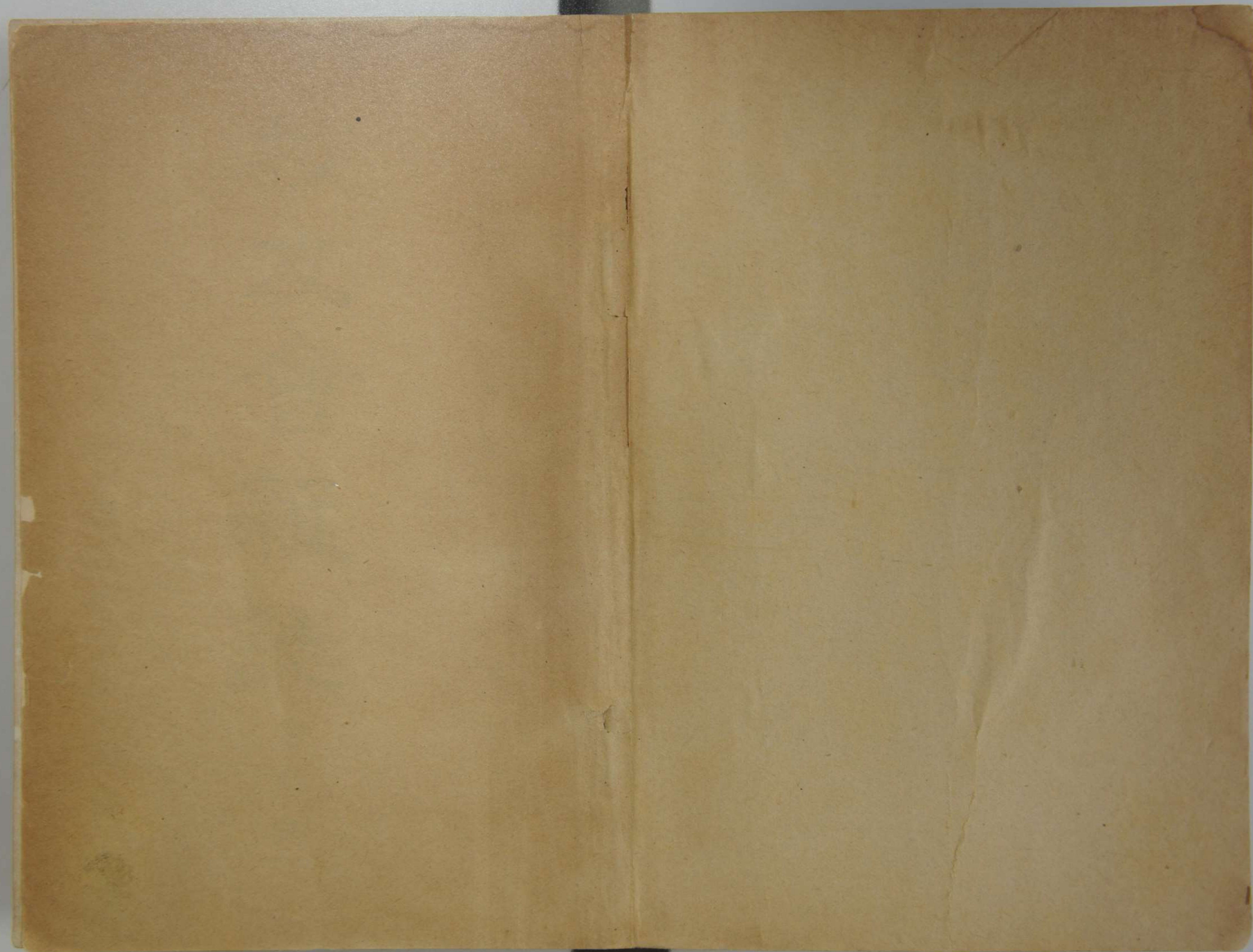


校友會雜誌

山口縣萩中學校校友會





校友會雜誌

第壹號

明治三十四年四月發行

山口縣萩中學校校友會

山口縣 萩中學校校友會雜誌第一號目次

山口縣萩中學校校友會規則

校友會誌發刊辭

祝詞

會長 雨谷善太郎
第五年級 田中 三造

● 論 說

抱負

良心觀

同窓諸子に告ぐ

知己論

校風振起と教育

青年の責任

大津郡學生諸君に就きて

特別會員 能勢 頼俊

第三年級 兼常 清佐

第五年級 天野 正六

第四年級 河野 通毅

第五年級 河野 厚造

第四年級 宮川 鐵造

第四年級 森 信丸

● 學 術

親和力に就きて

特別會員 塚本又三郎

● 雜 纂

萩中學校第一回修學旅行記事序

編者記

第一區隊修學旅行記事

第四年級 石津 御楯

第二區隊修學旅行日記

第三年級 大田 明治

第三區隊修學旅行記

第一年級 竹内 宗輔

明倫館の略歴

特別會員 安藤 紀一

瀧口吉良君の演說

編者記

古澤知事の演說

全 上

陸軍歩兵大佐栗屋幹君演說

全 上

北清戰況視察談

特別會員 竹内菊五郎

長藩尊攘運動の裏面

第五年級 河野 厚造

讀書屑

全 上 坂上 五一

● 詞 藻

歸省中最も愉快かりしこと

第二年級 山縣 恭輔

新鶯を聴く

第一年級 口羽 素介

政權變遷論

第五年級 梨羽次郎熊

雪の南明寺 第一年級 横見 莞爾
仙崎村民の義侠と我校生の沈勇○我校生の美譽○ボ
ト購入○外國人招聘○補習科設置○第二種講習科
設置

活潑なる精神は健康ある身躰に宿る
第一年級 和道 實

艱難の説 第一年級 阿武 正一
第五年級 岡本 精一

秋日面影山に遊ぶの記 第一年級 藤井 龜松
第一年級 田原 清記

運動の必要 第一年級 藤井 龜松
第四年級 前原 清

長州男子の責任 特別會員 古森 重復

筆説 特別會員 古森 重復

詩十三首 全 上

歌七首 全 上

● 本會錄事
本會記事
柔道擊劍部記事
フットボール、ベースボール記事
文藝部記事
本會々計報告

● 附 録
本校の沿革○山口縣萩中學校現任職員表○生徒入
學前成業別取調表○生徒郷貫別取調表○生徒年齡表
○生徒宿泊所取調表○過去三學年間學年試驗成績統
計表○全上學年試驗原級者に關する統計表○生徒仮
定目的分類統計表○武學貸費生表

● 雜 報

○開校式と落成式○前師を想ふ○運動會○羽賀臺一
日行軍○關西教育會への出品○開校紀念日○英語談
話會○阿武郡立萩圖書館○安藤先生○二校生の名譽
○保證人談話會○二月四日の雪中行軍、附雪合戦○

山口縣萩中學校々友會規則

- 第一條 本會ハ校友會ト稱ス
- 第二條 本會ハ本校職員本校ニ特別ノ關係アルモノ及生徒ヲ以テ組織ス
- 第三條 本會ハ課業ノ餘暇ヲ以テ文武ノ諸技藝ヲ練磨シ校風ヲ發揮スルヲ以テ目的トナス
- 第四條 會員ヲ分チテ特別會員及通常會員トナシ特別會員ハ本校職員及本校ニ特別ノ關係ヲ有スルモノヨリ
ナリ通常會員ハ生徒ヨリナル
- 第五條 本會ハ一年一回大會ヲ催ス又臨時ニ小會ヲ催スコトアルベシ
- 第六條 本會ニハ左ノ諸部ヲ置ク
 - 一 擊劍柔道部
 - 二 フットボールベースボール部
 - 三 ボート水泳部
 - 四 文藝部
- 第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 一 會長
 - 二 理事 一名

三 部長各部 一名

四 會計 一名

五 委員若干名

第八條 會長ハ校長ヲ以テ之ニ充テ本會ヲ總理シ之ヲ代表ス

理事部長ハ教員中ヨリ互選シ會長之ヲ命ズ而シテ理事ハ本會全般ノ事務ヲ管理シ部長ハ部事ヲ處理監督ス
會計ハ會長ノ命セシ本校書記之ヲ掌ル

委員ハ生徒中ヨリ互選シ會長之レヲ命シ部内ノ庶務會計ヲ分掌ス

第九條 役員ハ毎年四月之ヲ選任シ其任期ハ各一ケ年トス但再任スル事ヲ得

第十條 本校職員ハ會費トシテ毎月月俸ノ百分ノ一通常會員ハ毎月金拾錢ヲ納ムルモノトス

第十一條 各部豫算ノ費額ハ毎年四月理事部長會計ノ議決ニヨリ會長之ヲ定ム

第十二條 會員ハ隨意ニ各部ノ技藝ヲ修ムルコトヲ得但各部ノ規則ニ從フコトヲ要ス

擊劍柔道部規約

第一條 本部ニ部長一名委員八名ヲ置ク委員ハ生徒中ヨリ選定ス

第二條 本部ニ於テ竹刀及稽古衣ハ總テ各自ノ自辨トス

第三條 部員技術ノ進歩ヲ審査シ毎年一回其等級ヲ定ム

第四條 稽古時間ハ放課後ヨリ日没前迄トス

第五條 道具及稽古衣等ハ使用後必ス丁寧ニ元ノ位置ニ置クベシ

第六條 他人ノ道具ハ猥リニ使用スベカラズ

第七條 會員外ノモノハ猥リニ道場ニ入ルヲ許サズ

但特別ノ事情アルモノハ此限ニアラズ

第八條 道具類ノ破損或ハ紛失アリタル時ハ委員ヲ經テ部長ニ申出ツベシ時宜ニヨリ辨償セシムベシ

第九條 部員ノ心得左ノ如シ

一 稽古ノ時ハ必ス相當ノ禮讓ヲ怠ルベカラズ

一 仕合ヲナスニ苟モ卑屈ノ舉動ヲナシ或ハ惡意ヲ挾ムコトアルベカラズ

フットボール部規約

第一條 本部規則ハ校友會總則ニ準據ス

第二條 競技ノ種類ニヨリ本部ヲ分チテ二小部トナス

フットボール部ハ校友會々員全體ヲ以テ組織シベイスボール部ハ同會員中志望者ヨリ成ル

第三條 部長ハ部内一切ノ事務ヲ整理シ校友會ニ對シテ本部ヲ代表ス

第四條 本部ニ委員八名ヲ置ク

委員ハ部員ノ中ヨリ選任シ部長ヲ助ケテ部内ノ事務ヲ處理ス其任期ハ校友會役員ト同シ

第五條 入部又ハ退部セントスル者ハ其旨委員ヲ經テ部長ニ申出ツベシ

第六條 本部ハ臨時競技大會ヲ舉行ス

第七條 本部ニ要スル臨時費ハ部員ニ負擔セシムルコトアルベシ

第八條 本部一切ノ要具ハ校内一定ノ場所ニ仕舞ヒ置キ出納ノ都度世話掛ヨリ部長ヘ申出ツベシ

第九條 本部競技日取等ハ必要ノ場合ニ之ヲ定ム

ボート水泳部規約

第一條 本部ヲボート水泳部ト稱ス

第二條 本部ノ遊技ヲ左ノ二種トス

漕艇 水泳

第三條 漕艇ヲ練習及競漕ノ二種トス練習ハ部員隨時之ヲ施行シ競漕ハ好時機ヲ以テ之ヲ執行ス

第四條 本部ニ入ラント欲スルモノ或ハ退カント欲スルモノハ其旨部長ニ申出ツベシ

第五條 本部ニ左ノ役員ヲ置ク

部長 一名 委員 八名

但競漕ノ時ハ臨時必要ナル役員ヲ設ク

第六條 部長ハ校友會總則ニ定ムル所ニ從ヒ部内全般事務ノ責任ヲ有シ之ヲ代表シ委員ハ部長ヲ助ケ其事務

ヲ處理ス

第七條 委員ハ毎年四月部員中ヨリ之ヲ選任シ其任期ハ一ケ年トシ他部ノ役員タルコトヲ得ズ但再任スルコトヲ得

第八條 漕艇ハ橋本川、松本川ニ於テ之ヲ行フモノトス

第九條 本部員ハ當部ニ要スル臨時費ヲ負擔スルノ義務ヲ有ス

第十條 所用ノ端艇ハ堀内口羽良介氏邸内ニ碇繋スルモノトス

乗船者心得及罰則

第一條 乗船者ハ善ク其本分ヲ辨ヘ決シテ學校ノ体面ヲ汚ス等ノ行爲アルヘカラズ

第二條 漕艇セント欲スルモノハ其組員ノ姓名ヲ認メ當日正午迄ニ委員ヲ經テ部長ニ申出デ其指揮ヲ待ツヘシ而シテ其申込組數艇數ニ越ユル時ハ抽籤ヲ以テ順序ヲ定メ又各乗船時限ヲ定ムル等ノコトアリ

第三條 休日漕艇セント欲スルモノハ其前日正午迄ニ組ヲ作り委員ヲ經テ部長ニ申出テ其指揮ヲ受クヘシ

第四條 部員外ノモノハ一切乗船スルコトヲ得ス

第五條 部員ニシテ本校欠席中ノモノハ乗船ヲ許サス

第六條 漕艇中ハ水泳ヲ許サス

第七條 端艇或ハ機械ヲ損失セシトキハ必ズ其旨申出ツヘシ而シテ其故意タルト過失タルトヲ問ハス自然ニ

起リシモノ、外ハ其損害ノ全金額ヲ償却セシム

第八條 以上ノ規約ニ違背スルモノハ部員ヲ除名シ或ハ或時限乗船停止等ノ罰ヲ科スルコトアルヘシ

文藝部規約

第一條 本部ハ校友會規則第六條ニ基キ文藝部ト稱ス

第二條 本部ハ校友會々員全體ヲ以テ組織ス

第三條 本部ノ目的ハ専ラ文藝ヲ練磨シ校友會規則第二條ノ趣意ヲ貫徹スルニアリ

第四條 本部ノ目的ヲ達センタメ左ノ件ヲ行フ

- 一 隔月部員ノ集會ヲ開キ討論演說等ヲナス
- 但必要アル場合ハ臨時會ヲ開クコトヲ得

- 一 校友會雜誌ヲ發行ス
- 但毎年二回トス

第五條 本部一切ノ事務ヲ處理センタメ左ノ役員ヲ置ク

- 一 部長 一名 校友會長ノ選定ニヨリ本部ヲ管理ス
- 一 委員 拾貳名 各級組ヨリ一名ヅ、ヲ互選シ(五年級ハ三名四年級ハ二名)本部ノ事務ヲ補助ス但任期ハ一學年トス

- 一 部務ノ都合ニヨリ臨時委員ヲ選定スルコトアルヘシ

第六條 部費ハ校友會費ノ配當ヲ以テシ其收支ハ會計書記コレヲ司ル

校友會雜誌 第壹號

校友會誌發刊辭

會長 雨谷 羔太郎

二十世紀の活世界に立ち、天壤無窮の皇運を扶翼すべきもの、今日の生徒諸子にあらすして誰ぞや。然らば此重大なる任務を果さんとするには、如何すれば則可ある。曰はく、誠實不欺を以て行爲の標準とあさざる可らざるあり、勇壯活潑なる運動を勵みて心身を鍛鍊せざる可らざるあり、忍耐剛毅以て學業を修習せざる可らざるあり、切磋友愛以て協同一致の美風を養成せざる可らざるあり。余は滿校の生徒諸子が日夜省察遵守せられんことを望む。夫れ校友會は課業の餘暇文武の諸技藝を練習えて、是等善美ある校風を養成するの目的を以て起れり、今校友會誌第一號を發刊するに當り、余が所信を陳べ卷頭に題す。

校友會雜誌發行を祝す

第五年級 田中 三造

本校は一昨年九月開校の式を挙げしより、設備宜しきを得、大に長足の進歩を來たし、去歲五月校友會を設立すると共に、其の發會式を挙げられ、今や、亦、第二拾世紀の劈頭、校友會雜誌の發刊を見るに至れり。嗚呼本校の幸、本會の榮、何を以てか之に加へん。抑も方今奎運大に開け、四方の人士競て學業に華々し、智識に汲々し、加ふるに、結社、立會の盛なるを以てし、雜誌の流行すること、日一日よりも甚だしく、彼に

某會雜誌あり、此に某社雜誌ありて、其多きこと枚擧するに遑わらば。是れ實に文明昭世の爲めに質すべき事ありと雖ども、其弊たるや、雜誌を以て徒に體面を飾り、外觀を装ふの具と爲し、収むる所は淺薄輕浮の言に過ぎず、是を讀みて貴重なる時間を費やすに過ぎざるもの、蓋し亦少あしとせず、是れ實に不肖余の竊に歎ずる所あり。本會は創立以來月を閲すると、僅かに拾ヶ月のみ。而して、今や、已に此の雜誌の出現を見る、世人、或は、其の急進輕舉、他の雜誌と其弊を同ふするを疑はん。然りと雖も、余は此の雜誌か將來に向て、本會に與ふる所の効果は、決して鮮少あらざることを信するあり。然りと雖も、雜誌の實益は雜誌の品格如何に因す。雜誌の品格如何は本會善美の如何に因す。而して本會善美の如何は實に萩中學校の體面如何に關するあり。本會々員中、俊才博識の士に乏しからずと雖ども、多くは皆、青年の士、血氣未だ定らず、智識未だ熟せず、經驗に富まざるもの多し。則ち金の方さに治に在る者あり。玉の未だ其の光りを發せざる者あり。故に、余は我が親愛ある本會會員の志を顯はし、本會々員の感を寫し、本會々員の口に發し、本會會員の手に成りたる此の誌上に時としては慷慨、時としては痛快、時としては切實、時としては爽快ある記事を載すると同時に、此雜誌か能く一種特質の品格を具へ、尋常一様の雜誌は勿論、他の善美を以て名ある學術雜誌と雖ども、皆其の觀を異にせんことを切望するものあり。良家の子は敢て其の家聲を墮さず。長防二國は良家あり。殊に萩は良家の嫡宗あり。夙に名聲を四方に馳せたり。長防學生殊に萩學生は良家の子あり。夙に先輩の偉風を聞けり。孰れか、能く碌々として自から卑下に安せん哉。況んや、身を挺て、學

術世界に跳入し、海外の文明諸國民と相馳騁するの活潑有爲の精神を有し、萩の名聲を維持發揮擴張せんとする我校友會諸君に於てをや。余は諸君が必ず能く積年の津勳を経て、百折挫けず、遂に其の志を成し、學術世界に、實業世界に其功績を奏し。我か山口縣萩中學校々友會員中の出身者たること知らしめんことを望むあり。果して然らば、此雜誌頼て以て其の光彩を増して、本會雜誌たるの名に背かざらんとす。是固より一朝一夕に望む可きことに非らずと雖ども、亦、決して至難の業にあらざるあり。余の今日望む所は、唯諸君か能く其議論を丹心に發し、其の厥懷を至情に興し、實にして虚ならず、直にして誕ならず、以て此の雜誌をして貴重敬愛すべき眞個の金蘭集たらしめ、以て本會會則の目的を達せしめらるゝにあるのみ。而して、余は此の望の決して空しからざる事を確信するあり。豈に欣抃して祝辭を草せざるを得んや。而して、余は、今、會員諸君に向て祝辭を述べると同時に、又、聊か杞憂を吐露し、豫め諸君の注意を請はんとす。是れ誠に老婆心の已む能はざるに出て、大方の嗤笑は固より甘受して辞せざる所あり。夫れ、事は之を創むること却て易く、之を守ること實に難しとす。然れども、吾會は幸運あり。障害の恐れは無かる可く、吾會員は明あり、勇あり、能く困難に打勝つや疑あし。然れども、自ら安し自ら恃むときは、不祥是より甚しきはあし。故に、前途もし關あるときは力を併せて之を排し、坂あるときは勇を鼓しても之を攀んどの覺悟は今より豫め無かる可らず。

嗚呼本會の性質を知らんと欲せば、此の雜誌に於てす可く、校友會員の精神を知らんと欲せば、亦この雜誌

に於てす可し、校友會は校友會員を代表する者あり。校友會雜誌は校友會を代表するものあり。我畏敬する校友會諸君以て如何とあす。聊か蕪辭を陳ねて祝詞に代ふ

論評

抱負

特別會員 能勢 頼俊

霹靂一聲歐亞の水山を破碎し、約して以て膝下に俯伏せしめむとは、歷山大王の抱負ありき。奈破翁大帝の抱負ありけらし。天を怨みず、人を咎めず、諄々として仁の一字を説き、以て百世を化せんとは、孔夫子の抱負ありき。難行苦行、人間の歸趣を覺悟し、大慈大悲、以て億兆を度せむとは、釋迦世尊の抱負ありき。愛を以て人間を掩はんとは、基督教祖の抱負ありき。抱負は獨り個人に限らざるあり。觀よ。天に二日あり、國に二君ありと觀したる、彼得大帝以來、汲々乎として機を制し時を利し、土州を打て一團とあさむとは露西亞帝國の抱負にあらざや。如是列國の意嚮を察知し、東洋に濼然として、獨力以て歐亞の死命を制せんことを期するは、豈我大帝國の一大抱負にあらざや。抱負の謂は大志を抱くにあり、大任を負ふにあり。志す所小、任する所大ならずといへども、抱負の語下すべからずとあさす。但吾人が説かんと欲する所は、抱大志にあり、負大任にあり。小志にあらざ、小任にあ

らず。

比馬拉の山、雲霄を摩して、空巒二萬九千呎。崇高此の如しといへども、山頭一尺を嵩くすること能はず。太平の洋、乾坤を浸して、渺漫六千八百萬方哩、其深き處、殆五千尋、浩淵此の如しといへども、水面一尺を益すること能はず。卉草土石、變すとすへども死變のみ。飛禽走獸、長をといへども徒爲のみ。要するに、一定視を逸する能はざるあり。

之を人間に觀んか。其初や、呱呱乳を求む、蠢爾たる一動物のみ。其壯なるや、驅幹六尺、力能く鼎を扛げんのみ。之を他の虎豹鯨鰐の群に比するに、豈にそん匹儔をらむや。雖然、一旦穢然として大悟するに至りては。日月を懸けて明ありとなさず、乾坤を指して大ありとあさす、鐵石を打て硬ありとあさす。直前奮發、其爲さむと欲する所を爲さずんば息せず。古往今來、其人に乏しからざる也。

人間此の如く至靈ありといへども、世に醉生夢死の徒多し。蓋其の至靈たる所以を悟らざるあり。佐藤一齊先生曰く。

人須自省察。天何故生我身。使我果何用。我既天物。必有天役。天役弗共天咎必至。省察到此。則知我身之不可苟生。

省察茲に至らば、則奮然として謂はんとす。舜何人ぞや。予何人ぞやと、憤の一字は、是進學の機關あり。人間の抱負、未だ會て此の邊より生ぜずんばあらず。

人間の抱負は、偉大あらむことを要す。昔者人あり。天を仰ぎ、卒然として謂て曰く。天下の至寶あり。取て以て自家の篋底に藏む、亦可あらざるやと、於是。半夜、東山の巔に上り、滿腔の希望を鼓して、旭日の昇るを待つ。何ぞ圖らん。瞳朧として前山の巔より出でんとは。乃倉皇山を下り、休養半日。而して他の日出の山に登る。心私かに之を獲んことを期せり。天明。旭日又他山の巔より昇る。乃撫然として山を下り、三日の糧を裏みて、三たび日出の山に登る。而して志を得ざりき。志を得せど雖も、絶望にあらざりき。下上十數。國中最高の山に登る。而して天日遙かに水天髣髴の邊より現はる。於是乎。杲然として天の遂に攀つべからざるを知れり。踵を回せば、氣象萬千。國一瞬の中にあり。曩きに登る所の諸山、一として我に朝せざるはあし。翻然として謂て曰はく。我れ立志の要を得たりと。

諺にも有之。曰く。棒はば願うて、針程かきふ。天日を取らんと欲する者、僅かに國中最高の山に登ることを得たり。而して昊天を距る、果して幾許ぞ。若し最高の山に登らんと欲する者は。未だ嘗て第五第六等の山に上りて止まらざらんばあらず、百里の路は、九十里に半ばすといふも、亦此意を寓するに外ならざるあり。人世の行路は、大道砥の如きものにあらず。峻山巨澤、長江大河、其間を横絶し、人ごとに行路難を歌はしめずんばあらず。故に十を希ふもの、其方を得ずして、八に止り、八を希ふもの、其方に苦んで、六に安んぜ。天下の通理。但此間、非常の道ありて、存するを知らざるあり。

Where is the viel, there is the way

志の存する所、道必ず存すと蓋し警語あり。機に制せられずして、機を制する底の人物に有らざれば、此の眞趣を解する能はざらんすとす。古人云へることあり。曰く。

世間第一等の人物にあらむと欲する。其志小からず。余は則ち以て獨少ありとす。世間生民多しといへども、數限りのれば、恐くは茲の事の濟し難きにあらざること。前已に死する人の如きは。則ち今に幾萬倍す。其中聖人、賢人、英雄、豪傑、勝て數ふべからず。我今日未だ死せず、則ち稍出頭の人に似るも、而かも明日即ち死する、輒ち忽ち古人の籙中に入る。是に於て。我が爲る所を以て。諸を古人に較するに。比較するに足るものあし。是則ち愧づべし。故に志あるもの、まさに古今第一等の人物を以て、自ら期すべきあり。……言志録

吾人は諸子に囑するに、偉大なる抱負あらむことを以てせむ。但し其志を立つるに於て、一個の要諦あることを諒げざるべからず。曠古の偉勳を奏して、芳名を千世に流さんとするもの、其志を樹つるに當りてや、自家根底を叩きて、俯仰天地に羞ぢざる所莫るべからず。要は、誠心誠意人類に寄與し、貢獻せんと志すにあり。

觀よ。歴山王の大業は、其の骨未だ冷かからざるに、業既に土崩瓦解せしにあらずや。奈翁の大望は、中道に頓挫し、一敗地に塗れたりしにあらずや。人をして、愴然として英雄末路の嘆を發せしむるにあらずや。之を要するに。此等英雄は血を以て天下を争はんとせり。其初一念を檢し來れば、滿腔、唯一個の功名心のみ。

即所謂野心の發作に過ぎざる也。

翻て孔子に觀よ。釋迦基督に觀よ。孔子の世に處するや、流離困頓、厄に陳蔡の野に苦みたりしを。而かも、其の教化は雨露の如く、後昆に霑被するにあらざや、釋迦の教を説きて、異端の排する所とあり、人其死處をすら詳にする能はざるを。而かも、其の教義は百世の下、億兆を度して餘りあるにあらざや。耶蘇の教の如き、亦俗吏の厭ふ所とあり、骨を十字架上に曝せりといへども。而かも能く斯民の救世主を以て目せらるるにあらざや。之を要するに。此等の聖人は、涙を以て天下を蔽はんとせり其初一念を檢し來れば、唯是誠心誠意、人間に寄與する所あらんと欲するに外あらざりき。

於是乎。諸子は其志を立つる清淨無垢、誠意心より出でざるべからず。一個欲望の願使に任して、快を一時に搏せんとするが如きは、所謂緣木求魚の類のみ。或は其志を得む、然れども、末路の嘆きくんばあらず。抱負偉大あると共に、小心翼翼たるものあかるべからず。偉大は疎放と似て非あるものあるを知れ、抱負正大あれば、即ち度量寛弘。小心翼翼たれば、則執持恭敬遜思邈々。所謂。膽欲大。心欲小。とは宜あり。膽大とは度量あり、心小とは恭敬あり。二者宜しく之を兼ねべし。始めて全きことを得む。吾人の敬畏する西郷南洲翁はいへり。凡大事を爲さんと志すものは、其着歩を慎獨の邊に於てせざるべからずと。恭敬の謂あり。獨を慎むは、自ら助くる也。天は自ら助くる人を助く。諸子希くは一大抱負あれ、而して、歷山奈翁の血を以て蔽ふ的の抱負ある勿れ。孔、釋、基督の、涙を以て蔽ふ底の抱負あれ、之を細心慎密に起し、流芳千世を以て期とさせよ。勉旃。

良心觀

(第一)「オート」ought

兼常 清佐稿

一友曰く「我國に於ては如何ある能辨家の辨舌にも如何ある文章家の言論にも、到底完全に説明すべからざる語あり。セントルマン然りホーム然り而して彼オートも又其一あるべし」と。宜哉言。眞に邦人はオートを説明すべき語を有せざるあり。夫英人には英人的理想あり邦人には邦人的理想あり彼のホームやセントルマンやオートや皆彼が理想に非ざるか邦人此語を固より宜あり。然れどもオートてふ語か何を如何に意味するかは先研究すべき問題あり。

オートは實に「爲さるべからざる」ことを意味す。然れども肉躰の爲に、意志の爲に、感情の爲に、彼等に満足を得しめんか爲に若しくは自己に満足を得んか爲に爲さるべからざるに非ず。此一語の意義は斯る平凡ある卑賤あるものに非ず。遂に潔白ある純白ある一物ありて存す。オートは其一物の爲には肉躰に關せず意志に關せず、將た感情に關せず、紛骨碎身以て彼の一物を満足に置かんとするの意あり然らば彼一物とは果して何ぞや。是義務念一無上の義務念、即上帝に對する義務念一上帝の一命一令に背くことかく差ふことかく以て是を満足にかんとある道念あり。基督教國民の將に然るべき一理想を躍如として言ひ現はせしも

のに外あらざるあり

(第二) 絶對大法 (其一)

茲に一大法則あり。絶對價値を有す。聖賢も君子も釋迦孔子も摩西もエホバも彌陀も基督も共に等しく伏して此則に従ひしあり。拔山盖世の英傑も健雲靈動の文豪も、凡そ人て人人は朝と夕となく等しく彼に服従せざるべからず。斯る絶對價値法則あり。曰く「汝一個の則とせる處か常に萬人にも則とせるべき汝の意志に従ひて行爲せよ」と。三更静夜熟考すれば必ず是れか絶對にして必ず是れに吾人か服従せざるべからざるもの有るを發見せん。是實に絶對者かあらゆる威嚴あらゆる信仰を以て此自然界に投げしものかれはあり。實に此自然界に於ては那處此則のちからざらん。白雲寒き西乃山、光明暖き橄欖山も、氷山暗き北極も、猛獸狂ふ熱帯も、セントペルナーもトラファルガーも、太平洋も富士嶽も、皆此法則に掩はれたり。實に此則は普遍にして宇宙至る處に布かれたり。斯くして吾人の行爲は左右さる。

(第三) 絶對大法 (其二)

嗚呼隆る哉絶對法よ。此森羅万象の靈長ある此貴き人生を、將た聖賢を神子を遂に服従せしむる此絶對法主宰者は、果して超自然世界に在りや。所謂不喜不惡の所に在りや。勿れ、茲は宗教問題に非ず良心觀あり。吾人暫く之れを問はず。然れ共確に吾人は、彼を差別して吾人其物に在るを疑はず。何そや、我理性あり。確に此絶對法、貴き嚴き絶對法を我理性の最も確實に明瞭に指示せるあり。見よ然らば彼聖賢も神子も拔山の英雄も豪傑も其人其人の理性の示す所を行ひしあり。理性の命令に服従せしあり。何の不可かれあらん、何の奇かれあらん。吾人は理性の命令に背くことを能はず。反言すれば吾人は先天的に此大法を悟りて來りしあり。又服膺して來りしあり。我終生此大法と離別すること能はず。「吾人」てん語は已に此大法を含有せり。茲に於て吾人は曰はん、絶對法は我理性あり。我理性は斯くも尊き斯くも貴きものに成れり。實に我絶對大法は自然界に在りと。

(第四) 絶對大法 (其三)

絶對大法は事實として存す。誠に心理的現象あり豈空のものあらんや。臆測揣摩のものあらんや。必ず確固たる根本基礎あるべからず。若し是れをしとせんか、彼大法の理性は空に存せざるべからず。無根とあらざるべからず。然れども吾人は理性か空に(自然界外)存して、且自然界に實事に命令することを許さず、肯せず。必ず此理性の根本あるべからず。自然界の經驗即是れ。見よ吾人は、幾朝幾朝雞鳴と共に、常に燦たる彼の日輪を仰く。即我眼球は毎朝毎朝彼爛たる光明を經驗せり。而して吾人は其真美あることを悟る。吾人は幾夜幾夜暮鐘と共に、常に燦たる彼の明星を仰く。即我眼球は毎夜毎夜彼赫たる光明を經驗せり。而して吾人は其真美あることを悟る。或は銀蛇叫ふ大海に、白雲迷ふ深山に、あらゆる美ある現象を經驗して、始めて美ある理性は構成せらるゝに非ずや。斯の如く實に総て理性は或は真ある或は善ある等の外界經驗に基く。

然らば彼絶對法と雖も、亦我外界の經驗に待たざるべからず。今暫く彼と背て「則とあるべき吾人一箇に行爲せよ。我社會は將た國家は四千五百萬皆異なる方向に走せ、獨立殊行し、衝突反離紛々擾々ど一眇の社界の秩序、國家の統一、斯く整然たるを得ざるや必せり。オ、是吾人の瞬時も堪ふべからざる所、最も忌むべきべき彈べき所あり。絶對法實に茲にあり。吾人は此忌むべき苦痛悲運を避くべき最大希望を打ちかけて、切ある情緒に堪へやらて此尊き絶對法に服従しつゝあるあり。見よ此絶對大法と雖大なる外界經驗に基せり。實に此絶對大法は雜々ある希望や情緒や多く外界事件を抱て大に吾人に命令せるあり

(第五) 善と惡と (其一)

茲に暫く熟考せよ。人生の四圍は朝夕春秋悉く多くの事件を以て滿さる幾時幾時着々事件は是を襲へり而して或は世に泣き飽ひて墮落するあり或は人生を厭て天に樂むあり。或は子子風潮を追ふて本命するあり誠に其事件に對する術や頗る多し。千差萬別量るべからず。然れども其棺を蓋ふ所當て定むべき評は只善のみ只惡のみ。アハレ白骨徒に朽て靈魂長に歸らず卷毘一片の薄煙那處にか迷ふ。オ、善か惡か幻のみ夢のみ。否嘆するを止めよ。善かし得べし惡捨つべし。惡とは善とは誠に彼完全なる絶對大法を我主觀的動機として起りし行はれあり。是れに反せるは悉く惡あり世人舉て皆然く云ふ乞ふ觀せしめよ。

彼楠公正成は善人ありと云ふ。彼れの行爲は確に明に善あり。建武延元天下麻の如く乱れ白雲崩れて天暗く地軸碎て人迷ふの時誠忠義烈滿腔の熱血憤慨舉て櫻井驛とあり淺川とあり悲哀逆運を歩りしあり然れ共其裏面に於て名聲勳功花と香り水と流れて止まず是所萬人行ふて悉く萬人利す彼は實に萬人の則とあるべき行を致せり彼か躍然笠置山頭を降りし時は彼の主觀に必ず此絶對法の誦然たりしに非ざらんや善たるもの皆然り。松陰然り龍馬然りニユートン然りワシントンまた然り。吾人は茲に再び大呼せん「善ある行は完全なる絶對大法を主觀動機としての行爲あり」よし若し其大結果が果して万人を利せしとせよ或は万人を害したりしとせよ常に善あり。思へ彼の楠公も淺川アハレ南風競はす吉野の奥に長に殘夢冷かりしに非すや。而も且世人は大に是を善として多くの同情を表しつゝあるあり。

(第六) 善と惡と (其二)

吾人は斯の如き善惡理性を以て、多くの善惡人物を觀つゝあり。楠公は善ありと云ふ、ニユートンは善ありと云ふ、或一定の善惡の主觀的方面は只斯の如し。然れど彼絶對大法に服従して起せし行爲は果して何々や。忠か、孝か、慈か、悌か、公益か、啓發か、是れ皆善あり。和か、信か、義か、愛か、奉公か、表彰か、是れ悉善なり。彼も善も善、善一善實に幾億萬と計るべからず。善ある事柄は頗る多し。到底悉く舉ぐべからず。然らば絶對大法に背て起れる行爲は果して何ぞや。不忠か、不孝か、不慈か、不啓發か、是皆惡あり。不和か、不信か、不義か、不奉公か、是悉惡あり。惡一惡も亦非常の大多數を有す。到底計るべからず。豈善と現て惡と亡ひ、惡と亡ひて善と現はれ、アワレ造化の人生に於ける百鬼出沒、鬼神も端睨すべからざるあり。斯くて社會は一日一日善と、惡と、光と、暗とに織られ行く。

實に我是の善と惡とは主觀的に於ては只大法服従の如何のみ。二途のみ。然れ共、其れが客觀的に行爲として吾人が眼球に映するに於ては、實に幾千萬と計るべからず。善惡の内容は無數あり。吾人は茲に至てや、或は善或は惡と、口に吐くべし筆に振へし、然し何を以てか其を客觀的に行ふを得ん。善と云ひ惡と云ひ坐土の馱空論駁評に止るべきか、忌むべき有名無實の業か。宜あり其れを、動機(主觀的)にのみ名けしければ、何ぞ客觀的に左右するを得んや。否、斯の如き道德古今に在りし、東西に在らず。オ、吾人は何を以て善惡の内容を知り、善を行ひ惡を絶つべきか。將た主觀にのみ別ちし善惡を如何にしてか客觀に行ふ、是善惡の重要問題あり。

(第七) 善と惡と (其二)

勿れ、嘆するを止めよ。善と惡との内容は、確固明瞭、茲に在り。何そや、曰く、「世界的共通道德目的に向て進め」と。

夫れ我大帝國は忠を是れか基礎ありとす。我國民は是れに向て進む。支那帝國は孝を是れか基礎ありとす、彼國民は是れに向て進む。或は印度に於て、歐州に於て、米國に於て、悉く斯くの牀度あり。凡そ國異あり、人種異あり、國旗異あり、衣服異ある所悉く道德的目的異なるを見る。表面觀は或は然らむ、然れは其裏面に於ては滾々と流れつゝある暗流は、其異なる目的をして遂に一大總目的の大海に運ひつゝ、あるに非ざるか、即世界各国共通にして最高目的は非ざるか。

今若し、一國に於ても、其國民の共通目的あらずとせよ、其國人目的の一致せざらんか、勿論彼は離散破滅に終るや必せり。然れは是れを廣く此地球の上に置け、果して如何。戰亂、一戰亂、衝突散離煙塵黒く叫喚高く我日輪も我嫦娥も、長に暗々裏に葬られ、死屍ヒマラヤの大嶽をなし、鮮血太平洋の大海を爲し、國てふ國、人てふ人は長に地球に跡を絶ち、誠に彼の明月の後を襲はされは止まざるべし。

然り古今東西戰亂、それは絶ざるあり。將た又た未來に於ても然るべし。見よ或は彼に三十年の大戦役あり、彼に南北の大戦役あり、或は英と或は佛と、或は西と或は米と、或は何と何と、彼と是と、青史は長に戰亂相踵き相接する鮮血の跡を印せり是掩ふべからざる事實あり然れども是常のみ是或は國相の政事策として蠶食策として或は宗教の衝突にして只人生表面の最小波瀾のみ只人生表面の弱点のみ斯の戰亂彼の衝突願れば只是のみ。敢て這般の道德的目的の爲に非ざるあり。未來に於ても決して是種の戰亂をかるべからず。是第一に道德最大の目的の在て存するを證するに非すや且暫く是を裏面に觀よ

遠つ人妻も來る世とかりにけり思へは哀れまづら任用媛

オ、是是を歌ひ得て妙ならずや。人生道德の進むに従ひ飄然笈を負ふて遠く雲山萬里の異國を隣家の如く學を究めんとする留學生あり或は幾千船舶檣上獅に聲に將日章に易々然貿易を營む海港あり。或は遂に黃白人肩を磨す内地雜居あり。我道德の最大目的のなかりせば豈此親睦を視るを得ん形くるを得ん吾人暫く其窮究目的の何たるを知らず或は最大快樂あるべく、或は超意識の本意あるべし。兎に角是れか存

するは亦大事實あり。然り、然り、故に吾人は云はん、再ひ茲に再説せん、我道德的に於て、我絶對大法を動機として、起て此共通目的の爲に、與て力ある行爲は是完き善にして、其人は即善者あり、是れに反せる行爲は悉く惡あり、又惡者あるあり。

(第八) 理想

茲に於てか吾人は最も床しく最も慕はしき我理想を象くることを得。否人生は茲に於て道德的理想を爲す。抑も吾人か其無意識に、豊き乳房を求めつゝ常に耳かれし桃太郎征伐話に、小さき腦に、己に桃太郎より多くの力を加へ勇を加へ、己も躍然鬼か島攻撃に向はん事を欲せしからん。斯くて總ての人は養生されしからん。

吾人か漸く姥に誘はれて、雑々ある校の塵埃を呼吸し始めてより、或は楠公に、或は正之に、可憐に歴史人物に耳かれてより、木刀竹馬奮然と楠公に正之に、より多くの勇氣や忠義を加へつゝ、已れ竹馬に鞭ち庭の夏草踏み躪りしあり。斯くて總ての人は養成されしからむ。アハレ未た一丁字知らずして端なく象る我理想の雛形、斯くて總ての人も養成されしからむ。

是に於て或は歴史に讀み講義に聞きし古今歴史的人物は兩細々たる破窓の下に風颯々たる壞机の側に一步一步と聯想すれば或は楠公或は尊氏或は時宗或は義時或はコロムエル或はシイザア善と惡との差別觀念か涌然方寸に溢れんとし天に仰き地に唾し憤怒机を打ち嘘嚙舌を噛む。其度其度彼れより善は是れより善にと倍一倍の行爲を以て躍如として宇宙唯一大英傑か我胸腔に大步し來らむ。

斯くて幾億幾千空想に空想を重ねつゝ遂に吾人は其意中の英傑たるに戀々たらむ。斯くて其末吾人は人間として能ふ限り能はしめらるゝ限り、倍一倍完全に善人として一點不缺の道德的内容を作り日夜是れに達すべく是れを現實ならしむべくあらゆる方術を取て刻苦奮勵苦心に苦心を重ねて是れを務めん。

茲に於て吾人の慕しき理想あり、道德的理想あり、
或者は正成より、或者は西行より、或はニュートンより、或はピスマルクより、將たセキスピヤより、ソクラテスより、各此理想を仰きつゝ、世は彌進歩に進歩を重ねつゝあるあり。故に吾人は昔の道德的價値の卑くして、理想の益尊きを知る。

(第九) 理想 (其二)

斯如くにして子子汲々として高き理想の跡に喘きつゝ、雨の朝も風の夕も倦むことかく撓むことかく、遂に其理想は捕られん、現實されんか、喜悅、大喜悅、再數倍の理想あらん。理想成て又理想、理想盡て又理想。無限—無限奥又奥、天壤の限り、地軸の極み、幾億幾兆長く大きく、全く麗しく益信に益美—道德は是に依て無限に進歩せん。

夫宇宙は物と心に織られつゝ、普遍律に伴れ無限に活動回轉す、彼燦たる星、爛たる日、明かに是を吾人に示しつゝあり。

而して吾人は宇宙に存す。五十年の生命間と雖、五尺の身体の一粟と雖、又此宇宙に從て共に活動せざるべからず。見よ、此尊き理想の無限活動進歩は、明に是に伴ひつゝあるあり。理想—理想吾人は此尊き麗しき理想に向て、非常の感謝を致さるべからむ。

(第十) 良心

良心、良心は即ち以上の諸項の大總括あり。即一事一業一擧手一投足其絶對大法に差はさるか將た背けるかを鑑みて、(過、未、現、共に)其法則に従ひて、其れを主觀動機と爲し、以て吾人の行爲に、其理想を現實せしめんとする大意識に非ざるか。

見よ、觀よ、視よ、彼の俘囚を觀よ、長に、嚴かる冷たる鉄窓の下に、切齒大息、悔恨號泣せん。否、否、オ、決して他人の徒事に非ず、吾人其物も幾度か幾度か彼に益される號泣敢無からんや。見よ、觀よ、視よ、彼慈善家を觀よ、長に暖き愛情の下に、大笑微笑喜々悦々たり。アハレ、吾人呼吸の白き間に於て果して那の時か彼れの安易を経験すべきか。アハレ吾人如何にしてか彼れの境に到るべき。非乎、オ、然らば白骨雨に冷たる所鞭つ人なきを希はんのみオ。斯の如く前者と後者と良心は善を迎へ惡の排せらるゝを見るべし。アハレ幾年幾月夢の如く幻の如く、淡雪の地を拂ふか如く、紅葉の枝を辞す如く、瞬時瞬時盡き行けり。其消行く心の喜怒哀樂只吾人の良心にのみ懸りつゝあるあり。オ、良心如何に吾人に大なる事あるよ。而して尙我理想と共に一步一步進歩すべきか。

願れば吾人は十有五年幾多幾百の惡あることを爲せり。而して吾人記憶に印せられてより、最も新しき現在に於て倍一倍の苛責を感ず。且吾人最も古き小なる惡事か、一夜一夜靜思する毎に、彌々大に感せられ、倍一倍の憂惱を吾人に與へんとせるあり。アハレ聖人からぬ神子からぬ人間に於ては必ず然りと推察するを憚らず、否大事實をあらむ。

果して然らば是我良心は活動、宇宙理想と相應し、一步一步と智育情育の發達につれ、益確固に善惡を批判して益惡を弾くものに非ざるか。

茲に於て我良心は發達するを知る、研きて益算きを知る、修めて益光るべきを知る、修めされは益光きを知る。果して性善か性惡か、暫く知らず。奮勵一番倍一倍の良心の銳鋒を以て、紛々雑々、進む如くにして退き、在るか如くにして亡ひ、亡ふか如くにして現はれ、止まる如くにして老ふ、出沒變化襲ひ懸る四圍の事件に、一層の辨明に一倍の確固ある反撃を加へつゝ、巍然赫然最も完全なる無缺ある、理想の人物を、構成せざるべからず。實に吾人は此靈妙なる神聖なる良心に依て斯の如き靈長的行爲を致ることを得、オ、隆哉。

茲に科學は隆々と發達し來り、生存競走は示され、強食弱肉の理は教へらる。世は一日一日と無味に無趣に、塵蒙々として宗教は地を拂ひ、聖賢は亡ふ、愛も亦く潔き此人生に何の處にか渴せる吾人は、生命の光明を認め得ん。

ア、此人生に於て神を人に接せしめ、人をして神に導くべき清き尊き生命の光明は、只此良心のみ、只良心

のみ。此良心の光には塵も清く汚も尊く、イテンの庭も茲に在り、シオンの琴も茲に澄む。良心、ア、良心は吾人の命あり。

(第十一) 結 論

良心斯の如し。吾人の前途斯の如し。是吾人か良心にて觀し所なるべきか。是れ以て結論とすべきか。否、否、オ、否、決して然らず。或は一面に於ては吾人の前路、良心の性質、將して斯の如しとせよ、尙大に恕すべからざる一點其一面に在り。而して吾人は前論の内に於てよりも、寧ろ此一面に生活せり。吾人此一面に入ると同時に、先づ絶叫せん、「以前の彼の觀は誤謬あり、大誤謬—最大誤謬に非ざるか」と。何故ぞや、何故ぞや、乞ふ吾人に觀せしめよ。

靜に思へ、吾人は、明朝如何ある所にか行かんとする、今夕如何ある所よりか歸りし。オ、誠に吾人は中學一生徒に過ぎず、良心の觀は餘りに「畏れ多き」事あり、「勿体なき」事あり。

夫社界に宗教の存する、學校に校風の存する皆同一物のみ、大小の差のみ、名稱の差のみ、故に彼にオートの非常の誠實を以て上帝に服す、上帝に非常の威嚴と信仰と懸れり、依て斯る好宗教在らしめしあり。

我校風に於ても是に等し。

抑吾人靜に吾人の行爲、吾人の團體を見る度に、吾人は必一種の不可思議の數多に驚かん、實に不可思議は吾人の團體に伴ふ。吾人再び靜思すれば、益不思議彌々不可思議に、窮る處吾人は校其物に非常の恐怖心を起さ

ん。而して恐怖—恐怖、遂に嚴正及ふへからず、犯すべからずとして、三度熟考の末遂に是に依頼して其嚴密に依て行爲せんとす。是校風其物あり。而して彼不可思議や、恐怖や、依頼の依て起る根本物は即是良心—無差別的良心に非ざるか、而して其研究可あるべきか。

來て見れば左程にもなき富士の山釋迦も孔子も斯やありけん

是村田清風子の佳什あり。

天の原照る日に近き富士の根に今も神代の雪は残れり

是れ枝直子の詠歌に非すや、あゝ何たる差をや。

或は武藏野の平野に立て岬然峨々巍々と雲涌き星懸る富嶽を望めは宜かり其高峻崇嚴犯すへからず眞に造化の秘密に泣かん。而て匍匐々遂に登山頂上せんか、其崇高嚴峻ある程又一望千里秘密の雲は忽ち散し其卑く低きを感じ豫想外に驚かん清風子も亦宜かりといふへし。見よ事々物々其未だ知るべからざるに於て秘密の雲の閉ち重されるに於て其秘密の彌々尊く嚴崇あるを感せり。而して其一旦光明を得て秘密を拂ふときは其れ夫其物の益卑しきに驚ん。又之争ふへからざる事實あり。然れば彼の上帝良心皆是數を免るへからざるか。果して然らば彼神學の發達につれ一日一日漸々彼オートの神聖は減し減して終に汚き淫き慾望と伍するに至るべきか。我學校と雖是に等し彼の良心の何たるを知る度に一段一段其校風は消滅すべきか。果して斯の如くんは又吾人學問を奈何せん、社會の發達を奈何せん吾人の四圍は誠に狭隘あり勿れ勿れ、攻むる勿れ

校風消滅に非ず、勿れ第一世紀のオートは第二十世紀のオート其嚴其崇決して衰へず。第三十世紀に於ても百世紀に於ても果して然り。而して學校に於ても又斯の如し。

寺小屋の校風()も聖代の校風も其嚴其崇増さは増せ決して消滅せざるあり。而して第三十年の校風も第一十年の校風に於ても果して然り。何に依て斯く云ふ、思へ彼れは智識あり而して是は信仰あり

彼の富嶽觀は一種審美的智識あり、然れ共是の校風は一種の良心的信仰あり、宜かり彼智識を得るに於て自然に胸中雲は拂はれん。而して信仰に至りては如何に

バイロン曰く「信仰は總ての智識の奥にあり」と宜かる哉言。實に信仰は總ての智識の根元あり。其智識の増進發達又其嚴密赤誠は動し得ざるあり

アハレ良心觀發達せよ進歩せよ校風其物は一として茲に在り嚴として茲に存するあり
然れ共一然れ共其外界の僅々然微々然たる研究を嫌らすとあし誤謬視一果外視一唾排する底の信仰赤心溢る計り胸中に存せざるべからず。否然らされは不可あり、其良心觀も何かあらむ。

即斯る赤心誠實ある信仰存して、而して其等の良心を觀せよ、蓋し光明赫々嚴として宇宙に雄飛することを得ん。

オ、此オートの確固ある觀念信仰を持して、良心論を待たざるべからず。最大必要件は茲に在り、此瞬間にあり、最大希望は茲に懸れり、オ、總ての良心觀等の最大主眼たらざらざるを得んや。

ア、良心一良心、此尊き貴き良心に雙手を舉て感謝せよ。

同窓諸子に告ぐ 第五年級 天野 正六

世の慷慨者流、筆に口に、青年學生大に墮落したりと論唱し、大言壯語かくせざるべからず、しかすべから

せと説破し、議論紛々滔々底止する所を知らず。其救濟策と自稱するもの、大多數は論理にのみ留り、殆ど實踐窮行すべからざるのみならず、往々初心者を惑誘去て適從する所を失はしむるに至るもの亦少なからず。

豈慨嘆に堪ゆべけむや。思ふに、是れ短才薄識無經驗の青年が濫りに悲痛慷慨を學び、徒らに辨論攻撃を弄ぶの弊害に外ならず。嗚呼濟々たる經世家中、誰か起て之を救治の策を精講するものぞ。余固より不肖の一匹

夫かりと雖も、胸中一片稜々の氣骨あり、赤誠あり。彼等の誤れるを見て、聊か一針を彼等の項門に加へ、又敢て我同窓諸子に警告せむとするの念を禁する能はず、讀者幸に余を以て彼の所謂慷慨者流に比する事勿れ。

現時青年學生風紀の敗類紊乱はとも何に起源するか。之れ容易からざる大問題にして、大家も屢々論決に苦む處あり。不肖余固より大問題に對して明晰なる斷案を下すこと能はずと雖も、恐らくは社會に一大怪物横

行し、其害毒の青年學生に及びし結果に他からざるべし。然れば其怪物惡魔とは何物ぞ。藝娼妓か、曰く、否。彼等元來人倫に反逆す。惡は惡かりと雖も未だ以て怪物とあす可らず。傾城の奥深く座を玉簾の内にか

まへ、緋裙翠袖に蘭麝を薫らし、香粉燕脂に雪膚紅唇を作り、莞然として詭言媚色人を欺き、貴を送り賤を

迎へ、若と語り老と臥し、以て一夜に千金の山を築くは彼等の本領あり。彼等の青年社會に及す所の害毒實に云ふべからざるものありと雖も、彼等は既に惡の看板を懸けたり、而して之に近くは寧ろ青年其自身の罪あり。且や此惡を學生社會より比較的隔離の位置に置くに於て方法なきにあらず。余が所謂怪物は本領を失したるもの、謂かり、紳士として資格なく、教育家として其責任を全ふし盡さざるは其本領を失したるもの、之れ即ち怪物惡魔あり。教師或は父兄たる密接關係を有するものにしてかくの如くむば、我々青年の識らず知らる彼等怪物の一部に捲込まるゝに至るや、殆ど避くべからざるあり。

廣く活目を開きて映し來る社會の狀態を觀察せよ。鎖國攘夷の夢浦和の砲聲に破られしより以來、大和民族得意の猴猿的才智を巧みに應用し、日夜孜孜兀々として泰西文物を輸入し、僅々三十年を出ずして殆ど社會を歐化せしめたり。茲に於てか物質的文明長足の進歩をなし、今や泰西と肩を比して遜色なきに至れり。然れども一利の生ずる所必ず一害の伴ふあり。習々たる歐風に酔ひ、一にも泰西、二にも泰西と稱し、倉惶として文物の輸入にのみ努力し、其多忙繁雜に目眩せし結果、事物の長短善惡を識別取捨するの暇なく、其取りて良藥とすべきものと共に、數多の恐るべき害毒を輸入したり。之に因て大和民族特有の大和魂は漸々消滅し、他に求めて得べからざる東洋的古來の美德は蕩然將に門地を拂ひとす。武家時代を支配せし武士道廢弛して、希に八十の老翁獨り四角八面たるも、哀むべし、議は天下に入れられず、空しく切齒扼腕憤怒勃々として逝て遠く九泉の逆旅に向ふ。時に洋服的人物横行活歩し大聲疾呼、社會を改革せざるべからずと唱し、

或は自ら任ずるに教育家政治家を以てし、紳士を氣取り、寸五の八字髭を無上の利器とたのみ、秋水氷をす三尺の劍をすてて、新形奇異の袂に代へ、意氣揚々、口吻霧を吐き、舌頭雲を湧かし、臆說暴論囂々として巷街に充滿し、下民を迷惑せしめ、後輩を誤るに至る。計らざりき、議會の演壇に譽舎の講堂に、三寸不爛の舌を以て正義を論し大道を講せし政治家教育家が、一變して妓樓に霸を唱へひと欲し、花柳の巷に策を廻らすの愚を至す無賴漢からむとは、或は密室に國法を破るの博徒たらむとは。彼等が心を千々に碎き幽思默考するは富國強兵若くは人才陶冶の策にあらずして、如何にすれば妓婦の心を得べきか、如何にすれば博奕に勝利を得るかにして、時としては青年と妓婦とを接近せしむべき媒介者たり。彼の一時紙上に囂然たりし收賄事件の如き又は教育家の醜聞の如き、現時社會の敗徳を證して猶餘りありと云ふべし。嗚呼實に彼等は腐敗したり、本領を失したり、即ち惡むべき社會の一大怪物とありたり。彼等は不義不信の醜名を被りしかも尙其非を悟るを得ざるあり。社會の道德は此等偽教育家偽政事家偽紳士の爲に蹂躪せられたり。是に於て暗澹たる濁流は滔々として來て、先づ彼等に最も密接關係を有する我々青年を其渦中に巻き込み去らむとす。豈危からずや。

彼の維新當時の書生が、身に短褐を纏ひ、足に高履を穿ち、蓬々たる頭髮も梳らざりし活潑質朴の風は、決して現今の青年に求むべからず。怠惰放肆奢侈淫靡の風は大に行れ、豫期せし大望大志は水泡と消へ、空前絶後警天動地の大抱負は其跡を止めず、青年吞牛斬馬の氣概は消沈し終りぬ、豈悲しからずや。汝の國の青

年を余に示せ然らば汝の國の運命を語らむとは古人の明言、實に青年は國家の根幹あり、骨髄あり。苟も其根幹骨髓にして墮落敗頽せむか、其國の前途は知るべきのみ。血より涙ある我同窓諸子よ、之れを知り、而して現今我國青年學生の腐敗せる状態を観察し來りて如何に感したるか。諸子にしてもし青年風紀の挽回は吾等の負荷すべき大任あるを知らば、余輩驚きりと雖も、諸子の驥尾に附して此難局に當るを辭せざるなり。然れば如何にして吾等は此至大の責任を果すことを得べきか。惟自ら勉め眞青年たるに恥ぢざれば即ち可なるのみ。上流濁れて下流清き事能はば、紳士教育家腐敗して青年獨り雪中松柏の節を保維する事は到底至難の業ありとするは、自暴自棄せし自活力なき元氣なき愚鈍青年の言あり。社會を紊亂し、しかも國家將來の維持繼續者たる我々青年を今日の如き不憫ある不幸ある境偶に陥らしめし偽教育家偽政治家偽紳士を稱して上流とは何ぞ。彼等は實に野卑劣等ある下等社會の人員たり、而して彼等又我に於て何かあらむ。神州男子英骨あり、只海覆すべく山抜くべきのみ。知らばや、生を捨て義を取り、身を殺して仁を成すは是神州の士氣、胸中元氣の活火焰々天を燒かむとするは是海國眞青年の本領あるを。又知らずや、正氣は眞青年の根幹、以て進むべく以て争ふべき事を。之れ有てこそ生命は鴻毛より軽く、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、況んや彼の偽善をや、彼何ぞよく眞丈夫を犯す事を得む。嗚呼我同窓諸子、卿等勉めて浮華誇張外貌を裝ふ勿れ、學藝の末に走る事なく熱誠眞摯の氣を養へ、戰勝の虛名に狂喜し自傲自贊せず、我國の外に強狂ある世界萬國のあるを知れよ、卑近細瑣の事に慷慨せず、國家の前途を天下の大勢に鑑みて天地無窮の外に遼遠に謀れ。斯く有りてこそ我等は眞青年たるを得べきあり、青年風紀の挽回亦期して望むべきあり。吾四百有余の同窓諸子よ、苟も他日神州を世界無双の強國とかし雄邦の名を擔はしめむと欲すれば、必ず先づ偽愛國者たるをやめよ、偽慷慨家たるをやめよ、猛省して己に反り、改悔して正義的大活動をかせ、而して後國家の幸福期して待つべきあり。

知 己 論

第四年級 河野 通毅

天地の間親むべき者甚だ多し。山水親むべく、烟霞親むべく、燈火親むべし。而して其親むや方あり、山水は奇を以てし、烟霞は光を以てし、燈火は秋夜を以てす。山水烟霞燈火は得るに難しとせず、獨り天地の間親しむ可くして得るに難きもの、知己の友これのみ。世に友の類甚だ多し。遊樂の友あり、勢利の友あり、貨財の友あり。而して遊樂の友は遊樂を以てし、勢利の友は勢利を以てし、貨財の友は貨財を以てす、然れども、一朝遊樂勢利貨財の忽然として去るや、捨て、顧みず、故に吾之れを偽友とす。獨り眞の友に至つては然らず、交はるに情緒の連結を以てし、語るに意氣の投合を以てす、我が知己の友といふこれあり。知己とは、讀んで字の如く己れを知るもの之なり。知己に二あり、一は他人の吾れを知るもの、一は吾れの己れを知るもの是れあり。蓋し人を知るや難し、而して吾れの己れを知るや殊に難しとす。吾彼を知る、然れども彼吾を知らざれば知己たり難し。彼吾を知る、然れども吾彼を知らざれば知己たること能はば。知己

は二者の間の相信に非らざればならず。意氣の投合情緒の連結は、知己に缺く可らざるものあり。知己の相交るや、猶ほ骨肉も及ばず、其合して一体とあるや、父子夫妻も能はず、西哲「アリストートル」は、知己を以て異體同心と云へり。能く此の間の消息を解するもの乎。其一旦信じて知己とある、一身を擲ちて知己の犠牲とあし、敢て惜まず、唯心を以て心とし、功名富貴は論ぜる所にあらざるあり。彼れ高位高官に昇らんか、

兩者の間一点の微塵を増さざるあり。我の若し困苦貧賤とあらんか、兩者の間寸分も損せざるあり。

孔明曰く、士之相知、温而不增華、寒而不改葉と、然り、實に然り。彼の未だ志を得ずして隆中に閑居するや、自ら管仲樂毅に比す、而かも時人之れを許すものあし。光りを隠し香を包み、閑雲野鶴を友とし、高眠

すること二十餘年、一朝劉備の三顧の知遇を受くるや、南征北伐、只た知己の恩に酬ひんとせしに非ざや。

然れども、惜しい哉天年を貸さず、漢をして天下を一統せしめざりき。然りと雖も尙ほ天下を三分し鼎足して立たしめしは、實に彼れの功あり、否劉備の知己を得しが爲ありき。土井晚翠氏は當今新體詩壇の騷々たるの士、嘗て孔明を歌うて曰く、

明主の知遇身に受けて、三顧の恩にゆくりなく、

立ちも出でけむ舊廬、嗚呼風遂に衰へて、

今に楚狂の歌もあれ、人生意氣に感しては、

成否をたれかあげつらふ。

知己の相得るや當に斯くあるべきあり。唐の世白樂天あり、元微之と交り厚し、人呼ぶに元白を以てす。唱和する所の詩、極めて多し。微之謫せられし時、詩を作て之に寄す、所謂桐花詩是れあり。詩に曰く、

微月照桐花、月微花漠々、怨澹不勝情、低回拂簾幕、葉新陰影細、露重枝條弱、夜久春恨多、

風清暗香薄、是夕遠思君、思君痕如削、

實に微之は樂天の詩敵あるのみならず、彼れの知己たるものありしあり。二人の交は老つて益々親しく、共に中唐に於ける一種の人材あり。樂天亦吟きて曰く、「不爲同登科、不爲同署官、所合在方寸、心源無異端」と、同心異体は知己の知己たる所あり。微之の死するや、樂天哀しむこと限りあし、其作りし所の祭微之を讀むもの、誰れか一掬の同情の涙あさを得んや。「シセラ」曰く、「知己の交は我喜びを倍にし、我悲しみを半にす」と。然り、歡樂あるも、一人樂しめば何の益もあし、悲哀あるも、共に悲しめば感すること少しとせず。孔子曰く、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、友便僻、友善柔、友便佞、損矣、嗚呼知己ある哉知己ある哉。

古來知己を稱するもの、管仲鮑叔を推す。管仲嘗て鮑叔と賈し、利を分かつに多く自ら與ふ、鮑叔以て貧とあさき、仲が貧を知れば也。嘗て事を謀り窮困す、鮑叔以て愚とあさき、時に利不利あるを知ればあり。嘗て三たび戦て三たび走る。鮑叔以て怯とあさき、仲か老母あるを知ればあり。仲曰く、我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔ありと。嗚呼斯くの如くにして、初めて知己たるべきあり。看よ、松陰先生の好吏の手に

瘞るや、門下數名の知己あり、故に従容として死に就けり。身はたとひ武藏の野邊に朽つるとも、留め置かまし、大和魂と歌へる、其大和魂は、門下數名の知己に留まりて、遂に維新の大業をさせり。武藏野の露如何に冷かあるも、先生の知己に對する温情と、門生の先生に對するの熱血は、冷す能はざりしあり。桑名の藩主松平定信、嘗て兄定國の許に送りたる歌に、「千鳥さへ友よびかはし遊ぶなりをぞてや人のひとり樂しむ」(田安宗武詠歌)と、嗚呼鴻雁の列をあして空中に飛揚する、牛羊の群をあえて原野に遊息する、皆是れ同類相憐むの情あればあり。半日の餘暇を得て北海に釣す、尙ほ友を要す、況や大丈夫事を當世に擧げんとするもの、豈に一人の知己あかる可けんや。

知己の相知るは、無形の靈界にあり、有形の肉界に非らざるあり。其相交るは理想の上存し、形骸の下に在らざるあり。魏の文帝の弟、子建、聰にして詩才あり、然れども骨肉の間甚だ親まず。彼れ竹の園生の身を以て、貧困の苦みあるに非らず、彼れ無限の力を有せる王弟、失戀の恨みあるに非らず、而かも常に悵々たり。彼れ何をか憂ふる、骨肉の情薄きを嘆せるあり、彼れ何をか悲しむ、妬猜の情甚だしきを哭するあり。七歩の詩何んぞ哀ある、煮豆燃豆其、豆在釜中泣、本是同根生、相煎何太急と、骨肉も相頼む可らずとせば、天下の事誰れと共に謀らん。召公の賢管蔡の親を以てするも、猶ほ其心を知らざる、周公の心何んぞ云ふに恐びんや。孔子陳蔡の間に厄せられ、嘆じて曰く、吾道非耶と、然れども子の道非あるに非らざるあり、只だ世に容れられざるのみ。故に顔淵曰く、夫子之道至大、故天下莫能容、雖然不容何病と、夫子油然として

笑ふ、又故あるあり。夫子貧賤あるも、己に此の知己あり、何んぞ悲しむに足らんや。嗚呼知己の相知るに難き、何んぞそれ甚だしきや。義経は頼朝と闘ぎ、尊氏は直義と争ふ、骨肉すら知己たり難し、況んや他人をや。然れども、知己の相得る、老幼貴賤を問はざるあり。見よや劉備は隆中に臥龍を起し、信長は藤吉を布衣に得。然れども此れ只だ稀に見る所のものあり。夫れ人の位置は、其真相を隠し全身を蔽ふ、されば鶏群中に一鶴を得、萬綠草中に一点の紅を得る、豈に難からずとせんや、韓文公嘆んぞて曰く、世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有而伯樂不常有、と嗚呼蚊龍を池中に探る、又難き哉、假令蚊龍池中を出づるも、雲の以て乗す可きあくんば、未だ以て龍の龍たる能はざるあり。嗚呼知己難き哉。

嬉々として笑ふ士よ、試みに汝の心に問へ、我れに果して幾人の知己あるやと、謳々として樂しむの人よ、先づ汝の胸に問へ、我れに果して幾人の眞友ありや、其時汝の心は如何ある答をす、「然り」と答ふるも幾人かある、人々の良心は血を絞るが如き聲を以て「否」と答ふるべし、宜なり古より知己難を叫び不遇嘆を啣つ。翻手作雲覆手雨、紛々輕薄何須數、君不見管鮑貧時交、此道今人棄如土(杜甫)とは、眞に古今の同嘆あり。然れども、知己難を呼ぶの人々よ、憂ふる勿れ、悲しむ勿れ。知己難を云ふものにして、初めて知己を得べし、所謂鹿附の山をば獵師知り、鳥附の原は鷹師知り、魚附の浦をば網人知り、知慧ある人をば智者を知る、吉野泊瀬の花の色、須磨や明石の月影は、その里人知らされども、數寄たる人こそ知る習われ、嗚呼んぞ憂

へん。知己難を發するの人々よ、恨むる勿れ、哭する勿れ、知己難を啣つは、其理想高ければあり、不遇嘆を呼ぶは、其想凡俗を脱すればあり。故に顔淵は「不容然後見君子」と云ひしに非らざるや、故に孔子に「不患人之不知」と云ひしに非らざるや。噫何んぞ恨みん、知己の得難き斯の如し、而して若し天下一人の知己を得ざる時は如何、曰く、知己を千歳に待つ可あり、曰く、知己を百年の前に追ふも亦可あり。若し夫れ萬籟死せる夜、獨り孤燈の下に書を繙かんか、爾の知己は喜んで爾を迎へん、釋迦我友あり、孔子我知己あり、其他總ての英雄豪傑仁人君子、皆我友たらざるはなく、知己たらざるはなし。若し夫れ能はずんば一身を以て知己とかせ、所謂吾れ己れを知るものは是あり。然れども是れ云ふに易くして行ふに難きものあり、「シセロ」曰く、「人は己れ自身を知ること最も少し」と、又曰く、「自身を知つて全世界を知らざるものあり、全世界を知つて自身を知らざるものは更らに大し」と。然り、然りと雖も、天下何者か貴くして易きものあらんや、易くして貴きものあらんや、難きを見て爲さざるは、丈夫の愧づる所、人は將さに自己を友とし、自身を知己として、獨行して影に愧づることなく、獨寝して衾に愧づることなき氣概抱負かかる可らざる。茫然として手を袖にし、「諸共に哀はれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」と嘆するも、何の益あらん。憮然として天を仰ぎ、「知我者其天乎」と叫ぶも何の答あらん、人は此氣概此決心ありて、始めて知己を得べきあり。古人友とすべきあり、古書友とすべきあり、嗚呼何んぞ知己難を云ふに足らんや、不遇嘆を叫ぶに及ばんや。

校風振起と教育

第五年級

河野 厚造

校風の弊を矯めて淳美に進め、更に其淳美ある校風を保持して失はざることは、正しく生徒たるもの、責務にして、我等は常に心肝を碎きて、此拱壁よりも重き責務を果さむことを工夫せざるべからず。惟ふに校風は學生の齊しく向ふ處にして、學生各個の品性を基礎とするものあり。されば一校の學生各其校風の淳美をあらむことを願ひ、其責を盡さむことを務めれば、校風の淳美懿良は期せずして達すべきのみ。他人の榮葉すら猶は豊からむを願ふに、誰か其校風之美を願はざるものぞ。然るに天下校風之美を説くもの多しと雖、其美を致すべき所以の途を講ずるものに至ては鮮し、校風の振起亦難いか。然れども徒に嘆すること勿れ、彼等は決して務めざらむとする者にあらざるなり。例へば水の停滞せるが如し、道を施して以てこれを導かば澎湃澄徹の美、奔湍飛沫の壯、得て見るべきあり。道とは何ぞ、學生をして教育の感念を抱かしめ、其價値を知らしむるにあり。中學校生徒の教育の感念全かきや久し。從て教育の何たるを解せず、遂に其眞價と趣味とを窺ふこと能はざ、徒らに書冊に蠟燭し、暴虎憑河の勇を衒ひ、教育者を器械視して以て得たりとあす。何ぞ校風之美と惡とを思ふの暇あらむや。苟くも彼等をして一片教育の感念を有し、教育の價値を信せしめむか、焉んぞ能くこれを爲すことを得む。余は素より神聖なる價値を有し、幽遠なる趣味を含み、凡ての事業の上に立つ所の教育事業を、土芥視するを快しとするものにはあらず、されども余はまた敢て被教育者たる中學校の同胞を、悉く教育者たらしめむとするに非るあり。臚月夜に戟を横へて敵營を望むも、余

の大に快とする所あり、風を捫て魯英を談するも余の喜ぶ所あり、輸贏を秒時に快して財巨萬を重ねるも、これ亦余の大に願ふ所あり。要するに人各其欲する所に従うて、其望む所の鹿を得しむるは、是れ理の當に然るべき所あり。然れども唯余の願ふ所は、我同輩の學生諸君として、教育を受くるとは書を読むことあり、直立不動の姿勢を取ることあり、試験點數に汲々たることあり、一にも教師二にも教師の指導に満足すべきものありとの謬見を脱離し、教育の目的は教師の生徒を教ゆることにのみよりて達せらるべきものにあらず、教師の働の及ぶ能はざる所あると同時に、生徒の動くべき餘地あることを知り、兩者相俟ちて始めて教育の眞價を發揮し得べきものあることの理を、悟了せしめんと欲するにあり。一度此理を悟らば教育に對する熱き同情の念は、油然而として諸君の胸間に湧き來らむ、その萬解の同情こそ實に淳美なる校風の源泉にして、これありて以て一致すべく、團結すべく、確實ある、眞摯ある、然も活潑なる精神的舉動と顯出し、校風は乾坤春めき草木の自ら緑するが如く、化育の効を奏し、天邊一輪の大月の如く、光輝六合に洽かるべし。何ぞ夫れ快からずや。

之を要するに、余は今日天下の中學校が、其の校風を改善せむと欲せば、須らく先づ學生に教育思想を注入し、學生の思想を根本より改浚すべしといふにあり。根本的改浚成功し、學校組成の分子たる學生にして、悉く教育の何たるを正當に理解し、而して中學校の教育を受くるに至らば、何ぞ必しもベスタロヂー、ヘルバルトあきを嘆かむや。

青年の責任

第五年級 宮川 鐵藏

秋天既に去て碧天の明月賞するに由なく、萬草枯れて凍雀飢に啼き、雪花紛々として鷲毛の如く、枯樹不時に花を着く、此時に當り、獨り梅は巍然として屈せず、泰然として撓まず、爛熳たる美花を開き、馥郁たる芳香を放ち、以て万物肅條たるの中に孤立す、嗚呼儼然たる節操や、これ君子と稱せらるる所以か、秀清たる風骨や、これ瓊殿王樓の上に招かれては、詩人をして筆を取らしめ、美女をして盃を取らしむる所以か、然らば繙て青年の状態を察せよ、優柔不斷以て春色駢蕩の花に戯れ、天高く氣清きの夜、皎々たる明月に酔ひ、以て意氣揚々たるの輩往々これあり、嗚呼慨歎の至りあらずや、無心の樹木すら、節操の儼然たる、堅志の不拔あること夫れ斯の如し、況むや萬物の靈長を以て自ら任ずる人に於て、豈に三省せざるべけむや、活眼を開て天下の大勢を察せよ、咆哮せる猛獅は大口を開て跳躍せむとし、巨鷲は鋭爪を磨し以て強翼を奮ひ、強虎は狂眼を開て時機の來るを睥睨し、狡猾なる狐狸亦搖尾俛首以て其欲を逞ふせむとす、而して一旦事あらむか、眞に蹶起突出して各々其力を争ひ、強は弱を併呑し、奮勵叱咤以て各々其略奪の欲を逞せむとす、豈に恐るべき修羅の海洋にあらずや、見よ去歲清國膺懲の義戦を、如何に我帝國の地位を高めしか、如何に世界各國をして我帝國に注目せしめしかを、爾來萬國の銳鋒悉く東洋に向ひ、颯々たる風や殊に荒く、澎湃たる荒波や愈々高く、以て世界の競争を我東洋の舞臺に演せられむとす、果して然らば我帝國たるもの

如何にして之に處すべきか、必ずや世界競争の場裡に入りて、強を萬國と競ひ鋒を各國と争ひ、以て勝敗を決せざるべからず、豈に恐るべき至大の難路にあらずや、然れども、此難路を打破して歩武を進めば、前途の平坦あること恰も砥の如く、國家を富士の安に置くは火を賭るよりも明かされば、暴風決して恐るるに足らざ、海洋の荒波亦避くるに足らず、萬國舉て我に朝し、日章旗の輝く所豈に唯に東洋のみからむや、然れども若し之に反し進路一步を誤らむか、嗚呼危ひかき、一日の悔ひを百年の後に殘し、國家の前途實に測るべからず、噫々今や國家隆替の分る、秋あり、生を帝國に享け明治の德澤に沐するもの、豈國家の現境を察して大に之が策を謀らざして可きやらむ、

然らば此優勝劣敗の場裡に投じ、義は鼎呂の重さに比し、命は鴻毛の輕さに較し、以て之が策を帷幕の中に運らし、勝を千里の外に決ま、我帝國をして益々上乘の地位に進め、世界萬國をして叱咤の下に屈服せしむるは、我が勇壯ある青年諸子の任にあらずして誰ぞや、故に我青年諸子の志向如何は、以て帝國の前途を卜すべく、動作如何は、以て帝國の進退を分つべき主動の任を負ふものあれば、何ぞ其責任の重且大あるや、故に若し我青年諸子の眼中にして一の帝國をかりせば止む、苟も進取の氣象を有し、後來益々驚倒せる怒濤の中に立ち、滿眼撩亂せる風塵の中に在て能く優勝劣敗の場裡に處し、驚天動地の偉業を成し、國家をして愈々昇進の域に入らしめ、國光を宇内に發輝せしめんと欲せば、必ずや之が因を作らざるべからず、是豈に我青年諸子が目下の急務にあらざるか、果して然らば我青年諸子は我國の柱石あり、若し此柱石にして打撃

を蒙り爲に之に撓せむか、即ち大海に繋かざる小船の如く、轉々として漂ひ、其柁の底止する所得て測るべからず、然れども之に反し、柱石たる青年諸子屹然として確立せんか、其國家の基礎愈々強固にして、風波も之を犯す能はず、猛獸も亦之れに勝つ能はず、乃ち我國の進運を得て望むべく、從つて世界競争の場裡に勝を制するを得ん、是に由て之を觀れば、實に國家の命脈や掛て我青年諸子の肩上にあり、何ぞ夫れ責任の重且大ある、嗚呼帝國第二の相續者を以て自ら任ざる我青年よ、汝等の責任や既に斯の如し、今や踏躓すべき秋にあらず、逡巡すべき秋にあらず、而して後來青年諸子の立て事をなさむとするや、世界競争場裡の渦中に身を投せざるべからず、從つて我に抗せむとする颶風や益々大からむ、我に抵せむとする海波や愈々荒まむ、前方に嘯く猛獸の聲や益々響かむ、後方を犯さんとする世塵や愈々多からむ、然れや千難萬苦敢て屈撓せず、我帝國をして益々上乘の地位に至らしめ、以て廣く萬國に我國光を輝かさざるべからず、雲表高く屹立し八面玲瓏夏尚は寒き芙蓉の峰は、豈に我青年獨立の氣象を明にするものにあらずや、水天一色森々として風波上らざ、水邊の景勝殊に明眉ある琵琶湖は、豈に我青年の高潔なる節操を表はすものにあらずや、芳春駘蕩の時、艶々爛熳たる三吉野の櫻花は、豈に我青年特有の大和魂を示すものにあらずや、嗚呼何ぞ其れ壯ある、何ぞ其れ盛ある、幸に生を我國に享けし青年諸子よ、勉めよや勵めよや、汝等の肩上に負ふ責任の爲めに其身を犠牲に供するは、豈に夫れ我國青年たるものの本分にあらずや、北風颯々として戸隙を襲ふこと甚だしく、寒氣凜々として身骨に徹し、三更夢尙は結び難し、起て破窓を排すれ

ば、雪花翻々として降り、遙峯皆を玉を戴き、黒土變じて銀世界となり、孤雁聲衰へて山寺の鐘聲沈々たり、机上の燈火影暗く、獨坐沈思すれば、實にや光陰は矢の如く、去て再び返らず、嗚呼既往は夢の如く、又前途や茫茫として限りなし、思ふて茲に至れば、心情愈々禁じ難し、是に於て筆を取て之を燈下に記す。

大津郡學生諸君よ就いて

第四年級

森

信 丸

大津郡學生の我萩中學校に遊學するもの殆ど六十名あり。而して人心は其面の各異れるが如く各人各異の性質を具ふるが故に一般に概論し難しと雖、その各人各異の性質を舉げてこれを綜合すれば、自ら一種の特質あきかに非ず。余は今この特質に就いて左に畧述せん。然れども余はもと無識無才その觀察するところ固より必ず當を得ざるへし。唯その眼に映する所を直記して以て大方の叱正を乞はんとす。

大津郡は東南西の三面は阿武美禰豊浦の三郡に境し北は日本海に面す。土地廣きに非されども地味肥沃にして農産多く、大津米の名殊に高し、海産も亦頗る多く最も著名なるものを捕鯨業とす。風俗は質朴勤勉にして敦厚あり。三郡の境界は險にして北海の風浪亦荒し。故に交通不便の結果として人文の發達比較的幼稚にして文學甚だ盛ならず、従つてこの地に生れこの地に成長したるものは形式的なる小學校教育を受けたるのみにして、家庭教育をせ見るに足らず朋友相互の間の切磋の功を殆ど皆無かりと云ふも過言に非ず。彼等學に素養をく見聞亦實に狭少、故に進みて高等の學校に入りたるものも嶄然頭角を衆人中に見はし、名聲

噴々たるものは、寡聞余の如き未だ嘗て聞かざるあり。然れども我萩中學校に於ける同郡出身の學生諸君の成績を聞くに其成績比較的好良あり、勿論少數の例外ありと雖大率中以上の成績にして其平均も亦中以上に位せりと。嗚呼奇ある哉、學に素養をく見聞亦實に狭少ある大津郡學生諸君の成績比較上好良ありとは、蓋し謂ふに當に然るべき理由あるあり。理由とは何ぞ、曰く勉強是あり。

諸君は一部の少數を除けば皆非常なる勉強家あり。勉強家あるか故に學校に於ける成績は比較的好良あり。勉強家あるか故に素養の足らざるをも補ひて尙餘りあるあり。諸君は何の感する所ありて未頼母しき勉強家とはかりたるか、謂ふに二つの由ありてこれが爲に感奮興激して勉強する者からん。何をか二とする、一つは慈愛深き父母が膏血を絞りて己が遊學の資を給するに感激し、一は身親ら素養足らず且つ前途遙遠にして一時も閑過すべからざるを曉りて興奮するものこれあり。果して余の想像をして真からしめんか、諸君の志や誠に善かりと謂ふべし。そもく父母海岳の恩に報ゆるの方法種々ありと雖、學生の當に爲すべきは勉強あり。素養の足らざること何を憂ふるに足らん、勉強さへすれば之を補うて尙餘りあるあり、勉強して止まざれば成業立身せんこと何を疑はん。學生の墮落は誠に勉強せざるより起る、勉強さへすれば何を墮落する違わらんや。

諸君は幸にも非常なる勉強家あり非常に勉強家あるが故に身を處すること高尚にして諸の誘惑因りて以て入ることを得ず。是を以て風儀概して正しく、質朴健雅にして野卑粗暴の風なし。蓋し質朴健雅は父祖の美風

を遺傳せるものあり。吾人は諸君が永くこの美風を守り、僑傲奢侈の徒をしてこの美風に移らしむるに至らしめんことを切望して止まざるあり。殊に諸君が一美風は外出するときには必ず制服或は袴を着し決して自墮落する風を爲さざることあり。此事たるや誠に一鎖事にして稱するに足らざるが如し然りと雖、服装は人の品性を顯はすものにして其服装を見て其爲人を知るは難きに非ず、然のみならず服装正しきは墮落腐敗を防ぎ、其品格性行をして益高尚からしむる益あるが故に、吾人は殊に稱して諸君の一美風とし、軽々しく看過せざる所以あり。

風俗敦厚情誼靄然たる地に成長したる諸君が朋友に對して情誼親厚あるは自然の勢あり。殊に他郷に於ては、一面の識ちさも骨肉も啻からざるほど親密に交遊するは之れ亦自然の勢あり。凡そ我同胞の海外にあるものが相集まりて日本俱樂部を設け、或縣人の縣外にあるものは縣友會を設け、郡外にあるものは同郡會を設け、互に切磋琢磨して一國一縣若くは一郡の名聲を高からしめんことを謀るは世間一般の美風ならずや。然るに諸君は愛國愛郡の志あきか、はたまた團結心あきか、何ぞ同郡學生の團體を組織して郡の爲めに計らざる。何ぞ同郡學生を團結して協同一致し互に切磋せざる。諸君中或は言はん、余輩不敏なりと雖も愛國愛郡の精神敢て他人に譲らず、團結心も亦敢て常人に劣らず、故に既に同郷會を組織し、學校の認許をも得て協同一致を計りつゝありと嗚呼然り、諸君は愛國愛郡の精神を有す、日本人たる以上は誰か此精神を有せざるべき、此精神を有せざるものは日本人にあらずるあり。某君の所謂同郷會は、設立既に久しきを知る、然れどもこ

れ誠に少數人士の集合したるものにして、所謂全部の學生を統一したる團體にあらず、全部六十名の學生中此會に入れるもの果して幾人かある、恐らくは其數分の一にも足らざるべし。これによりて吾人は疑ふ、諸君は團結心を缺けるに非らざるかと。近頃諸君の氣風を観るに四五の同郡學生相集れば談必ず同郡會設立の事に及ぶ、これ果して如何なる現象を、又此頃數名の有志者發起して同郡學生の名簿を調製せんとすと聞く、これ果して如何なる現象を。徐にこれ等の現象を観し來れば。同郡學生諸君は團結心あきに非ず、反て鬱勃として禁し難さか如し、然れどもこれか發起周旋を爲すものは下級生諸君あり。これに由りて吾人は推斷す、大津郡學生諸君は團結心に富むといへども、統領其人を得ざるか故に鬱勃たる團結心もこれを現實にして世人の凝團を氷解せしむことを得ざるありと。是に於て吾人は上級生諸君の一大奮起を望まざるを得ず、諸君は學校の最上級生にして従うて學課多端、日夜孜孜として勉強し敢て他を顧るに違わらざらん、然れども是私事のみ、若し早く團結して互に切磋琢磨し善を勧め惡を誡め扶掖誘導するにあらざれば、年少の諸君は嚴父慈母の監督の下を離れて自由我儘のするにまかせ、或は放蕩無頼の書生とあるやも計り知るへからず、萬一にも我同郡學生中一人にても斯る惡生を生せんか唯に其身の不幸のみならず、我郡の名譽を損する事これより大なるはあく國家社會に及す所の害毒また少々にあらずるあり。上級生諸君にして發起すれば同郡學生翕然としてこれに應ずるや明々白々にして此事誠に一舉手一投足の勞のみ、諸君は此の小勞をも厭ひて同胞の溝谿に陥らんとするを坐視するか、吾人は仁慈にして公共心に富める上級生諸君の決して其勞を惜まざる

へきを信するものあり。

次に余輩が大津學生諸君の一大缺点と思はるゝものは運動に熱心からざること是れあり。諸君は何故に學事に勉強するの勇氣を以て運動を勉強せざるか。如何に學問に長したりとも、体弱くしては折角學修せる學問も應用すること能はざるあり。諸君は身体の健康を必要とせざるか、身体を離れて精神は無きあり。人或は云ふ、勉學と運動とは勢兩立せずと、然れども勉學は専心一意あるを要す、古人言へるあり、曰く、心外物に放散する時は風中の燈の如し、明かあるか如くにして明瞭からすと、故に心外物に放散する時は机邊に坐すと雖無益あり、語聲するときは眼を書籍上に注くも無益あり、斯の如き場合に於ては妄想數時間に渡るも尙止まず、可惜貴重時間を無益に費すに非ずして何ぞや。誠に蹶然戸外に出て、運動せんか、數十分間を出でずして心氣爽快勇氣勃々たるを感すべし、是に於てか更に机に對すれば一目十行並び下る、其愉快亦云ふべからざるものあるべし。これ當に勉強するのみならずして、實に勉強を善くするものと云ふべし。これに反して若運動を怠り健康を失するに至らば、唯に其身の不幸のみならず父母兄弟に愁苦を與ふ、不孝是れより大あるはあかるべし。嗚呼諸君は國家の花あり、其實を結ぶの日も亦遠きに非ざるべし、君父國家の爲健康に注意せられんことを切望に堪はざるあり



學 術

親和力に就きて

特別會員 塚本 又三郎

前世紀以來理學の發達は實に驚くべき進歩にして、殆んど間然する所なしと雖ども、尙不明の域を脱する能はざる點は、乃ち分子間に起る現象あり、此化學上親和力と稱するもの又一あり。今聊か其性質を左に述べし。學生諸氏一讀あらば幸甚。

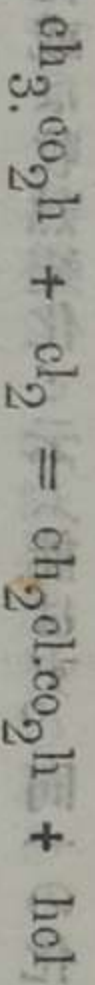
初め化學を學ぶに當りて尤も不思議に感ずる事は、七拾有餘の元素各他の元素と結合して化合物を生ずる事あり。仮令ば水素は酸素と容易く化合して水を生ず、又硫黃は或金屬と容易く化合して硫化物を生ず。而るに水素は金屬と化合せず、假令ひ化合するも餘程難事にして、又其生ずるものも極めて不安定のものを生ず。硫黃の金銀等に於けるも又同じ。抑も如此元素の互に化合するは何故あるや。又其化合するに、容易く化合するものと容易に化合せざるもの有るは何故あるや。其化合するには必ず原因あるべし、之を親和力と云ふ。其親和力の強弱に因りて或は容易く化合して安定のものを生じ、或は不安定の物を生ず。然らば其親和力は如何あるものあるや。或は曰く、「ニウトン」氏の所謂宇宙引力に同じ、唯異なる所は、宇宙引力は兩物質間の距離大なる時尙互に相引くと雖とも、此親和力は兩者の距離極めて小なる時のみ作用する引力にして、其距離相隔つ時は消失すと。然れども此説信する能はず。元來宇宙引力は二個以上の物質あれば必ず存するも

のにして、其強さは物質間の距離の大小と其物質の質量の大小に由りて變するものあるも、其物質の性質には少しも關係せず。仮令ば硫黄一斤と砂糖一斤とが一尺の距離に於て相引く力は、砂糖一斤と鉄一斤とが一尺の距離に於て相引く力と等し。然るに親和力は物質の性質に由りて大に異なる。硫黄は或金属と容易く化合するも金銀白金の如き金属とは殆んど化合せざるを以て明あり。然らば或は表面張力の如きものあるや。抑々表面張力とは液体の表面自ら收縮せんと勉むる力にして、此張力の爲に水滴の球状をなし、或は毛管現象を生じ、或は液面の粘性とあり、重き物質と雖とも水面に浮ぶが如き現象を生ぜ。然れども其表面張力は液体の内部に存せざるものあるを以て、到底親和力に同じとは云ふ能はず。其他凝集力と比ぶるに、凝集力あるものは同種類の分子間に於ける引力にして、之が爲に容易に引切ること能はざる固体を生じ、或は結晶体を作り、或は液体の分子をして自由に飛行する能はざらしむ。然れども此引力は常に同物質の分子間に存するものあれば、親和力と同じからざる明あり。又粘着力は異類の分子間に存する引力にして、凝集力と等しく分子と分子との間の距離極めて小なる時のみ作用するは親和力と相似るも、親和力に由りて兩物質の化合する時は全く異なる性質の新物質を生ぜ、更に原状を存せず。然ども粘着力の爲に假令ひ水が他の物質中に浸入するも、水は水にして其性質少しも變化せず、故に親和力を粘着力の如きものと見做す能はず。

今迄大に唱道せられしは即ち電氣説あり。仮令ば水素と鹽素とは化合して鹽酸瓦斯を生ず、而るに其鹽酸瓦斯の水溶液即ち鹽酸に電氣を通ずる時は、鹽酸は電氣の爲に分解して、鹽素は陽極に付き水素は陰極に付く。

故に鹽素は陰電氣の物質にして、水素は陽電氣の物質あり。故に異性の電氣を負ふ所の兩物質、即ち鹽素と水素が相引合ひて化合するものあるを以て親和力は電氣ありと。此説尙充分と云ふべからず。何とすれば有機化學に於て有機化合物中の水素を鹽素にて置換し、又鹽素を水素にて置換する例數次見る所あり。假令ば

酢酸に鹽素を導通する時、メチル中の水素、鹽素に由りて交換せられ、鹽化醋酸を生ず。



若し陰電氣性のものと陽電氣性のものとより化合せぬものあれば、如此陽電氣性の水素が陰電氣性の鹽素に由りて交換さるゝと云ふとあきを以て、此説の不充分なる明あり。略言せば親和力ある力は如何なるものあるや、其眞實の性質に至つては現今尙明ならず。恰もニウトン氏が宇宙引力説を出し、天体の運動より其他種々の現象を説明せしも、其引力は如何なるものあるや其眞實の性質明からざるが如し。而れとも其性質明からざるを以て親和力の研究を止むべからず。於此碩學者其親和力の強弱を計る方法を研究し初めたり。其方法を見出すには、先づ化學變化の性質を明にせざるべからず。今物質間の化學變化を見るに、常に物質の變化と共に其物質内に存在するエネルギーの變化生ず。假令ば木炭一瓦分子を酸素中にて焼く時九六、九五〇の熱を生ず。之れ元と木炭并に酸素中に潜みし所のエネルギーが化學變化の爲に熱となり現れ出でしなり。即ち換言せば木炭酸素は化合して炭酸瓦斯となりし爲

其エネルギーを失ひしあり。如此き化合物を散熱化合物と稱す。而るに之に反して、沃素水素の各瓦分子化合して沃化水素を生ずる時、六、一〇〇カロリーの熱を吸収す、即ち外部より六、一〇〇カロリーの熱を補はざるべからき。如此き化合物を收熱化合物と云ふ。而して散熱化合物は一般に收熱化合物より安定あり。前例に於て炭酸瓦斯は容易に分解する能はずと雖とも、沃化水素は日光に晒し置けば自然に分解して沃素を遊離す。其他水素と酸素との化合物、即ち水と過酸化水素を考ふるに、水の生ずる時は六八、三六〇カロリーの熱を出し、過酸化水素の生ずる時は四五、二〇〇カロリーの熱を出す。故に水は過酸化水素の生ずる時より多量の熱を散出す、従て水は過酸化水素よりエネルギーを包蔵すること少くして安定あり。過酸化水素は少し熱すれば直に分解して水と酸素とある、故に化学變化は最大量の熱を散出する方向に進み最小量のエネルギーを包蔵する物体に變化す之を最大發熱の原則と云ふ。ベルテロー氏の如きは化学變化の際生ずる散熱の量を以て親和力の大小を定めんと迄極論せり。一見實らしき事あるも不都合の點往々あり。何とあれば或化学變化は常に散熱變化或は收熱變化と云ふ能はず。同一の化学變化にして低温度に於て實驗する時は散熱變化あるも、高温度に於ては收熱變化に變性する事あり。其他鹽化アンモニウムを熱する時の如き、一部分は解離してアンモニヤと鹽化水素を生ずるも、他の部分は鹽化アンモニウムの儘殘留す。此等の事實は到底最大發熱の原則にては説明する能はず、故に勿論ベルテロー氏の極論も信する能はず。近年に至りて獨乙のオストワルド及びチルンストの如き化学家出で來り、化学平衡論或は電離説、或は滲透壓力論を出し、親和力を計り得るに至らしめたり。而れども此等を一々述ぶること容易からざるを以て後日の紙上に載すとせん。

雜 纂

萩中學校第一回修學旅行記事序

編 者 記

維時明治三十三年十月、我校第一回修學旅行の舉あり。蓋し我校獨立以來初めて行ふところのものあり。時正に中秋、満目の景物自ら詩腸を傷ましめ、瘴鬼漸く跡を絶ちて人まさに健からむとするの候、暫く學窓を離れて山野都市に徘徊し、或は人事を察し或は自然に學ぶ、其効固より決して前者に譲らす。況んや教官これを率ひ、學友これを助け以て其効を全からしむるに於てをや。それ書冊は理論を教ゆるものあり、定義を授くるものあり、自然界の事實を正當に解釋するの智識を與ふるものあり、更に自然界の事實を利用するの途法を悟らしむるものあり。然れどもこれを解釋しこれを利用するに至りては必しも書冊の能する所にあらざ、常にこれを實地の經驗に待たざるべからき。且夫れ他を知るは己を知る所以、己を知るは自ら進む所以にしあれば、經驗に富み見聞を廣むるは、青年修養の時代といへども、また決して忽にすべからず。而して修學旅行は實にこれを怠すべき最良手段たるあり。況んや、軀體は精神と共に發達し、元氣は兩者の發達と共に熾あらむとす、青年元氣養成の策、またこれを措て他にあらざるあり。只修學旅行の方法に至りては改良

進歩すべきもの一にして足すといへども、現今旅行が漸く世間一般の流行となりつゝあるは、大体に於て大に喜ぶべき現象の一ありとす。

我校の今回取られたる方法は、全校の生徒を三區隊に別ち、其軀軀と智識の程度に従うて、其旅行範圍を區別したるにあり。今各區隊を率ゐられたる諸先生及び各區隊の旅行地方を擧ぐれば左の如し。

第一區隊(五年生四年生より成る)

區隊長 小田先生

監督 山本先生 青木先生

旅行地方 萩(海路) 濱田 三隅 青原 津和野 生雲 萩

第二區隊(三年生二年生より成る)

區隊長 能勢先生

監督 藤井先生 三好先生

旅行地方 萩 山口 三田尻 徳山 嶋地 野谷 生雲 萩

第三區隊(一年生より成る)

區隊長 頓野先生

監督 中村先生 門司先生

旅行地方 萩 三隅 深川 大田 山口 佐々並 萩

右三區隊は何れも十月八日を以て發足し、第一第二兩區隊は十四日を以て、第三區隊は十三日を以て歸校せり。其向ふ所の異りしたげに、其得る所もまた同からせ。故に三者相對比してこれを看ば、更に一層の利益と興味とを増すに至るべし。よりに本會は石津御楯、太田明治、竹内宗輔、三君の紀行を請ひ得て左に列掲することゝせり。若し夫れ各區隊に於て起りたる種々の出來事の如きは三君の紀行を讀まば、まさに紙上に躍如たるものあるを覺べし。これか序を作る。

編輯 子

第一區隊修學旅行紀事

發端

第四年級 石津御楯

回顧すれば卯月の末つ方、山々笑を含み、百花紅を競ふ候を期し、余等一同、修學旅行の擧を校長に請ひしかども、當時は校の創立日尙淺く、諸事の調はさるかためとして行はれざりき。其より月を閲すると六つ、今や一葉落ちて天下の秋を知る頃、斯擧を行ふの議出つ。されど余等か曩日の銳氣に引替へ、此行に加はるもの少きは蓋し氣候の左右するものか。斯くて全校出席生徒中、四年生五年生は濱田へ、二年生三年生は徳山へ、一年生は天津美禰吉敷の諸郡へ、孰も神無月の八日をもて發足しぬ。いさや、是より余の加はりし濱田行の要を紀せん。

門 出

余等は船路を往き陸路を還へる定かれは、兼て期したるとはいひながら、一聲の汽笛と共に、そこそこに仕度調へ、船場に至り、小田區隊長の懇るる訓諭を受けし後、時計の正に四時半を示す折、第四共同丸に乗り込みたるときは、遊意の勃々もまた一入ありき。

船路のくさくさ

この共同丸は、長さ約百五十尺の小形の汽船なれば、浪に蕩らるゝと一方ならず、流石に秋の荒海なれば、船暈者の多かりしも無理ならぬとあり、二時餘りの航海を経て、須佐の港に寄る、折しも十五夜の名月は高山のあたりより徐ろにさし上り、水に映らふ様得も言はず、やかて纜を解き、おだたる高山沖を過ぎつ。さそかし荒からんと期せしに、さはあくて、あかあかに宇田沖を烈しかりし。夜に入りて、高島を遙に左舷に認めぬ。今年の夏來し時は、此あたり一面漁火の隠したりしに、こたびは絶えて見ざりければ、いと淋し。加之、中空に懸れる月の光は牙へ渡りて、唯暗車の響のみおどろおどろしく轟けば、いや増しに凄まじし。船は進み進みて大麻の岬をかへせば、即がて舳に方りに閃光燈台を認めぬ、これ濱田港の入口ある馬島にあるものありける、斯くと知りたる人々の歡營ふるに物なく、とかくするうち本船は濱田に入港し、査官の臨檢を経て、直ちに上陸しぬ。

中 學 校

明ければ九日、秋の時雨いたく降りしきり、旅の哀を増すばかりあり。七時、肅々と列を整へ、島根縣第二中學校を觀る。校は町の中央に位し、二棟の講堂、三棟の控所と寄宿舎とあり。凡て床の上は、靴を用ゐる事を許さず、上靴或上草履を用ゐしむ、これ衛生土塵芥を防ぐ爲めなりといふ。構内の植物園及び標本室は、大に備はれり。余等は藤井教諭の案内にて、殘る隅なく見了り、休憩室にて茶菓の饗應を受けし後、圖書室縦覽の際、突然擊劍の仕合を申込まれ、一同大に奮ひつゝ、遂に二番の擊劍と一番の柔術の試合を申ししが、孰も勝は渠等に歸せり。さて藩閥の頃はいざ知らず、明治一統の御世にあれば、勝敗をもて争ふべきにはあらずとも、技術上各自の競争あるこそ、其の進歩を來す基かれ、故に勝負は時の運とはいひながら、三度共に敗を取りし事あれば我校の諸子に切に猛省を乞ふ所あり。この校はボート大小六艘を有すといふ。

兵 營

中學校を辭し、町の東南にある歩兵第廿一聯隊兵舎を巡覽す。營門を入り、待つこと久しくして、週番下士の案内にて、先の將校集會所より炊事室浴室を見、職工室にて暫し憩ひ、再び兵の寢室を見る、案内の下士、新式連發銃の説明を詳に余等に與へたり。時已に正午を過くこと殆ど一時、營を辭し宿に歸る。総て營内は規律的な動作すとは、兼て耳にせしかど、斯くまでには道すがらさゝやきあへり。

雨 中 の 旅 行

二時、風雨を犯して出發す、篠つく雨は外套を浸し、褌衣をも浸さんばかりあり。行く行く町を出て願れば、

烟雲模糊の間に二三の島々は岸に沿ひて並び、島根に寄する荒浪は、峻しき岩角噛み渡り、峰の小松は雨を含みて一しは緑深し、是をみだる濱田の小西湖あり。其景もろこしの西湖に似たればとて、其名を得たりと、里人は語れり。進むと里餘にして、名にし負ふ長濱の里を過ぐる頃、空は晴れ渡たり。

三隅の夜景

周布、折居を経て、十六夜の月も山の端に登りし頃、三隅の里に看さぬ。こゝは山間の小邑にも似氣無く、二間大の里程標あるには、一驚を喫せり。三隅川に懸れる橋に出て見れば、河中に五六の童手々に松明とりてさわぐを見る、人に尋ねれば、渠等は魚を漁るかり地獄網とて、上下二ヶ所に網を張り、そが隅々に竹の囊を設け、其の中に魚を追ひ入れ捕ふるかりと語り聞かせぬ。

萬福寺

十日、七時出發、岡見、鎌手安田の諸村を経て、益田に着す。町の北に、萬福寺とて五百餘年を経し古刹あり、其開基は益田城主越中守兼見公なり、四境の變の際には、我藩の兵募軍と激戦せし所ありければ、今尙は當時の彈痕を本堂の縁板柱などに存せり。寺僧に乞ひ寺の後にある雪舟の築きし庭園を観る、庭は山陰第一の絶景といへど、余等の凡眼にはさしたる趣もなし。次に寺に藏せる諸寶物を観る、或は雪舟の鷹、或は弘法の佛像、或は兼見公の像、或は益田家の系圖等あり。時に號鐘二時を報すれば、早速寺を辞し、直ちに益田を出發し、七時青原に着す。

笹ヶ谷銅山

十一日、八時青原を發し、道を山間の徑路にとり、進むと三里にして銅山の麓に達す。仰けば雲つく高峯、これに通へるつらさをり、登り登りて十餘丁の難所を越ゆ、銅山事務所に至る、其道の峻しさと限なく、五歩に行み、十歩に憩ひ、瀧なす汗を拭ひつゝ、終に頂に登りたる時の心地は、如何ばかりありしや。事務員に案内を乞ひ、二ヶ所の採掘坑に入り、鑛脈及び採掘の狀を親しく見たり。次に分拆室に至り、諸鑛物の標本を見、製鍊所に入り、風爐の裝置を聞き、風扇器發電器塙等を歴覽す。殊に塙垣より發散する硫氣には、余等一同大に閉口せり。硫毒の犯せる爲か、近山絶めて樹木の生するとなく、居人始めは必ず咽喉加多留を患ふといふ、嗚呼恐るべし。この銅山は、近來大に産額を減して、廢坑多けれども、尙ほ毎月二萬斤の鑛塊を出す由あり、以て其盛時はこれにて追想せらるべし。製鍊所より下ると一丁餘にして、學校あり、旅舎あり、商店ありて、銅山の爲めに一市をなす、これを畑ヶ追村字笹ヶ谷とす。

津和野町附リ津和野士人

余等一行は、津和野を距る約一里半にて、津和野有志者に迎へられ、峻しき間道を越ゆ、七時津和野町に着す。町は四面山を周らし、恰も楯鉢狀をなせり。東に高く聳ゆるは青野山にまて、市街を瞰下す街は南北三條よりあり、中央の本町や、見るべし。余等は其夜當町の我校生徒父兄及び他の有志者よりくさぐさの寄贈品を受く、而して有志者は十二日の近郊巡覽の際にも親しく案内の任に當り、越えて十三日出發の時にも見

送り怠りなかりき。殊に町長の如きは、遠く野坂の險を越え、國境まで送られぬ。かくも津和野士人の余等を歡待せしは故きをあらす、凡そ鹿足郡は松江より約六十里、濱田より二十里を距つれど、萩より僅々十二里に過ぎず、又物價の点より論するも、松江濱田に渠等子弟を遊ばしめんより、萩に出すの得策あることを覺り、昨年以來續々萩に遊學せしむ、從て萩の子弟を優待するは當然ありとは謂へ、其懇情また恐るべからざるあり。

鷺原公園

豫期の如く、十二日八時より近郊を巡覽す。津和野川を遡ると十數町にして八幡宮あり、其境内を鷺原公園と呼び、園内數十の楓と櫻とありて、別に風致よく、規模狭小あり。されど八幡宮は、社殿位置、法に適せありて、遠く備後地方より工匠の來り觀るもの多しといふ。

元武神社

公園より河に添ひ進むと暫時にして元武神社あり。社は龜井家の祖元武公を祭りし所にして、社殿壯麗、其彫刻は世に稀に見る所あり。故に斯道に志す者は、遠きを厭はせ來り觀るもの多しといふ。社の右に豊公征韓の役に分捕せし砲數門と、幕末に當り高津近傍に据附けし海岸砲とあり、孰も珍らしき參考品あり。

導火線製造所

町の東方、登ると三丁にして、導火線製造所あり。本所は數年前、當地ある吉田三藏氏の發明より成り立ち

現今は非常に盛大に構へ、本邦は勿論、遠き外つ國までも輸出す。産額毎年六萬圓とは驚かざるを得ず。機械は概ね水力を利用せり。今製法の概要を説かん、先づ百有余の糸を繰りて、數十の繩とかしながら、火藥を充てたる箱を通過せしむ換言すれば火藥を繩中に繰り込むあり。次に繩を溜池中にて洗滌す、是れ火藥の一時に爆發するを防ぐ爲あり、洗ひたる繩の外部を、丸打機械にて丸打紐の如く綿絲にて被ふ、その被ふ回数に多少によりて、水中用と陸上用との別をなす。次に「コールター」の溶液中を通過し、又た「コールター」を乾燥せしめんため炭火にあて、次に元結を巻くが如く束ねて、始めて完製せるあり。案内者は、殊に余等の爲めに水中用の導火線に點火し、溜池に投入したり、導火線は其線の盡くるまで水中にて白霧を放ちて燃ぬ。實に巧妙なる装置と謂ふべし。

島根縣の道路

十三日、七時發す、野坂峠の舊道を登り、頂の茶店に憩ひ、送り來りし津和野町長と別る。これより故國の土を蹈むかと思へば、吾も人も勇み立ちつ、又偶然思ひ出てしは、本縣の道路の道幅狭く險惡にて、島根縣の三間強の道幅を有せる坦路に比すべくもあらぬことあり。かゝる山間の僻地にありながら、斯くも開ける事と、或は怪むものあらんしも、これ決して怪むべきにあらず、縣の司にさるものありて、島根縣の世の進化に伴はざることを慨き、大に土木に意を注ぎ、交通を便にし、以て開明に趣かしめんとを謀りし甲斐ありて、現今の如く、至る所連山高峯あるに係らず、よく車輛を通するを得るは、一にその賜と謂ふべし。

不愉快ある生雲

德佐、地福鷹の巢を経て、生雲村に着す。始めて第二區隊と顔を合せたり。余等と第二區隊とは旅舎相對せり、着後、草鞋とき、足あと濯ぎ、しばしくつろきけるに。第二區隊の生徒は、とやとやと入り來り、食事に加、れり。故に余等の感情を害せしと甚しく、遂に一場の衝突を來さんばかりとありぬ。又た夜間は非常に寒冷かりし爲め、余の如き虚弱者には、脆くも風邪に犯され、十四日の行程、これがためにいと苦しかりき。

歸 校

十四日、六時生雲を發し、進む山路は朝霧深く立ちこめて、高さより見渡せば、湖の如く、峯の並木は、磯邊の松かと疑れぬ。病める余にも愉快に感せられたり。藏目喜より砂堂に至る間、岬々たる舊道を越ぬ、砂堂にて新道に合し、福井黒川の里を餘所に見て、午後一時我が學ひの庭に歸り、小田區隊長の告諭終りて、一同解散す。

結 末

要するに、今回の旅行は、人員の少き爲めか、喧嘩なるとなく、最も整肅にして、或は古跡を吊ひては、史學の智を増し、或は製造場に臨みては、理學の觀を進め、或は青山怒濤を見ては、精神を爽にする等、一として益せざるをなし。予は是に於て修學旅行の修學旅行たる本分を盡せるを喜ぶあり。

第二區隊修學旅行日記

第三年級 大田 明治

炎帝熱を放ち赫々として砂を焼くが如く、流汗淋漓身は猶釜中の蒸鬼たるが如き酷暑の時も既に其距を絶ち、今は嗽々たる西風梧桐を颯して破窓を敲き、唧々たる鳴蟲は嚴霜に苦んで前庭に咽ふが如き寂莫たる秋の候とはありぬ。此時に當りて誰か獨机に向いて書を繕くを快とせんや。偶々我萩中學校に於て例年の如く修學旅行の聲勃々として起り、遂に其勢を増し、此行に適せる節を得てこれを舉行するに決し、十月八日を期して愈之が出發の時期とすに至る。即ち全校生徒を三分し、四五年級は合して第一區隊を作り、萩より汽船を借りて濱田に出て、二三年級は合して第二區隊を成し、萩より山口三田尻徳山を経て出雲に第一軍と合して歸校、第一年生は第三區隊を編成して仙崎、深川より山口に出て、佐々並を経て歸校することに定められぬ。余は即第二區隊に入る。

十月八日晴る、實に旅行の第一日あり。一聲の曉鴉と共に床を蹶て起き、殘月の光に嗽洗を終りて學校に赴きしは午前五時ありき。六時半に至る頃ひ、衆悉く集る。乃ち列を作り、隊を整へ、能勢先生より攝生上の注意をとりありて、歩調を揃えて校門を出でしは午前七時ありき。曉風面を拂ふて冷氣骨に徹し、凜乎として轉々門出を壯あらしむものあるを感したり。

平安湖町を過ぎ玉江橋へ回らんとする所にて第三區隊と手を別ち、八丁橋本を経て漸く萩町を離る。六本杉より小橋を渡りて進めは足指漸く仰く。此處の道側に千人墓として昔毛利藩の頃の所刑場あり、今は一の地藏

尊を存す。進て鹿背の洞道に入り、これを出て、明木の外郎屋に憩ふ。これより道漸々下り、行くこと數町にして路傍數坪の柴地あり、一の標札立てり、殉難三忠士と題して香川半介櫻井三木三冷泉五郎の名を記す、いづれも俗論党の爲に此所にて要撃されたる正義派の人々ありとかや。遂に明木橋を過ぎて一坪谷の險を攀ち漸く佐々並に着す。時正に午あり。乃ち晝食をあし、憩ふこと一時間許にしてまた發す。之よりは名にし負ふ一の坂あれは、此方より進めは多くは下り坂あれども、傾斜甚急あるのみならず、路條迂回して螺旋状をあし、兩側は樹木鬱々と茂り、其下には谷の深さ幾丈ありとも知れず、あはれ封建時代には據て以て頼とせし天險も、今は却て交通の除くべからざる妨害物とはあれり、世の變遷もまた甚しからずや。此坂は防長二州の國境をあして、山腹に北長門南周防と書ける標木あり。その麓は即吉敷郡上宇野令村あり。坂尽くれは路平あり、行くこと暫にして、遙かに人の群聚するを見る、近けば即阿武郡出身の山口高等學校生徒十數名郊外に出て、我等を迎ふるあり、余輩の欣喜何そこれに若かんや。我隊整頓して其前を過ぎ、山口町に入りて立小路香川屋と云へるに投宿す、午後五時三十分あり。

此夜能勢先生は秋の七草及び今日通り來りし地方の地質に就きて説明せらる。先生の言によれば、萩町の地たる、地下は岩石層にして即火成岩あり、明木洞道附近の地層もこれと同様ありといへども、一の坂の岩石はこれと異りて所謂水成岩あり。此内には一種の岩石交れり、硅石とて最堅き火成石あり。是等は皆太古の遺石にして學名を太古紀岩石と云へり、實に世界最古のものあり。然るに其南麓は全く右と異質ある角閃安山

岩より成るを見る、これ最新しき火成岩あり。嗚呼時勢の變動眞に驚くべしとていへども、其働の一層徐々として且一層大なる地質の變動に至りては更に奇ありと謂つべきあり。

十月九日、雨降る。本日は山口町に滞在の豫定あり。一同朝飯を喫し終るや、雨を犯して諸所の見物に立出つ。先の隊伍を整へて伊勢小路伊勢橋を過ぎ山口縣廳を見る。

抑々山口は往昔大内氏の據りて以て中國九州に覇たりし處にして、當時は規模頗る宏大、京都堺と共に日本三府と稱せられ、月卿雲客の避難地とあり、文學技藝の叢淵とあり、其名は一時海外までも聞えしか、星移り、物換はり、今は唯其遺跡を離畑の間に認むるのみ。而して現今山口縣廳の廳舎は、慶應元年毛利忠正公萩城より移りて此地に居玉いし時の邸第かりといふ。

次て山口中學校及び高等學校を參觀して一旦宿所に歸り、これより自由散歩を許さる。

是に於て同志數輩共に龜山の銅像を見んとて降りしる雨を犯して出づ。背後より登るに、丘上平垣方數町、中央馬に跨りて立てるは贈從一位毛利敬親卿あり、其左に烏帽子垂衣あるは從三位吉川經幹公あり、其右に武装して手に采配を執るは從三位毛利元純公あり、又其右に武装するは從三位毛利元周公あり、吉川公の左に裝束して立てるは從三位元蕃公あり。此等の諸公は實に皆我長防諸藩の英主、就中彼の忠正公の如き、積年勤王の稱首とあり、精忠不屈の大義を以て皇運を一方に維持し、戊辰の春伏見鳥羽の一戦大に賊膽を破りて天下人心の方嚮を決し、維新の大業を成就するに於て與て大に力あり、嗚呼公の功德は永に後世に傳らむ哉。

午後に至り天漸く色を變して霽んとするが如し、よりて一友と共に出て、香山園に趣く。園後の丘上に元徳公及び忠正公の墳墓あり。園小ありと雖も愛すべし。これを出て、左折數百歩にして一古刹あり有名なる瑠璃光寺あり、見終りて宿所に歸り、夕飯を喫して再び市街を散歩し、兵營を見、大江元就を祭れる豊榮神社、忠正公の靈を祀れる野田神社及び八坂神社等に詣す、夜に入りて天全く晴れ、月は皎々として、明日の愉快を豫告するに似たり。

十月十日、晴る。午前六時二十五分出發し、朝風に送られ、深霧に迎られて山口より出づ。八時半上小鯖といふ所に休む。此より道は一筋をちし寸分も曲ることなく、いと倦易し、暫くして左に美田伎松と題せる碑ありて右に一松樹あり。これは明治十八年七月廿九日車駕山口に幸し、此邊を過ぎさせ玉ふ、よりて紀念として植ゑしかりといふ。夫より數丁許にして佐波山洞道を通過して宮市に着し、松崎天満宮に詣で、此處にて晝食をせり。

抑々此社の由來を原ぬるに、延喜元年正月菅原道真公の太宰府に左遷され玉ふや、二月五日都を發し、其月中旬を以て此地に着す。時に周防の國司土師信貞迎へて公を廳中に入れ厚くこれを待つ。公よりて此地に止ること數月。一日酒垂山に登り嘆して曰く、美哉江山の勝、吾靈長く此に留らむと。後三年公は謫所に薨す。信貞哀慕措かず、祠を酒垂山下の松崎に建つ。これ海内菅廟の嚆矢ありといふ。午後一時祠域を立出で、三田尻に向ふ。一時四十分三田尻停車場に着す、待つこと時餘にして上車すること

を得。富海驛大呂洞道福川驛を過ぎて走ること矢のことし、徳山驛に着するまで僅に一時十分を費し、のみ。一行下車するや、數名の徳山中學校生徒は余輩を出て迎へられ、導かれて徳山中學校に入る。此處にて茶菓の饗應を受け、終りて幸町ある貞木といへる旅宿に投す、時に午後五時二十分あり。夕食後市街を見歩き、九時歸宿して寢に就きぬ。

十月十一日、晴る。明くれば旅行の第四日、徳山を發して福川島地に達する豫定あり。

徳山より福川までは再び流車に乗り、福川町より徒歩して夜市村に至る。是よりは有名なる矢地峠にして、長大凡半里許りに過ぎずといへども峻嶮にして、蟻徑を行くか如く、加ふるに礫石足を噛みて殆ど歩すべからず、午前十時四十分漸く其頂に達し、少しく下りて憩ふ。和田村立馬神尋常小學校前の一茶店に晝食を濟まし、それより約一里許を進むに、遙に數十名の學校生徒の來るあり、即ち嶋地小學生徒の余輩を迎ふるあり。列を正して其前を過ぐるに、小學校の向側に一の石碑あり、高四尺巾其半許にして、孝子高島常吉之碑と題す。常吉の父某籠を作るを職とし、碑の側ある小舎に棲り。母は早く没し、常吉幼にして學校に通學し獨り崎ある父に事へて孝養怠ることなく、遂に父に先ちて逝けり。島地小學生徒一同此至孝を旌さんとして其碑を建てたりといふ。

此日は當地の祭禮にて旅宿滿ちたれば、敬壽山觀念寺といふに宿す。寺いと小あれども厨大あるによりよく九十餘名を入るゝことを得たり。夕食後生徒一同八幡宮に詣す、神官某は特に余等一行の安全を祈りくれたり。

夜に入りて茶話會を開く、山口中學校及び此地有志者より贈れる金を以て之に充つ。能勢先生種々の注意を述べられたる後、先生の琵琶歌(那須與市宗高扇的)、其他二三の詩吟ありて大に興を催せり。終りて寢に就く。

十月十二日、晴る。午前八時島地を發す。軍歌の聲はいつもよりいと勇し、午後二時過大原村に着して新屋といへるに投す、

十月十三日、晴る。午前五時起床。思へは旅行の第六日にて既に行軍も明一日あるのみ。八時四十五分大原を出發し、柚木峠を踰ゆ、阿武川の上流を横り、鷹の巢を経て生雲市に着し若江屋に投宿す、午後三時二十分あり。五時頃に至り石州津和野より進みたる第一區隊もまた來りて、我宿所の向ある村岡といへるに宿す。此所別に見るべきものあり。

十月十四日、晴る。明くれば旅行の第七日、久しく思ひつめし旅行も既に今日限とはありぬと思へは旅行もいと名殘惜く、又歸るかと思へは心中何となく嬉し。午前六時第一區隊先出發す、軍歌の聲いと勇まじけあり。我隊はつづきて從ふに深霧進むに應じて益深さを増して我隊を妨げむとするか如し。道は我郷里ある吉部村を通る所ありて、遂に砂堂といふ所に出て、福井に至り坂部綠屋外郎店に憩ふ。外郎を求めんとすれども混雜甚しく、或は家づとにもし或は直に食もありき。居ること暫して復進み、遂に松本村に達せし時は早家に歸りし心地せり。松本橋にて諸先生に迎へられ、步調整然とて午後二時歸校して隊を解けり。

第三區隊修學旅行記

第一年級 竹内 宗輔

今茲十月八日、我萩中學校修學旅行を舉行せらるゝや、豫ての思ひにて、地理を實地に檢察し、且つ山水の勝を探らんと欲し、神情已に浩々たり、此日天晴れ、風塵起らず、蒼穹一点の雲あり、我一行の生徒七十余名、運動場に集參し、七時三十五分、留守の諸友に送られて、旭の昇ると共に校門を出で、平安古町より西方に向ひて進み、玉江橋を渡りて、郭北を願れば、講堂の屋根は、影を馳せて我行を送るが如く、玉江白水小學校前を過ぎ、奥玉江を経て、九時十五分三見村に達す、仁王寺あり、堂宇大からざるも、清淨にして塵埃なし、門前に仁王殿あり、殿内に仁王を安置す、それより進んで三隅村に入り、宗頭峠を越へ、十時四十五分鎖坂に至り一茶店を得て午飯を喫し、榎谷洞道を経て宗頭に入り、二時十二分、三隅村八幡社の前に抵る、此日恰も當社の祭禮に當り、一行は參拜し、下りて堤上を行くこと數町、明倫小學校あり、校長の歓迎を得て、校内に入り、暫らく休憩し、又進んで豊榮橋を渡り、豊原町を貫きて、三時五十五分豫て定むる所の旅店に達しければ、晚餐を畢らりて四方を散歩せり、日は既に西山に沈み、烟は林外に收まり、澄空水の如く、満月天にあり、四顧清絶、秋氣人に逼る、遂に歸りて寢に就く、夜半を過ぐる頃、風雨俄に起り、四壁礮然たり、天明けて猶止まざり、然れども一行は滿腔の憤發を以て外套を着し、八時十五分、雨を冒して宿を發す、行くと數丁にして町あり、澤江と云ふ、一宮祠に上りて、仙崎の海面を見渡せば、風波甚だ荒く、一帆の漁

舟を見ず、又進んで仙崎に向ふ、西風起りて雨益々烈しく、泥濘鞋を没す、海岸に沿ひたる隘陋の街を過ぎ四五町の松原を行けば、八阪神社あり、園内に少憩す、時恰も十時十分あり、此れより仙崎市中を過ぎ、船にて青海島に渡る、島は圍回八里、五部落ありて、人口多きは四百人、少きも五十人を下らずと云ふ、進むこと一里半の處に湖水あり、海岸を距る二三間の地は、皆一定の松を戴き、其景恰も丹後の天の橋立に似たるを以て有名あり、歸りて正明に向ふ、雨益々降る、松原を行こと十町許、午後二時正明市に達す、午飯を終へ、進めば橋あり、觀月橋と云ふ、某村に出で、雨始めて霽る、滿目新に沐するか如し、四時深川町に入り旅宿に就く、晩に河上を散歩すれば、月皎々として水に映じ、玲瓏として銀波浮び、水底にも亦明月あるかと疑ふ、時に吟蟲は金風に和し啾々唧々、人をして無限の感情を起さしめ、覺せず夜深に向ふ、乃ち歸りて寐に就く、拂曉、余等二三人校長の命を受け、中村先生に隨ひ、本隊に先たちて發せり、時に七時三十分あり、故を以て大寧寺に行くを得ず、此時宿雲駁を解き、殘月天に在りて、風光嫺然たり、川を左に取りて進むと一里、小阪を越ぬ、澁木村に出て、遙に荒ヶ峠を望む、蜿蜒百里、鯨ヶ岳其上に秀聳し、遠翠人を襲ふ、此れより山路に入り、遂に荒ヶ峠の麓に達し、仰ぎ望めば、群山の内聳然として特立し、峭壁屹々として屏障の如し、皆奮勵して登る、成は羅を捫し樹を攀じ、前牽後擁して、雲を排し石を穿ち、乱崖の中より宛轉魚貫して進む、滿身の汗珠流れて雨の如く、手震ひ足慄き、其煩熱苦心言ふに堪へず、一步一喘して遂に絶頂に達す、余由て思ふ、一苦一樂は、人世の通則あり、嗚呼、世路は猶高山絶壁の如きか、願れば、仙

崎の海面眼下に見ゆ、青海島は煙波模糊の中に隱見し、白帆其中を往來する様、恰も白鷺の翔けるが如く、眼界甚廣濶にして、又一段の美を添へたり、此れより阪を降る、其疾きこと飛鳥の如く、或は片帆の風に御するが如し、一旦歩を進むれば、復止る處を知らず、快奔半時餘にして燒河内に出で、又下りて美禰郡共和村字嘉萬に達す、茶店に入り、茶を喫し渴を慰す、復た進んで市中を貫き、廣濶たる山水の間に出で、田畝數百頃、高下級々相分れ、恰も碁局を連ぬるが如し、農夫の田を耕すあり、牧童の牛を牽くあり、山は蜿蜒々東西に連り、龍の伏し虎の蹲るが如く、其奇景真に造化の尤物あり、川あり、厚東川と云ふ、岸に沿ひて行けば、秋吉驛に至る、此驛より山路を経て歩を運ぶこと一里半、即ち大田に達し旅宿に就く、

明倫館の畧歴

特別會員 安藤 紀一

萩町の中央老松の鬱列する處。溝壘其三面を擁して北新堀と通し。方百三十餘間の廠寛地を容るゝあり。これを明倫館の遺址とす。明倫館は舊長藩の學校にて。其始には。享保四年。藩主從四位下行侍從毛利吉元公これを萩城第三廓内に創建せられき。吉元公は元就公より八代に當れる主にて。享保四年は實に彼の輝元公の萩城を卜定せられし慶長九年より百十六年の後。すなはち今より百八十五年の前に當り。その創建地はすなはち今の堀内村字追廻と稱する處にあたり。是より先。萬治年間。藩主綱廣公制法を定め。藩士に文武講習の忽にすべからざることを戒示せられたりといへども。文學の如きは。當時師儒尙少く士風動もすれ

は弓馬に傾くが爲に。文學に疎き狀況ありしが。元祿七年。藩主吉廣公封を繼ぎ。躬自好學の資性を具して。學事を獎勵し。首として山縣長白を左右に擧げて師とし。又これをして學説を士大夫の間に唱へしめ。また小倉尙齋を擢で。これを都府に留めて四方の學事を聞知し。將に爲す所あらんとしたれども。不幸にして早逝せられたり。吉元公は寶永四年嗣ぎて立ち。其遺緒を繼ぎて儒學を尊崇し。加判老臣毛利廣政等以下僚屬多くは文學ある者を用ひ。山縣周南を侍講とし。又教育の擴張を圖るは學校の設かるべからざるを以て。遂に此館を建設し文武の業を併せ興さんとするに至りたり。

さて明倫の名は。孟子の設爲庠序學校明人倫の語より取りたるものあり。當時の學頭は小倉尙齋ありしも。此館の建設に關して政府の議を獎勵したるは。佐佐木雅直山縣周南にて。この二人は實に學制を審議し。延喜式に據り唐制を考へ。江戸昌平費の規則を參して。これを規畫したるあり。館の規模は。周南の記に。北爲先聖廟。講堂居中。左爲經藉之庫。右爲厨。厨之西爲齊舍。廩生員。内門外環以列樹。講武。東爲劍。西爲槍。射圃在其西。旁圃爲講武經習曲禮教天文數學之樹。射圃南童生學書之舍。大門外壯士習騎之埒。とあるを見て。其如何を窺ふべし。

然るに。當時は國費多端にして。充分に校費を給すること能はざりしが。其後數代の間に。學資を増加し。寮舍を増築し。校則を修補して。先志を承くるに怠らざりしも。天下久しく極治の運に會して。士風振はず。以て文化文政に及びしに。尋ぎて天保に至り。藩主敬親公時勢に見ることありて。更に文武を興さんと謀り。

封を繼かれし始より。頻に學校に臨み。或は親しく精業の子弟を召してこれを賞し。或は怠惰生を斥罰し。又文學に長せる平田新左衛門を學校用掛とし。近藤芳樹を擧げて士班に列し。寄組以下士族の各組に稽古掛二名を置き。國老一名を稽古掛總奉行とし。日常の學業を監督し。勤怠を注査し。各郡住居士の稽古名録を徵見し。江戸邸にも學館を設けて。名儒を招き、在邸諸士の業を課せらるゝなど。獎學の法一からぞ。特に從來藩主の東觀より歸る毎に。必文學の士を城内に召集し上聽せらるゝ定例ありしが。是に至りて。武藝亦盡くこれに準せり。かゝる有様あれば。凡學術技藝の講明すべき者は。概これを興隆したるを以て。明倫館舍漸く狹隘にして適用しかたきにより。規模擴張の必要あり。更に地を江向に卜定して。館舍を再建するに至る。その工事は。弘化三年より嘉永二年まで。四年間を以てして成れり。地の廣さ一萬五千八百八拾四坪五合。中央に聖廟あり。宣聖殿と稱す。廟内七室に分ち。中央の一室を聖壇とし。孔子及顔曾思孟の木主を安置す。聖壇の左右を東房西房とす。廟の周圍に石欄を設け。泮水其外を遶り。架するに石橋を以てす。門あり觀德門と名づく。門の左右に塾あり。講堂は廟の西にあり。堂の廣さ二百席。學頭の舍。生員の寮。小學の舍。其西に在り。書庫其前にあり。又聖廟の東を演武場とす。射圃三區を設け。劍術の舍四つ。槍術の舍三つ。其他。禮式天文算術兵學馬術の諸舍を設け。劍槍の二術は。別に一大舍を設け。藩主の親臨。又は他藩の士の來り試るに供す。廟の後に池ありて。水泳を習はしめ。其西に館あり。藩主學に臨むこと。養老の禮を行ひ衆士の業を視る處とす。池の北に馬場あり。馬場の北に練兵場あり。館の外に醫學を修むる好生堂

あり。洋學を修むる博習堂あり。是に於て學校の制大に備はり。復前日の比にあらざ。この規畫は。當時參政せし村田清風の功多きに居れり。清風は。學制に關して獨其外形のみならず。其内容をも改革する精神にて。教育には虚文を退け實効を責め。文學には經學歴史制度兵學博學文章の六科を設け。其材質により業を授け。兵學には甲越家の説を廢して。專七書練兵二記紀効新書兵要錄海國兵談等を究め。火技は古傳を廢閣して洋法を開き。弓術は的前春射等の華法を廢して革を貫き遠きに達せんことを務め。刀槍には形前の古法を除きて試合を習ひ實技を角べしむるを。時に應ずる改革一からず。而して世は漸く多事となり。安政以來外國人との交渉起るに及ひたれば。館内亦必要に應じて步騎砲の三塾を建設し。別に兵學校を置きて。益文武を練修せり。是に於て。百餘年來此館によりて防長二國士民の間に涵養蘊蓄したる文化は。甚しく發揮せられて。この館より出づる人材は。雲の如く雨の如く。幹天旋地の原力となりて。大に天下を震動せしめつゝ。明治維新の皇業を扶翼し奉るに至りぬ。是獨明倫館の歴史上に於てのみならず。我國文明史上に於て特筆大書すべき事實ありといふべし。

もし更に明倫館の事を秩序正しく述べんとせば。下の十二條に別たざるべからず。即教則。功令。學長。申渡制條。一般規則。舍中規則。職員及其俸給。束脩。經費。藩主臨校の儀。祭儀。學校構造圖解。藏書これあり。然れども此各條は今一々細説するの必要を見ず。これによりて姑く左の數件に留めんとす。

教科目は。漢學。音樂。醫術。天文。地理。算術。筆道。禮式。兵學。弓。馬。劍。槍。騎射。打球。大砲。柔術。水軍。游

泳。銃陣。

書生には小學大學の別あり。大學生は修業三年とす。功令は山縣周南の撰文にて。諸生の暗誦すべき者とせり。

諸生の等科を設けて黜陟を行ふ。高足。日進。専心。遊息。擯斥。の五等あり。通常に。試験の成績は。上中下の三等とせり。

職員は總奉行一人。目附二人。學頭一人。助教一人。講師無定員。都講二人。講師見習三人。小學教諭二人。書記一人。舍長一人。書記兼務司典二人。廟司二人あり。

生員は寄宿通學合せて百人内外。寄宿生定員四十五人。内藩費生三十人あり。學校經費は米千四百石とす。

祭儀は春秋兩度孔子四配を祭るあり。春は藩主の自祭。秋は學頭これを行ふ。藏書部數凡千六百八十二部

最初の學頭小倉實操に繼にきて。學頭たりしものを順次に擧ぐれば。山縣少助。津田忠助。小倉彦平。山根七郎左衛門。繁澤權右衛門。山根六郎。小田村文平。中村九郎兵衛。山縣半七。平田新左衛門。飯田左門。中村伊助。小倉尙藏。中村彌の十四人あり。

かくて藩主治所を山口に移さるゝに及び。三兵兵學校生徒は大率山口に徙り。文學生徒獨存留せしが。學制

須布の際。幾もかくして。この文學校の系脈は。萩中學と稱する名によりて繼續せらるゝに至れり。これを明倫館の畧歴とす。

こは余が會て古老の談話と古記録とによりて參互考合して記し置きたるものより摘録せるあり事實に誤あらば博聞の君子これを正したまへ

瀧口吉良君の演説

編 者 記

過般佛國パリ博覽會に臨み、今度世界を週遊して歸朝せられたる瀧口吉良氏は、昨年十二月十日病を努めて我を訪ひ一場の演説をかせり、其主旨は學生は在學中外國語の研究を怠るべからずといふにありき。瀧口氏は談を己か東京三田慶應義塾に在りて勉學したる當時の有様に起し、次て今回洋行中外國語のため頗る困難をなしたる次第を述べ、さていふ様「憶ふに外國の紳士は、大抵少くとも二ヶ國位の外國語を話し得るか如し、故に海外漫遊と出懸け外國人より一個の日本獨立紳士と目せられぬから、英語さへも充分に談ずること能はずと云ふに至りては、個人としての不面目は格別、外國人か海外漫遊の紳士にして如此くんば、日本の文明と云ふも實に或る一部分の文明ありと付度するに至りては實に日本國家に對して恐縮に堪ゆる次第ありとの感覺を起すと同時に、忽ち聯想して學校時代の不勉強を悔ゆること屢ありき、……左れば余は諸君に向て、學校時代に於て余の覆轍を履まざらんことの忠言を進めざるを得ず。」

次て同氏は大學卒業の學士といへども、外國に行きては外國語修養の不足あるため、直様一人前の働をなすこと能はざるの例證を示し、更に語を改めて曰く、「抑々洋學を修めたる學者にして、高尚ある真理を解し或は實學を實地に應用し得る能力ある人にして、語學の出來ざるは太た遺憾からずや。眼能くこれを視るも、口に言ふこと能はず耳に聴くこと能はざれば、則ち不具者と謂はざるべからず。不具の學者は今後可成これを減少して完全なる學者の數を増加せんことを國家のために熱望せざるを得ざるなり。……諸君の學海を出で、社會の表面に立ち、大に其手腕を揮はんと欲する秋こそ則ち外國語は無上の武器たることを確信す。」

次て同氏は二十七八年日清の役に、熊本紫雲派の學生か支那語を解し得ることを得たるため、日本軍の得たる利益の大かりしこと、普佛戰爭に獨軍の勝利を得しは、主として獨軍士官の佛語を解し得たるにある事等を説きて談を結ばれたり。今日中學生の英語か昔時に比して漸々劣りつゝあるの時に當り、余輩は同氏の談話か最も適切にして且つ効果あるものたるを疑はざ、深く同氏に向て謝するものあり。

古澤知事の演説

編 者 記

二月一日古澤知事は縣下巡視の序を以て本校に立寄られ、「我國學生の任務」を演題を以て、學生一般に向て一場の演説を試みられたり。以下載する所は編輯子の記憶する所を以て後日これを記せしものあれば、多

少の誤謬なきにあらざると雖も、大体の要旨は之に外ならずと信す。

知事は劈頭聲を勵して曰く、抑々日本國か今日の開明あるを致したるものは眞に不思議あり、余輩は如何にしてもこれを不思議といはざるを得ずと、而して徐ろに其然る所以を説て曰く、徳川幕府の末造に當り、薩あり長あり土あり、而して徳川氏衰へたりといへとも、三百年の人心を懸る所なきにならず、しかも維新の大業は歎呼の内に成就されたり、不思議といはざるべからず。世界の内、國に革命あれば必ず其國の疲弊を免れざるを例とす、然るに我日本國の國威は維新變後揚々として昂かり、滿帆順風を孕みて終に列強の間に乗り出すに至れり、不思議といはざるべからず。蛤御門の事變起るや、薩長は反目せり、長州は朝敵の名を蒙れり、尾張大納言義勝は大旗を擁して防長の國境に臨めり、三大夫の首級は總督の几下に差出されたり、然るに不思議にも薩長の連合は此間に成らんとし、總督は兵を收めて歸れり。馬關の砲臺は列國の軍艦を砲撃せり、英國公使パークスは大阪に來りて幕府に迫れり、危機一髪幕府は將に外交難の爲に斃れんとし、外國は將に指を我内沿に染めんとす、然るに不思議にも恰も是時を以て蒼皇英國留學中より歸りて國事に奔走するに至りしは、伊藤俊介井上聞多の二人あり。就中最も不思議あるは斯る國事多難の時に當りて、上に先帝の如き聖天子の出で玉ひしことこれあり。勿論下には愛國の士天下に充滿せり、然れども此等の徒は悉く皆此聖天子あるを聞きて靡然として奮起せしものに外ならず。先帝國を憂ひ玉ふこと深く、毎旦雞鳴必ず起して國事を祈られしと。かくて 先帝は崩し玉へり、繼ぎて立ち玉へるは叡聖文武ある 今上皇帝あり、

維新の業もとより 聖徳の致す所ありといへども、假りに此業をして一二年遅るゝことあらしめんか、宇内の形勢未だ容易に圖り知るべからざるものありしを知らむ。我國今日の至治を得たるもの豈不思議の極を知らずや。孟子曰く、「天將降大任於是也、必苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性曾益其所不能」と。烏乎知らむ、天上我 皇祖の靈亦まさきに茲に意あるを。

知事は話頭を轉して曰く、現今宇内の形勢は眞に畏るべきあり。彼の米國を見ずや、彼は共和の政躰を以て宇内に誇れり、彼はモンロー主義を取て自ら立てり。而して今如何。彼はハワイを領せり、彼はフィリピンを取れり、マッキンレー氏は確かに帝國主義のアポストルとあり了せり。又彼の英國を見よ、グラッドストンの時二百の殖民地の人民ボアア一人に殺さるゝや、グ氏は彼等と無條件の和議を結べり。然して今如何。ソルスベリー卿は五萬の大兵を三千里外に送りて、金剛石の産地たる彼の小弱國を克復するに汲々たるにあらざや。嗚呼宇内の形勢は眞に畏るべきあり。

此至治に遭ひ此時勢に生れて繼國者たるべき大責任を有する現時の青年、豈勉むることなくして可ならむや、豈覺悟なくして可ならむや。況んや久坂、伊藤、井上等の先輩を有する青年に於ておや。

陸軍歩兵大佐栗屋幹君演説

第五年級 岡本精一君速記によりて編者記す

先般清國より凱旋せられたる栗屋大佐は、墓參のためとして頃日其郷里ある當地に來たられしを以て、二月十

四日午後一時大佐を請して一場の演説を乞へり。今左にその要旨を摘記すべし。

大佐は先づ全校の生徒に向て問を起して曰く、廿七八年の戦役及び昨年之事變に於て、日本軍の勝利を得て支那兵の敗走したる所以は奈何と。學生中答ふるものあり、或は曰く、日本兵には愛國服務の精神充實し、支那兵はこれに反す。或は曰く、日本人は萬世一系の皇室を戴きて團結心に富み、支那人は革命の風に馴れて此心に乏し。大佐徐ろに口を開きて曰く、二生の言當らざるにわらず、然れにも我軍の勝利を得し所以のものは主として我軍人の一も臆病に感染せられざりし故あり。臆病とは何ぞ、默計熟劃豫め己の向ふべき方針を定め、直行猛進毫も屈撓することなきの勇氣に乏しきをいふ。臆病は實に軍人の最も忌むところのものなれども、官吏といはず、商人といはず總て此病に感染せざる様注意せざるべからず、諸子宜しくや。かへを以て禁物とすべしと。

次に大佐は北清事件に關しては、教員并に生徒の質問に應じて答ふべしといひ、

例國兵の北京に集りたる時、身軀上智識上日本兵の他國兵に比して著しき欠點は如何

の間に答て曰く、日本兵は他國兵に比して軀幹甚小あり、日本兵の銃器は支那兵の或物にも劣れり。日本兵の白色軍服は英米兵の土色軍服に比して遙かに不利益あり。日本兵の食料は中々他國兵の贅澤あるに及ばず。然れども以上の諸缺點は我軍人か毫も臆病に感染し居らざるの事實を以て優にこれを償へり。然れども日本軍馬の劣等あることは實に列國に對して恥しき程ありと。

北京に於ける列國兵の日本兵に對する感情は如何

の間に對しては曰く、日本兵に最も善きは露兵にして、佛兵の如きも争を彼より避くる程にて、英米兵とは云ふまでもなく最親密あり。これ何によるか、要するに戦勝の結果に外ならずして、列國は競ふて日本を彼等の仲間とあざんと欲するにあり。而して茲に我國民の覺悟すべきことは、列國か斯る好意を表すに對して我等は必ず適當なる實力を有せざるべからざる事これあり。

列國兵の彼地に乱暴を働くもの多きは、その規律ある本國兵に非ずして各國殖民地守備兵若くはコッサツク兵あるによる、又日本兵の規律あるは徵兵制度與て大に力ありと、果して如何

の間に對しては曰く、露國は四箇聯隊を出せしが、其内一は聯隊旗の旗竿のみ存し、他の一は僅かに旗片を存するのみありしを以て、如何に其戦功を経たる老練の軍隊あるかを、証するに足る。其他の外國兵皆立派ある本國兵あり。徵兵制度に關しては、英米は僱兵法を取り、佛、獨、露は徵兵法を採れり。佛のは徵兵法あれども免役とあるべき箇條多く、獨は現役二年、露は五年あり。日本の三年制はこれを折中するものにして最適當ありと。大佐は更に進みて近年往々唱へらるる二年制の不可ある由を述べられたり。

北清戦况視察談

特別會員 竹内 菊五郎

自分は昨年春より、清國北京に留學して居りましたか、歸らす其年の六月十三日より、義和團匪の暴舉に

續て、支那官兵の攻撃を受け、八月十四日各國聯合軍の到着まで六十餘日間、重圍の裏に籠城し、九月一日に籠城者一同と相伴ひ、北京を辞して歸途に上り、戰跡を視察し勞々、通州より舟に乗して白河を下り天津に出て、其月の末に歸着しましたか、今回乏を本校に承くるに當りて、學校諸君の内をり、當時の實見談を聞きたいと望まる、方もありますから、事既に舊聞に属したれ共、茲に當時見聞せし内の一節を述へようと思ひます、尤も當時見聞せし事を、順序を逐ふて終始を述へるとすれば、優に一冊子を成す程あるから、茲には只通州に於て實見せし慘狀の一部分を御話すること、致しませう、

諸君も既に御承知の通り、通州は北清第一の殷富ある市街で、芝罘天津は固より北京と雖も、通州の殷富あるには遙に劣りて居ります、何故に通州が斯る盛況を占め居るか云ふに、全く運漕の便利ある地位に方りて、貨物の出入は勿論、商賣の盛あるに起因せしものにて、其内入荷の尤も盛あるものは米であります、抑も黄河の流は、支那南北の産物に判然たる分割をなして、黄河以南は水田多く米産に富めとも、黄河以北の地は、乾燥にして水田としては更に無く、農民は只畑物を植付けて常食に供し居るのをてあります、尤も書經の禹貢篇に據れば、今の直隸省は、當時の帝都を奠めありし冀州の地にて、其土は白壤とあり、又其賦は上の上とありて、當時の版圖内に於て最上等の貢賦を納め居りし土地なれば、其當時は水田も多く米も澤山産出せしからんかあれ共、其後物換り星移るに隨て、黄河の水理が屢々變遷したる爲め、遂に灌漑の利を失ひて、水田が無くなりたるものからんかと思ひます、併し水田のなくありしは何時代の事かと推さるゝと、

明言することは出来ませんか、戰國の時、蘇秦が燕文侯に説ける語中に、燕は南に碣石雁門の饒ありと云へるに就て考ふれば、其饒とは、畑作田作の孰れに豊饒あるかは分らされども、蘇秦が特に兩地の豊饒を提起せる實情を察すれば、必ず米穀に豊饒あることを云ひしものなるへし、果して然らば、北清に水田のなくありしは多分西漢後東晋頃迄の事かと思ひます、

今の北京の始て盛んにありしは、諸君の知れる如く、趙宋の頃、遼金の茲に崛起せしを始として、彼有名なる元の世祖忽必烈か、其跡を繼て都を茲に奠めしより、元の一代は勿論、明の永樂帝以後清朝の今日に至るまで、約七百年の長き年月の間、常に百幾十萬貴賤の生靈が棲息する繁華の場となりまして、而して此多數の生靈が日常常食の欠くへからざる米は、黄河以北の地に産せざるを以て、己を得ず遠く南方産出の米を輸送し來らねはからぬと云ふ不便が起りました、併しながら、元朝已下歴代の帝か、此不便を顧みずして、都を茲に奠くと云ふは、元代及び今代の版圖に就て論せば、北京の地は凡そ南京の midpoint に位して居るからの如く思はるれども、其實は支那歴代の患は常に北方にあるを以て、些少の不便は之を忍びても、成るべく都を北に置て、北方を威壓する積りの策を建てたのであります、

斯る不便の中にも、歴朝の帝か、古跡を利用して幾分の便利を得たるは、有名なる夫の運河であります、南楊子江より北黄河に至るまでの運河は、既に隋煬帝の時疏鑿せしものを、其後歴朝の帝か、幾分づゝの改修を加へ、更に又黄河より天津迄延長し天津より白河を浚渫して、百石積以上の舟が、舳艫相合んで快意に通

州まで溯るを得るようには致してありません、此水路に由て、遠く南方より實賦に供せし米を舟載し來りて通州に陸揚げし、全地に周圍一里もあらんかと思ふ程の敷地に大倉を築て、其内に積み貯へ、更に通州より北京に到るまで、我邦の道程四里強五里弱の間には、我邦の國道にも勝る程の大道を作り、尙其上に長六尺巾式尺程の花崗石を敷き詰め、以て沙泥が車輪を没するの憂を除きて、隨時に通州の米倉より北京に車送するを得るやうに致してあります、此大工事を見ると、誰てにも一驚を喫せぬものはありません、併し通州人民の得る利益は、只此米に就て得る利益のみに止まらずして、其他北京人民の要する百貨の出入に就て得る利益は、尙我か東京の横濱に於けると一樣であります、斯かる都合であるから市民殷富にして、下等の人民と雖も、相當の利益の下に、樂易ある生活をあして居りまたた

然る所、今回の暴動に、支那兵は脆くも連敗して、通州まで遁込みしも、通州の城は薄弱ければ、守戦の用に適せずとあして、尙退て北京城を固守せんとの考を起せしものから、彼等か通州を引揚るに臨みて、居民を戒めて云へるには、外國兵は軍規も厳しく、儀禮も知り居ると聞けば、居民を剽掠したり、無辜を殺戮するなどの事は、決してあるまいと信するから、汝等一般の者は、堵に安んじて騒かぬ方が宜しからんと思ふ、特に日本軍は、義侠心に富みて、我を憐む情に尤も深いと信するから、成るべく日本軍に就て降るへしどの一言を残して引揚げしが、居民も各自の久しく住み馴れし家屋を棄て、遁亡するは、心苦しき事あれば、一も二もあく其遺言を守り、中には酒肴などを用意して、戸外に待受け、所謂簞食壺漿して王帥を迎ふと云ふ

有様にて、聯合軍に向て、一入の哀憐を祈りましたか、其内に聯合軍は支那兵に代りて通州に入込みしも、居民は其倉卒の際に優游の措置の出來得る筈をければ、未だ我軍隊の下に來らざるに、乍ち意外の慘禍に罹り、萬國古今の歴史に類例なき修羅の慘狀を呈したるは、露佛兵の乱暴に出でしものにて、自分も其實際を目撃せしときは、敵國の人民かからも、亦爲めに一滴の紅涙を搾りました、

自分等の一行は、平素より通州の盛況を知悉して居りますから、今回の攻撃にも通州は戦争のわらざりしと聞けば、居民は定めて多少の商賣を營み居るに相違なく、左れば少々の買物も出來て、積日の疲勞を慰し得らるゝあらんと、心中竊かに樂んで歸りましたか、既に通州の城門を入りて見れば、其慘狀は實に豫想の外に出て、あか／＼北京などの比てありません、沿道の商家は悉く打崩してあり、又滿目灰燼とあり居る所もありて、居民としては一人も見當らず、只所在に瘡犬か三々五々相聚りて、伏屍の肉を啖ひ居るを見るのみでありました、我邦の兵站部に着くと、其附近は嚴肅なる我軍規と、至渥なる我國恩の収縮の下であるから、家屋財産も安全で、居民も感泣して居りました、居民か自分等の一行を見ると、丁寧に挨拶して、幾らも酒をこを呉れた者かあるか、之は全く天恩感泣の餘り、自分等迄に謝意を表したのであります、

魯佛兵か乱暴せし模様を篤と聞糺したか、同じ乱暴の内にも、各流義か違ひまして、佛兵の乱暴は、十人程宛相伴ふて、商家を片端より歴搜し、先づ主人を虐殺したる後、妻子を切かして金銀衣類を強奪し、尙又妙齡の婦女を見ると、之を辱かしむるか、其主とする所は、財物の掠奪にあります、露兵は之に反して、十人

或は二十人相揃ひて、毎戸に押し入り、必ず先づ婦人を捜し出して、上官より順次に之を辱かしめ、歸るに臨みて金銀を奪ひ去るか例あれども、其主とする所は、婦人狩てあります、元來支那の中流以上の婦人は、平素能く支那風の教育を受けて居るから、斯く節操を汚かされては、其耻を忍ぶこと克はずして、或は縊れて自殺せしもありしか、大抵中流以上の家には、庭に火の用心の水瓶がある、其中に倒に没して自殺したのである、魯佛兵が斯かる乱暴を働いたものであるから、居民は泣いて我軍に哀訴して、保護を求めたけれ共、他國兵のことであるから、忠告位に止まりて、如何ともすることか出來あかつたのであります、宛に角婦人の自殺せし總數は、五百七十六人と云ふ多數であつたか、尙此外に數へ洩れもあると云ふことであるから、先づ六百人と見れば宜しい、中流以下の婦女は、節操心も薄いから、節操を汚かされても、耻を忍んで生きて居るものか、尙此數より多くあることと思ひます、之に虐殺されし毎戸の主人を合算すると、無辜を殺害せし總數は、實に夥しい數に上ります、斯かる死は、戰場の打死と違つて、被害者の心中は固より、遺族者の心中は、無量の恨を含んで居るに相違ありません、新聞紙上まで見ると、今日も尙ほ土匪襲來の事か書てあるか、自分等の考にては、其土匪の内に、或は孝子義弟か復讐を企つる爲に混しては居らぬかと思ひます、二國の兵士か通州に於て斯かる野蠻的の乱暴を極めたから、北京到着の日は、直に其果報か著はれて、各國人より大辱を蒙りしのみならず、北京の商民か、二國の兵士の駐屯所に物品を賣りに行かぬから、日用品に痛く困つて居りました、併し之に反して、我御國の光輝は非常なもの、實に目出度い事でありました、兎

に角北清第一般富の地か、二三日の間に、修羅の慘狀を極めたが、實に亡國の人民程悲しいものはないと思ひました、

長藩尊攘運動の裏面

第五年級 河野 厚造

長藩の尊攘運動は表面の事業あり、然らば其活劇の黒幕の後は如何ある有様ありしか、これを探るはあか／＼興味あるものあるべし。余は暇を偷みて、今を距る四十年前後長藩の表面運動烈火の如き時に當り、其商工業の一部分を探りしかば、估らく叙して以て幾分參考の資料とささむ事を庶幾ふ。唯これ父老の談、事の虚實は諸君と共に追窮し愈明確ならしめむと欲するあり。

瑞應寺の如き東光寺の如き其他十餘の神社佛閣は、藩費を以て建築したるもの其額大ありしあるべし。然るに降て藩公江戸沙村の閑居を營み更にこれか三田尻に移すことあり。其消費したる所實に漠大ありしといふ。嘉永の時、新川堀割の事業あり、其用るし所、人夫三十貳萬人役、舟二萬餘とこれまた推して知るべし。然らばこれらの消費を如何にして補填せしかといふに、姥倉開渠の碑に記して曰く、能く此事業を成したるは、上諸公の儉素と下庶民の之を助けたるに因ると、實にその如く、過激ある消極の手段を執り、國老益田越中の如き淫祠を破壊したる、金銀絹布を用ゐるを禁したる皆其一例とすべきあり。されど又一方には積極的ともいふべき産業を創始せられしことあり、坊間に産物と稱するはこれあり。産物の方法は藩の手にて、諸地

方より物品を買収し、更に利を得て以てこれを賣弘むるあり。其方法もよく、其考案も可なりとも、これに當るものは、方圓相容れざる武士にして、種々の名目を以て、過分の役員を設け、事業を顧るをせずして自利をこれ謀り、折角の事業も能く功を奏したるものはあらざりき。他藩のもの指して長州のつかみどりと呼びしといふ。凡そ七十年前綿糸の産物を起す、然れども暴利を貪て民憤怨國內漸く擾攘せんとせしかば忍ち瓦解したり。其後久しく絶え、五十二三年前に於て更にまた藍を始め(米屋町下りに開く)破るゝに及び東田町に木綿を、御許町に藥種、農具を相尋で開きしも皆面白からず。四十二年前の頃に及び、藍及烟草の業を創めしかど皆其需用に適せずして、これ亦損失に終れりき。此間にありて終始利を得たるものは製蠶ありとす。故に製蠶の業は藩内諸所に開かれ、藩公屢千代倉製蠶場に臨みし事ありといふ程にて、其利潤を以て、他の損失を補ひしものありとぞ、されば維新前後に此業廢せらるゝや、諸種の事業も遂に又起らずありぬ。徳川の流濁りて、天下漸う波立たんとす。長藩にも國防の必要ありて、諸種の砲兵を造られたりしが、今其二三を聞くに、

一、大砲は天保年中鐵をもて鑄たりしが五十年前鉛圓玉百斤入の巨砲を松本郡司にて鑄造し、狐島に於て試發射を執行したるを青銅砲の嚆矢と爲し、尋で鑄造方を新川口に設け、更に沖原に移轉して、水車を利用し水力を以て砲孔を穿ち、砲身を精げたりしあり。而して此間に製したるものは、大を八十ポンド玉入とし砲身貳間口經七寸、二十四ポンド入を小とし砲身六尺五寸野戰砲之に次ぐといふ。これらは皆前田、阿彌陀

寺、彦島等の諸砲臺に輸送したるものにて、大砲方は主として荻野流の司る所ありしといふ。

二、火藥は火器製造と共に起り天保中即ち申歳の洪水に其沖原ある製造所を流失せられてより更に前小野字焰硝倉に建設して製し居たりしが四十年前に及び之れを龍藏寺に移して、倉庫は海岸を避けて山田村にこれ亦尋で移轉せられしといふ。彼の三十八年前龍藏寺火藥製造所の爆裂したる慘狀は、吾人のよく聞く所にして、當時藩を山口に移したりしが其爆裂の響山口に達し、外國船萩を砲撃すと爲し、奇兵隊の斥候を萩に飛ばしたるを種々の話を聞きしことあるは此時あり。

三、地雷は踏地雷火、針金地雷火、越歴幾地雷火の三種ありて、皆箱詰の爆裂藥を數百貫目の石と共に地中に埋め、踏む事、針金を引く事、越歴幾の仕掛等にて發火せしめたるものあり。越歴幾の如きは彼の百年餘前發見せられしが、るばるに電氣を利用せし者と聞く。水雷は山口榎野川及厚狹郡吉田(高杉晋作墳塋の所)等にて屢試験したりといへど。猶詳しくは探り得ず。堀内大火の節火の益田屋敷に及ばんとするや、乃ち其庫より百個の地雷火を菊ヶ濱に埋めし話をかし。

四、彈丸製造は大砲製造の附屬事業ありしが、信國爲八といふ人小畑にハンシヤ、爐を築き、古鐵砲を熔かして鐵彈を鑄ることを創めたりしが、鑄造方と軋轆して、僅に大砲二丁を熔かして、二千圓の巨額と數年の苦心とは遂に花さくこともあくて、小畑臺頭突屹たる半石半煉瓦の殘爐を今に止めて、空なしく水泡に歸しぬ。諸君一度小畑に遊ば、直ちに、ある河畔のヒラミッド様のものを目にするあるべし。其構造等に至

ては、就て見よや。

五、船艦に付きては丙辰丸、庚申丸は共に長藩にて製りたる帆船にして、六万圓(?)にて外國より買入れたる壬戌丸と共に其軍艦ありき。庚申丸は藩臣藤井庄之進の造船術を長崎に受け、歸りて、起工したるものあり其進水式を小畑波戸ヶ鼻に擧ぐるや、敬親公親しく臨で見ると、船下らず、堀野忠右衛門の螺旋を利用して容易く進水せしめたるは一場の談話に過ぎず。

當時造船方鍛冶に鐵兵衛あるものありき。元と伊豫のものありしか用ゐられて長藩にあり。馬關の戰壬戌丸の敵彈の爲めに沈没し、已にして引揚ぐるを得たりし時、鐵兵衛の外これを修むるものあかりしかば、態々長崎より召返され、立所に修めて故の如くおしたりといふ話あり。此人後には藩公より朝廷に奨められ、遂に日本造船鍛冶總統領とあり長崎に終れりきと故老は語りぬ。

以上はたゞ尊攘運動裏面の極めて小部分ある、且つ針の先にてつゝく様の感あれども、幸に諸君が之に敷衍に敷衍を重ねて、大に其裏面を明にして、表裏透明ある長藩の歴史を作るの道火にもとかくはものしぬ。

讀 書 屑

第五年級 坂上五一

人を以て江城を守らむ、

酒井忠勝幕府の樞位にありし時、命して天郷兩國の二橋を架せしむ。或人その險を失ふを言ふ。時に忠勝曰

く、苟も國を保つものは人を以て城とせず、人心散せば何を以てか國あらんやと。彼のセバストポール何物ぞ、威海衛砲臺何物ぞ、我に日本男子のあるあり。

簡潔を貴ふ、

或時本多作左衛門が出陣中その家に送りし書に

一筆啓上火の用心、おせん泣かすか、馬こやせ。

又曾我五郎か知れる寺院の近火見舞に

昨夜隣火忽に消ぬ、貴寺安穩喜悅々々。

ちと書けるは文簡にして意を盡す、實に天下の至文なりと賞せるを聞きて大に感ずる所あり、依て直ちに隣家に鴟鴞を借りに遣る文に

づく御貸可被下候

と書して

づくとは、み、づくのづくにて候、み、づくと認め候ては餘り長々しく相成候に付き、づくと相認め申候。

と書き添ひ送りぬと。近時人漸く浮華に流れ、徒らに難句難字を臚列して文章に巧かりとあす者あり。此輩これを見て戒むる所ありて可あり。

大村あり我軍愛おし、

戊辰の役榎本武揚等軍艦數艘を以て函館に據る、官軍必勝の勢を以て海陸より攻む、然れども榎本等能く防ぎ能く戦ひ容易に下す能はず。是に於て西郷隆盛自ら大軍を以て發せんとす。時に大村益次郎その行を止めて曰く、賊軍の降る豈旬日を出てんやと。隆盛至れば果してその言の如し、隆盛感嘆して曰く、大村あり我軍亦愛ふるに足らざるありと。嗚呼耶蘇生れて二千歳、彼か故國は見る影もあし。釋迦死して二千五百歳、彼が故國は奪はれたり。孔子道を説きてよりまた二千五百歳、彼か故國は將に亡びんとす。然り而して、神武天皇武を以て國を建て給ひてより茲に二千五百六十有一年、其國は隆々として、其勢朝日の東天に昇るが如し。露は斬れり、佛は姦せり、英は盜めり、而して日本は獨り勝てり。嗚呼軍國の事今日より急あるはあし。一の榎本有るべからずといへとも、百の大村は存せざるべからず。余輩は切に此一項か、我國軍人の主産地たる防長の學生諸子によりて讀まれんことを冀望するものあり。

新井白石閻羅とあらむとす、

白石少くして大志あり、常に曰く、丈夫生きて封侯を得ずんば死して當に閻羅たるべしと。後從五位に叙せられ筑後守とある、是に於てか閻羅の數一人を減す。嗚呼我同學生中、生きて大勳位侯爵を得ずんば、死してデビルとあらむと欲するもの何と限らむ。冀くは四百有餘のデビルを生せしむる勿れ。

詞

藻

歸省中の最も愉快かりしこと

第二年級 山縣 恭輔

余歸省して、久しく、遇はざりし、父母の温顔に接し、朝に、夕に、笑ひ興じて、相親しみ、嬉しく思ひけるに、天は、團欒として楽しむ、我一家を嫉み、惡魔は、我家に侵入しぬ。我慈愛する母は、此頃の、烈しき暑氣に中りて、終に、病床に臥し給ひけるを、悲しき。我は、常に、遊學して、父母の膝下に侍し、孝を盡す能はざるを怨みしが故に、此時こそ、平生の恩に報いんと、日夜、病床に沿ひて、看護しぬ。阿武河の水、滔々として流るゝと等しく、日月、駢々として過ぎ、我、夏季休業の中、四十有二日は、名残りなく過ぎ、母の病氣は快復しぬ。余等兄弟の悦び、夫れ、如何んぞや。乃ち、其翌々日、父母兄弟相俱して、黄波戸海濱に遊ぶ。此地たるや、我郷里を隔つること、東北里餘にして、行くに二道あり。一は縣道にして遠く、一は山路にして近し。我等は、後者をとりぬ。羊腸たる山路を迂回し、漸くにして、頂上に登り、休憩す。顧みれば、清流澗々として流るゝ河邊に、茅屋點々、綠竹青樹之を綴る者あり、之を我か郷里とす。右方を望めば、鬱々たる森林あり、之を城山と云ふ。夫の、武門政治の嚆矢たる、源賴朝の臣にして、宇治合戦の時、先登第一を以て、勇名を轟かしし、佐々木高綱の城跡ありと云ふ。休憩暫時にして、歩を進め、蒼々たる松杉の間を通せしが、眼下に海は瞰ぬ。是に於て、心急き、情劇し、荊蕀の足を破るも意とせず、趨り

て海濱に達し、岩上に衣服脱ぎ捨て、海中に飛び込みぬ。彼處に、竿を以て魚を釣らんとする者あれば、此處には、水をくぐりて貝を探らんとする者あり。或は、手に籠を持って、海草を摘まんとする者等、皆、已が欲する處をかして樂しむ。午後三時頃、平ある岩上を撰び、毛布を敷き、各得たる所の鮮魚を調理し、和氣霽々の中に、酒筵は開かれぬ。前には、黄波戸灣を控へ、仙崎は遠く海中に突出して、數十の老松、數百の人家、圖書を見るの觀あり。遠く、片雲の掛りたる如きは見島あり。白浪を颯て來る汽船は、一道の黒烟を残して、淡靄の間に駛せ去りぬと思へば、鯖釣る數十の漁船は、白帆を揚げて、沖に飛び行きぬ。此の如き活畫圖に對しての酒宴、一般の風趣を増す。吾と弟とは、酒は好まざるが故に、握飯を出して食ふ。此日は、曇天ありしかば、暑さ堪ゆ難き憂あり、海面より吹き送る涼風に、酒宴は終日保たぬ。既にして、金鳥雨乞山頭に暮き、玉兔日本海上に浮び、上ること三竿、是に於て、家路に就きぬ。歸りて、燈下机に倚りて、此記を作る。今日の行、永く病床に沈淪し給ひし母を、慰むるを得たりと思へば、筆を採るに自ら勢あり。實に、是れ、八月二十九日にてありき。

新鶯を聽く

第一年級 口羽 素介

殘雪消れて燒痕新緑を生むるの頃、新鶯早く已に谷を出で、喬に遷り、人家の春夢尙は濃かあるの時、既に枕頭に來りて滑々たる玉音を弄するあり、起きて窓隙より覗へば、槎枒たる梅花の間を一上一下し、花は久潤を謝し、鳥は之に答ふるもの如し、其聲調の可憐にして至美至艶ある、聞くものをして耳清らかに心氣爽を覺ゆしむ、余乃ち窓を閉ち机に憑り、巻を開きて之に對すれば、其美艶の聲は、余が讀書の聲と相和して、其幽況佳狀、一幅春曉の活畫圖と云ふも不可なきが如し、亦我曹讀書の一樂あり、由りて文を記して夫の春眠曉を覺ゆる人に告ぐ、

政權變遷論

第五年級 梨羽 次郎熊

臨御四海。謂之天子。總裁万機。謂之大權。天子攬大權以臨四海。四海又安。域外來貢。故大權不可須臾離天子之身。天子棄大權。則爲負先王。臣下干大權。則爲負其君。罪不容於誅矣。昔者。天照太神勅皇孫曰。此豊葦原瑞穗國。朕子孫世々當王之地。汝其往而治之。言簡旨遠。神武創業垂統。列聖相承。未嘗委大權於臣下。是以。國威赫赫。外蕃朝貢。皆莫非大權在上之効也。降至。皇極。朝政陵夷。蘇我父子。乘豐專權。鎌足助。天智。誅蘇我。復大權。而其子孫遂躋植朝廷。牢不可拔。極榮弄權。恣廢立數世。九重尙窺其鼻息爲喜憂。又何遑顧政權之衰頹耶。馴致源平氏。大權歸武門。朝政愈衰。北條氏以陪隸竊大權。暴戾恣睢。僭越之極。至舉兵抗六師。分置父子三帝於窮裔之地。無所忌憚。所謂。天地否塞。日月晦蒙。所在皆爲鬼賊者。豈其不然哉。建武中興。百弊未革。而爲逆賊所覆。應仁之亂。京師蕩然爲曠野。宮垣荒廢。爲頑童遊戲之場。何其衰頹之甚也。及織豊二氏起。朝廷之嚴稍復舊。而大權卒不復。至德川氏。幕府勢強。

朝廷唯擁虛器耳。先帝深憂之。貽猷有臧。今上登極。首謁慕府。遂復千有餘年下移之大權。內革
 諸弊。外修鄰交。皇威赫然。餘烈之所及。朝鮮叩關。清國乞和。嗚呼何其盛耶。是固雖由。今上聖德能
 成斯無比之鴻業。然亦。列聖在天之靈。實保佑之也。噫。大權在上則治。大權移下則亂。後之爲政者。可
 不鑒耶。

雪に南明寺

第一年級 横見 莞爾

さのふよりふり積れる白妙の雪に、賤が伏屋も玉のうてあとわやしまれ、をちこちの野邊山邊も、みぢ白布
 もてつゝまれ、殊に南明寺の雪景色一きは目だちてめでたし、そもこの寺は、春は櫻に、夏は涼みに、秋は
 紅葉冬は雪見に、四季ともに景色にとみ、杖をひくものたぬすと聞く、けふはこの雪を幸に、わが校は南明
 寺に雪中行軍をあすべしと定められ、校長及び溝部先生にみちびかれ校門を出でぬ、いかめしさいらか、正
 しき壁瓦おどおらべし堀内も、榮華の夢と消ぬ、年ふるまゝに朽ち果て、壁瓦こぼれ落ちたる内に、黄色
 のだい／＼植つけあるおど、いと昔のしのばれてあはれにもかおしさ心地ぞしぬ、こゝを過ぎ、平安湖八
 丁も通りぬけ、橋本町にかゝる、常はいと賑ふ街あるに、けふは雪のふりし故にもやあらん、往きかふ人
 もすくぢし、いろは橋にかゝる、常に見かれし川景色も、今日は一しほの觀を添へ、河波の上にかもめども
 の遊ぶ様おど、眺めつゝ通り過ぐ、椿町の裏道を通り、沖原といふ所につく、かしの葉屋の垣の根に、白

梅の綻びそめて、人待顔あるもをかし、

ゆかしくも雪ふる中に咲さしかを賤が伏屋の軒の梅か枝

こゝを過くれば、南明寺は、まのあたりの山の腹に見ゆ、少しばかり行くに、名もしらぬ鳥のさへづる聲さ
 へ、我を呼ぶかと思はれて、いと嬉しく勇み立ち、少時行きて麓に達す、これより道は次第に狭く坂もあり、
 足の疲れし故にや、登るに心苦し、かくては果てじと、かたへの雪をふくみつゝ勇を鼓してひたのはりにのぼ
 りて、やう／＼南明寺堂塔のかたへに出でぬ、疲れも忘れて前の方を眺むれば、遙に指月山と相對し、中に
 阿武川の流わりて瑠璃の如く、川の間には萩町あり、商家の雪に日のあたりてさら／＼と光るおど、得も言はれ
 ぬ眺めにて、この身の塵世より仙境に入りたらん心地す、われに山陽の筆あらば、記して世の人に知らせん
 ものを、

見わかぬ景色も、事多き身の久しく留まるべくもあらず、江向製絲場の瀛笛は、松風と共にわれ等の歸路を
 促すが如し、六本杉に集るへしとの號令に、我先さにとはせ下る、われも後よりしづ／＼踏みしめ踏みし
 め、心してしたがひ行く、六本杉といへど、六本はあくて五本あり、五本杉と改名せまほしと覺ゆ、こゝに
 て隊伍を整へ、濁淵を経て椿町にかゝる、天神社あり、道眞の誠忠永く社前の梅と共にかんばし、こゝを通
 り過ぎ、橋本御許唐樋東田町を経て歸校しぬ、

活潑なる精神は健康なる身体に宿る

第一年級 和道實

精神と身体とは、雨々、相頼り相關して離るゝ可からざること、猶は車の兩輪、鳥の双翼に於けるが如く、孰れの一を缺ぐも則ち用を爲さず、精神は身体に非ず、身体亦た精神に非ず、然れども兩者相共に生じ相共に亡び、相共に樂み相共に憂ふ、未だ身体存して精神の亡び、精神存して身体の亡びし者を見ず、又未だ精神憂ひて身体の樂み、身体憂ひて精神の樂むことをさかず、故に精神と身体とは、二物にして同体、同体にして二物あり、故に活潑なる精神を具ふれば、自然に健康なる身体を持ち、健康なる身体を具ふれば、活潑なる精神は自ら之に生ず、故に活潑なる精神は健康なる身体に宿るの言、何ぞ其れ空言あらんや、枯槁憔悴の人は活潑なる精神を有するを得ず、活潑なるの精神を得る者、又豈に枯槁憔悴の人あらんや、然らば則ち活潑なるの精神を得ること如何せば乃ち可あるや、曰く、四時自然の時宜に由り、適宜なる運動を爲して身体の健康を求むる事是れなり、吾人進みて之を求めば、活潑なるの精神必ず之に具はるべく、吾人之れを廢せば、豈に活潑なる精神を養ふことを得んや、何が故に陰室に蟄居して精神を不快にするや、何が故に睡眠酒色を貪りて自ら精神を遲鈍にするや、時を勉して勉強し、時を勉して運動し、睡魔襲ひ來らば去りて柳陰深處に行け、不快起り來らば去りて杖を効外閑處に曳け、天真自から汝の身体を健康にし、汝の精神をして活潑に赴かしむるあり、

艱難の説

第一年級 阿武正一

艱難汝を玉にすとは西人の金言からずや、艱難は人世の幸福を全くする基礎にして、僥倖は窮乏を招く禍兆なり、然れども、人の僥倖を好み、艱難を惡むは、古今の通情あり、是れ人慾の自然に出づと雖も、未だ身の艱難を経ずして徒に僥倖を望むは、誤認の甚だしきことと云ふべし、而して艱難は直接に幸福を全くするものにあらざり、乃ち忍耐を以て之に處して、始て幸福を得るものあり、然らば則ち我曹學生たる者は能く此に注意して勉めざるべからず、艱難は一時の苦勞にして、後來の隆榮を招く基あれば、身の貧賤を以て勉勵を廢すべからず、玉の光輝を發せざるは一時の苦勞を怠りて琢磨の功を積まざるに由る、人も猶ほ斯の如し、古より英雄豪傑の微賤より起りて功を當時に立て名を無窮に垂れしもの、皆艱難を積み初めて其報を得しものあり、西哲曰く、艱難に遇はざるは人の不幸なりと、宜なる哉、世人多くは父祖の餘蔭に由りて、襁褓の内に入り富貴を受け、米麥の何物より生ずるかを知らざかくの如きものは、大にしては國を失ひ小にしては家を亡すに至るべし、嗚呼寒心せざるべけんや、

秋日面影山に遊ぶの記

第五年級 岡本精一

秋光既に老い、霜葉枝を謝し、烟霏の雲散し、宇宙豁然我が笑傲に供すべし、百年の内歡を吝す幾何ぞや、何ぞ必ずしも矮舎に蟄して、寂々楚囚の狀を學はんや、遂に二三の友人と面影山に遊ばんと約し、行く一里

許にして漸く山麓に達す、衆仰望躍然、意馳せ脚進む、山路羊腸、奇石怪巖、磊々として左右に屹立す、其の状恰も狂獅の如し、荆榛道を縫ひ、殆んど人頭より高し、乃ち兩手を以て之れを排し、身其の中を行く、昇るに數町にして少しく平坦の地あり、石に踞し小憩し、東望すれば阿武川は脚下にあり、前岸の村落倒まに影を緑波に浸し、流れんと欲して流れず、摩詰の筆雲林の畫と雖も恐くは斯奇を寫す能はず、勇を鼓して復た登る、愈々登れば愈々峻、後人は前人の履底を見、前人は後人の頭を見る、登ること數町にして、初めて頂に達す、行こと數歩にして高丘を得、萬樹鬱として四面を蔽ひ、寂として人跡をみ、唯た松風禽鳥と相答ふを聞くのみ、丘隅の一老松懸崖に架し、宛然人の眺望に供するが如し、衆喜ひ之れに踞し、各々帯ぶる處の行厨を開き勞を慰む、又遙に東北を望めば、數點の白帆空に入る者越ヶ濱浦とあす、東方屹として壯士の立てる如き者、唐陣山とあす、東南天を刺す如き者、日輪山とあす、南明寺其中腹にありて、燕の棟に巢せるか如し、南麓大照院を眺れば、棟宇參差、朱殿彫欄、歴歴指すべし、而して梵經の幽聲空に入りて微かに聞へ、尤も妙致あり、又瓦屋鱗次眼下に連かり、路人蟻の如き者は、萩の市街あり、茅屋三四林樹竹叢の間に隱見するものは、椿西の諸村あり、萩の七島は海中に浮ぶか如く、其の風致奇絶、殆んど名狀すべからず、眺望久ふして歩を南に轉玄、東に向ひて下る、忽ち見る一堆の繡雲半腹に横はるを、諦視すれば乃ち無數の楓樹霜に飽けるあり、衆急ぎ下る、二丁餘にして一の平地に達す、一林皆楓樹にして、千枝緒を發し、萬朶紅を騰け、春花の爛たるか如く、雙目爲めに奪はれ、衆覺へす掌を拍て歡呼す、已にして風林に起り、

紅葉紛々として流溪に落ち、聚て錦鱗とあり、散れて朱魚とあり、水色之れが爲に赭く、波光之れが爲に麗あり、降ること半町餘にして、一寺あり、之を御岳觀音寺と稱す、一拜して堂に憩ふ、是の日や天氣晴朗、海水湛然として波をく、山光杳然として眺望爲めに佳、是に於て目舒心暢、恍として華胥の國に遊ぶか如し、已にして晚鴉歸り鳴て、暮色蒼然たり、則ち愛を割て歸路に就く、路二條あり、余揚言して曰く、右せんと欲するものは右袒せよ、左せんと欲する者は左袒せよ、衆皆劉氏の爲めにす、遂に麓に下り各一蹶して別れ、各家に歸る、面影山の絶景、尙眼中にありて忘る能はず、是に於て筆を拈り大息して曰く、嗚呼今日の遊何が楽しく且身の勞するや、然れども斯の勞あらずんば何ぞ斯の樂あらんや、天下の事皆然り、獨り山水の勝のみに非らざるあり、其の勞する所以は、樂を得る所以あるを記し、以て苦學勵行の人に示す、未だ千金の子に語るべからざるあり、

運動の必要

第一年級 藤井 龜松

快を好み不快を惡むは人の常情あり、快とは何ぞ、身體の健康是れあり、他をし身體健康からざれば觀るも目に適せず、聞くも耳に適せず、食するも味を知らず、勉強せんと欲するも爲す能はず、智あるも活用する能はず、故に身體虛弱の不快不幸ある、身體強壯の至快至幸たる、敢て贅語を待たずして明白あり、誰か身體の無病健康あるを欲せざるものあらんや、先哲曰く、健康に比すべき富貴あしと、豈に其れ眞ならず

や、嗚呼、吾人能く身體の保護に注意せざるべからず、而してその之れを爲すや、尙ほ身體の衰微せざるに先ち、豫め之れが準備を爲さざるべからず、一旦衰弱を來すに及んで、回復せんと欲するも、復及ぶべからず、然れば之を如何にして可からんか、他をし、唯た身體の運動を勉むるにあるのみ、今や文運旺盛、幸ひに体操の一科を設け、以て學校の課程に編入せらる、嗚呼世の文明あるに順て吾人の受くる所の恩惠は偉かりと謂ふべし、然れども、余が觀察する所に依れば、我輩少年の内、運動を嫌厭して之を度外視するもの少からず、爲に身體の虚弱をきたし、遂に將來の目的を挫かんとするもの多し、豈に嘆すべきの至りからずや、

長州男子に責任

第一年級 田原 清記

我が長州の地勢たるや、三面海に臨み、一面石防二州に接し、國內到る處、地味肥沃にして五穀豊饒、寒暄時に順ふて宜しきを得、加ふるに山水秀靈、行く所皆佳景美風に富む、是を以てか古來英雄豪傑頻々乎として出づ、試みに見よ、王政維新の際に在りては、木戸公の如く、吉田先生の如く、又今日に在りては、伊藤山縣諸公の如く、一々枚擧に違わらず、然るに余輩は幸にも此の比類稀れある靈地に棲息するを得、從て又諸英傑の遺風を仰ぐことを得る以上は、須べからく之れが繼續者となり、又其の榮譽をして永遠に維持すべき最大なる任務を有す、而して余輩の斯くの如き重大なる責任を全ふするや否やは、一に余曹將來に於ける勉不勉如何にあるのみ、見よ、泰山の高きは初めより高きにあらず、河海の深きは初めより深きにあらず、

其高さ其深きは、皆勺水塊土の積んで然るのみ、故に泰山は土壤を譲らず、河海は細流を擇ばずと、夫れ余輩の長州男子として先輩者の遺風を繼續して他日大いに成す所あらんとするものは、必ず此の少年時代に於て是の格言に隨て勉強せざるべからず、古より英雄豪傑の偉功を奏せしも、蓋し其功は成るの日に成るにあらず、皆其少年の時よりして學事に黽勉し武事を練磨せるの幾多の艱難と、幾多の歲月の積み來りて、初めて其功を成せしものあり、然らずんば何くんぞ能く一朝一夕にして大業を成功することを得んや、若し然らずして大事業を成さんと企つるは、恰も土壤を集めずして泰山の高きを作り、細流を擇んで河海の大を成さんと欲するが如く、豈に能く其の志望を達することを得んや、是を以て我曹の如く重大なる責任を負へるものは、今より大いに艱難辛苦を嘗め、千挫不撓の精神を養成し、以て平素抱く處の志望を貫徹し、以て天下の耳目をして一驚を喫せしめざるべからず、之れ眞に余輩少年たるもの、常に覺悟すべき点からせや、又豈に我長州先輩諸公に對する義務責任にあらせや、

筆 說

第四年級 前 原 清

五寸一毛管耳、以て天下の治乱興廢を起すべく、以て一生の浮沈毀譽に關すべし、耶蘇教の勢力を破壊する者は、十萬の鉄騎に非らせして、達賓氏一篇の進化論にあり、佛國の革命を喚起したるは、急激党の壯士に非らずし、テルソーニ氏一篇の民約説にあり、或は文天祥正氣歌とありて鬼神を泣かしめ、胡澹庵の上疏と

ありて金人をして肝膽寒かしむ、王安石は新法を作りて神宗の寵を得、亦之れを以て一生の數奇を致し、駙
 賓王は檄文を作りて則天武氏を感じ、亦之れを以て賊名を千載に傳ふ、賴山陽は文藻を以て當時に冠たり、
 夫れ如斯者は何ぞや、一片の丹心時機に投するにある耳、苟も一片の丹心時機に投するなければ、琶を操て
 門に立つと一般のみ、是を以て魯褒神錢論を作るも東晋の士遂に驚醒せず、樂聲遠く歌して以て南宋の覆
 滅を救ふを得ず、或は吉田松陰海外論を編すも、幕府の士警戒せず、徒に鎖港を以て幕門に謳歌す、是丹心
 時機に投せるあり、然りと雖とも姦臣賊子を已往に載し、世教を維保し文明を翼賛するの効は、赫々得て蔽
 ふ可からず、昔者韓文公毛穎論を作る、而して世人知らざるもの、動もすれば説をあして曰ふ、大丈夫當に
 天下を馬蹄に蹂躪すべき耳、世に三尺の長劍あるを知らずして、氣を區々たる五寸の毛管に疲勞するは、丈
 夫兒のささる所と、嗚呼此輩は未だ嘗て五寸の毛管の恐るべきを知らざる也、我之れが爲めに辨すること
 如斯。

莊周夢化蝶圖

古森重韻

飛繞紅園又紫陌

春光如海芳菲積

只願三世長眠花

却笑九霄遠奮翮

百年隨分能自怡

人間何處不快適

開龍船發巴朗斯港圖

坤輿非方其形圓

如往而復理則然

東海有國事遙傳

櫻花春暖別爲賓

西海直前以縱船

東海可即到此間

歷說不行且蹣跚

白髮任他笑迎還

一朝得志試鵬搏

風濤萬里破冥烟

西陸遙闢半球天

功名永勒萬斯年

陳圖南圖

先生大笑笑不止

傍人驚怪皆凝視

何事大笑即如此

驢背終墮塵途裡

塵途不厭汚我裘

傳聞陳橋進冕旒

點檢踐位是真主

天下自此解民憂

誰貌先生極其肖

神彩照人筆入妙

想見世宗又太宗

致詔遠自華山召

黃白木無術可言

勤行修練在治民

至理大動君主聽

一語即見先生真

心胸絕無功名攪

德如先生古來少

百日眠熟塵氣消

宛如孤鶴翔雲表

百世之下仰高風

即是神仙即英雄

韓文公過藍關圖

匡時極弊太艱難

行路崎嶇風雪寒

八代狂瀾挽文運

一生正氣闢異端

孤窮憤似長沙鵬

貞操臭同楚國蘭

奕々潮陽祠廟在

精誠遺德至今看

退筆

毛族拔毫自絕群

期扶鴻業致殊勳

禹謨舜典都俞美

商頌周詩風雅文

湯沐恩深因罷職

管城封重却疎君

如今拓落誰相似

日暮霸陵故將軍

次橫地尙綱韻

欲遣幽懷自不禁

紛紛春思復相侵

梅花風笛夢魂斷

楊柳雨絲愁緒深

已會暮雲離岫意

且看倦鳥暮林心

酒醒日夕無聊甚 獨弄洋絃外音
漸惹興懷起 飄衰 質僻雙青唯柳眼
性靈共白獨梅姿 啼鶯喚友何其切 舞蝶狂花未必痴
日看風物向榮滋 賞春之酒賞春詩

春山如笑

十二鬢鬟隔水涯 翠光相映透窓紗 霞裳影齊三竿日 眉黛香蒸萬朶花
脉々心情風外動 怡々容態雨餘加
欄干憑盡看無厭 三月江南惜日斜

瓶梅始開 以天地心為韻

偏喜陽春信早傳 膽瓶花發暗燈前 清高憶起曾尋夜 雪滿山中月滿天
枝宜一二花三四 却怕紛華汚趣致 終日幽窓獨對君 相看欲到忘形地
梅花以外絕知音 凜冽冰霜歲月侵 疎影暗香荒屋下 百年妙契歲寒心

春夢

柳暗花明廿四橋 衣香扇影木蘭燒 寒透春衣夢空覺 暮雨蕭々魂欲消

宿友人山房

青山訪吟明 日暮遂留宿 宅幽樹木深 勢阻崖岸蹙 山氣冷逼衣 過雲白埋屋 林泉時隱見 畫圖展半幅
吟骨清欲仙 夜坐風趣足 疎窓活火然 石鼎芳茶熟 山月舉餘輝 澗花送臘馥

春雨

微雨灑虛檐 蕭條侵夜坐 博山蕪古香 鼻々篆烟惹 烏机繙簡編 孤影伴燈火 佳人真薄命 才子多聰軻
古今一邱貉 世事塞翁馬 閒適如飴甘 高臥勝藥裹 好避塵俗人 獨樂風月我 抱膝但長嘯 高歌誰和者
窓外更已深 雨勢急如瀉 琴筑幽韻揚 點滴聽愈可 前山月色低 庭樹雲影鎖 潤透雨催花 暖動風吹朶
偏喜春將徧 行樂及芳野

殘月

蒼茫分曉色 光淡野烟昏 臨水纔留影 映花漸沒痕 歸漁歌出浦 征客語過村 垂老眠醒早 餘輝獨倚門

春為隣

古森重馥

隣より梅のかをりの中垣をこゆるや春のけはいあるらん
雪中旅行

宿るへき里やはいつこ深山路にまたふりしきるゆふ暮の雪
人家皆梅

咲とさく花のさかりは誰やとも梅か香をらぬはる風もをし
門柳占春

立よりてわか友とちの門とへは柳のいとそ春をそめける

野遊

摘とりてかにと書かましくつくつくし筆にも餘る野邊のけしさを

庵春雨

音さへも忍ふ軒にはる雨のさひしさ添ふる草の庵かき

雲

心さき雲にしおれと夕暮は峰のやとりにかへるてふものを

雜報

○開校式と落成式 明治三十二年九月本校は獨立して山口縣萩中學校と改稱せられ、十月十八日午前八時開校式を舉行せり。古澤知事これに臨み、其他の來賓は朝野の名士無慮百五十名。式は、勅語、校長演説、本校職員總代祝詞、知事其他來賓祝詞、生徒祝詞等を以て終り。次て來賓及び生徒に茶菓の饗應あり。萩町よりは生徒一同へ紅白の餅を寄贈せり。同日午前十一時よりは萩町にて本校落成式を舉行せり。蓋し本校の地所及建物は共に萩町の獻納に係り、

本校はこれによりて初めて獨立するに至りたるものあればあり。式終りて校内運動場に於て立食の饗應ありたり。午後一時よりは公衆に校内縦覽を許せしが、縦覽者の數約壹万人以上に達せり。又當日は晝夜烟火を打上げ、屋臺を牽き、にはかを催すなど、萩町は殆ど狂するばかりありき。

當日祝詞を讀みし人々は左の如し、

本縣知事

古澤 滋

萩中學校職員總代
阿武郡長
豊浦郡長
山口中學校長
岩國分校主事
阿武郡各町村長總代
萩中學校生徒總代
當日祝電を發せし人々左の如し、
歩兵第四十二聯隊長
縣會議員
山口縣視學
山口高等學校長

教諭 渡邊 盈作
大田 瀧熊
長野 範亮
桑原 護一
福泉 雅一
谷村 猪助
梨羽次郎熊

渡邊 章
美禰 龍彦
一宮育太郎
河内 信朝
子爵 吉川 經健
男爵 吉川 重吉
私立防長教育會
横山 達三

當日樹木を寄附せしは左の如し、
椿郷西分村字椿町
萩町河添村
全平安古町

青桐 壹本
山茶花 壹本
柳 壹本

○前師を想ふ 本學年に入りてより新たに本校に來り教鞭を取らる、諸先生は別表の通るが、また本校を去られたる諸先生も尠からず。前には渡邊、土屋、岩田の兩教諭あり、後には杉山教諭三原助教諭心得あり。其他牧助教諭徳本助教諭心得の二先生の休職とあられたるもあり。余輩は吾學力の淺薄あるを思ふ毎に、意志の軟弱あるを省る度に、此等諸先生が淳々余輩を訓誡せられたる鴻恩に對し感謝の念の生ずるを禁ずると能はず。余輩は諸先生在校年月の長短を問はず、余輩は年月によりて教育せられざればあり。余輩は諸先生在校中の資格を問はず、余輩は資格によりて感化せられざればあり。余輩不肖といへども一片吾師に對する敬愛の念を闕かず、豈此等諸先生か吾輩に示されたる亞親の誠情を忘れんや、豈この誠情に酬ゆるを知らざらんや。借問す余輩と恣を同うする兄弟よ、諸君は如何にして吾等感謝の意を實現せしめんとするか。

○運動會 竹の園生と共に萬山の樹々に若葉生ひ繁れる五月の半頃(明治三十三年) 東宮殿下御結婚式の翌日を卜して陸上運動會は催されたり。學校の門

前にはアイチいかめしく打建てられ、周囲二百メートルばかりある大坪は運動場の中央に二重に結び繞らされ、その正面には來賓、左方及右方には本校生徒、後方には明倫椿東椿西の小學校生徒何れも列を正して取り圍める、さすがに蟻の匍ひ出でん餘地も見えず。坪の所々には障害物据置おくべき準備を取りしつらへ、中央にはボールド、テールなどありて、場の内外へと馳せちかふ委員の腕にはそれの徽章を懸けたる頗る得意顔あり。午前八時四十分競技は早駆(一周)を以て始まりぬ。ベルは幾回となく振られ、競技者は其度毎に左方の陣よりぞ顯はれぬ。赤帽白帽は聲の裏に走り、人は走るものを追ふて叫べり。息もつきあへず拍手に迎へられて賞品おし戴きてまかるもの、作法正しきはことに雄々し。この隅にては烟火打上げられぬ、かしの屋根よりは寫眞取るめり。様々の事ありて正午の休憩も過ぎたるとき、校長は場の中央なる机の上に立ち上り、いと嚴肅に一場の演説を試みられたり。次て競技は再び始められしが、日の餘りに照りければ、夏もまだ初あるに握りし汗のみからで、鉢も濡ふばかりありし。

りし。かくて午後五時十分となりて遊は果てぬ。残れるは只、皇室萬歳の餘響のみありき。此日の目立ちて面白かりし競技に勝を占めし人々の名を殊に出づれば、

- 早駆(一周)に
 一等 上田 二十九秒 二等 厚東(洋) 三等 竹内
 一等 岡本(精) 二十九秒 二等 渡邊 三等 山本
 早駆(三周)に
 一等 高橋(由) 一分四十五秒 二等 佐藤 三等 山田
 二人三脚に
 一等 中村(芳) 二等 永田 三等 山根
 (林)(章) (栗屋)(春)
 計算競走に
 一等 大田(明) 二等 白根
 特別障害物競走に
 一等 中村(章) 二分 二等 岩竹 三等 青水
 早駆(四周)に
 一等 高橋(由) 二分 二等 中島 三等 白石
 來賓競走に
 一等 小池俊彦(山口中學卒業生)

二等 田中健介(鴻城義塾)

出 三等 梅津 誠(山口中學卒業生)

職員杓子競争に

一等 能勢先生 二等 山本先生 三等 雨谷先生
 あり。其他特に記すべきは、當日來校したる明倫椿東椿西三小學校生徒の競争ありき。各學よりはいつも強壯ある少年を撰ひて早駆一周の競走をさせしが、尋常は明倫勝を占め、高等は椿東月桂冠を奪ひぬ、今左に此等勇しき少年の名を紹介すべし。

尋常小學生徒競走

- 一等 宇野四郎(明) 三十秒 二等 田中龜太郎(明)
 三等 秋枝松藏(倫)

高等小學生徒競走

- 一等 植村正助(椿) 三十秒 二等 並川宗一(明)
 三等 藤井純介(西) 椿

右一等勝者中、尋常生には白地に赤の校紋、高等生には白地に黒の校紋を染振きたる旗各一旗を與へて次回の運動會まで其保管を托したれば、本年は必ずこれにつきて激しき競争を見るあるべし。

○羽賀臺一日行軍 文明は處女の假面を被りて世界の國民を籠絡し、弱者は往々彼女が貪慾の犠牲となりて斃れぬ。しかも倦くことを知らざる彼女は漸く其毒爪を我隣國に逞ふせんとするに至る、彼女の真相を知るもの誰か寒心せざらむ。嗚呼、今日は文明に酔ふの時にあらざるあり、太平に安するの時にあらざるあり。士氣の振作せざるべからざる豈今日より急なるものあらむや。されば我校昨年六月廿五日を以て軍隊編成を行ふや、全月三十日校を擧つて終日武を羽賀臺に閱せり。今其狀況を略記せんに、全日午前六時半一同校庭に集合し、七時部伍肅々として校門を出て、松本村福川村を経て目的地に向て進軍せり。此日恰も校長不在中ありしかは、小田教諭代て統監とあり、能勢教諭は全軍を指揮し、中隊長以下の役員は五年生及び四年生の或者を以てこれに充つ。午前十時全軍羽賀臺に着す。臺の廣袤約一里四方、隴畑稍々開けたりといへども、夏草その大半を被ひ、彼方に丘陵の起伏するあれば此方に松林の斷續するあり、實に天然の好練武場あり。思ふ昔、徳川の流漸く微からんとし、士氣は弓弦と

共に弛び、士風は刀劍と共に銷腐せんとするの時に當り、猛然心を士氣の振作と武備の擴張とに盡碎し、終に幕府の忌憚する所とありて敢て顧みざりしものは、實に我毛利敬親公及び其臣村田清風翁に非ざや。而して天保十四年四月朔日關藩の士を驅て大に武を闘せしは實に此地に於てせり。我藩維新の際英勇豪傑雲の如く起るもの、又實に公と翁との經倫に基せりといふ。公翁既に没して茲に六十年、余等復來りて武を此地に鍊らむとす、豈多少の感慨をくして可からむや。

眈を決して北方を臨めは、白波空をひたして直に露韓に連り、四五の嶋嶼は孫兒の如く海中に点布し、見嶋また呼應の内に在り。嗚呼此景に對するもの豈また多少の感慨をくして可からむや。

此日午後軍を分つて二隊と爲し、兩々相別れて擬戰を試む、驅逐奔突或は格闘するものあるに至る、快此に至りて極れり。午後三時軍を收め、下て海岸に出で、大井、小畑等の諸村を經過し、再び松本村に出で、校に還りしは午後五時ありき。此行費す所僅かに一日、然れどもその得る所のもの

蓋し少々あらざるあり。由てこれを略記すと云爾。
○關西教育會への出品 關西教育大會の富山市に開かれ本校生徒の作品を同教育品展覽會に出品すべきことを勸誘し來るや、本校よりは和作文、英語作文、習字、圖書の秀逸なるものを選びてこれに應せりといふ。此撰に當りたるものは實に非常なる名譽といはざるべからず。今その人々の名を知り得たれば左にこれを録す。

和作文

- 五、河野厚造(校風振起策)
- 五、横田直藏(全 上)
- 四、石津御楯(吉田松陰)
- 四、河野通毅(運動會の概況)
- 四、林 新作(富國強兵)
- 三、兒玉民也(修學の目的)
- 三、神野延一(全 上)
- 三、曾野昌一(全 上)
- 三、木村精男(全 上)
- 二、木津谷泰夫(週間日記)
- 英作文
- 五、阿武信一(The Shokasojiku)

五、厚東太郎(My Friend)

圖畫

- 一、林 香(秋海棠) 一、中村助順(茄子)
 - 一、内山修一郎(鯉) 一、河野利長(竹)
 - 一、堀 兼治(草、蜻蛉) 一、岡本 正(牡丹)
 - 一、藤津亮然(秋花) 二、笹原武一(鳥)
 - 二、小池武彦(枇杷) 二、中村正一(鶏)
 - 二、坂 高麗(太閤) 二、野村藤助(木蓮)
 - 二、笹井奉治(花) 二、根來行藏(桑)
 - 三、岡川正治(梅實) 三、阿部昌介(達磨)
 - 三、兒玉省三(草花) 三、荒地政作(鶴、小松)
 - 三、阪本治郎(那須與一) 三、笹原孝一(魚)
 - 三、稻田茂太(雉子) 三、新庄順一(虎)
- 書
- 一、堀 兼治 一、田原 清記
 - 一、梅木 省三 一、竹内 宗輔
 - 二、矢田部靜索 二、中村 正一
 - 二、坪井 正次 二、和田 正敏
 - 二、木津谷泰夫 二、百井 盛次

- 三、波根 義三 三、松本 民介
 - 三、坂本 治郎 三、紀藤 庄助
 - 三、大田 明治 三、吉田 光胤
- 開校紀念日 我校獨立してより茲に一星霜を經過し、明治三十三年十月十八日は恰もその開校紀念日に相當す。由て同日課業を休み、午前八時半講堂に於て祝賀式を舉行せり。植木萩町長を初として來賓六十餘名をた式に列す。校長の 勅語奉讀及び演説に次て植木町長の來賓總代祝辭朗讀ありて式を終り、九時半より柔道及び擊劍の仕合を催せり。

柔道三本勝負

- (兒玉 民也(三、一)) ○(桐山 孫一(二、一))
- (品川 庸平(二、三)) ○(佐々木嘉春(一、一))
- (齊藤 紫朗(一、一)) ○(中村文治郎(三、一))
- (内山脩一郎(一、一)) ○(藤井 清(五))
- (吉田 實(二、二)) ○(岡本 精一(五))
- (篠原 滿(四、二)) ○(高橋 由之(五))
- (中村 正一(二、三)) ○(伊藤 治郎(五))
- (上田米太郎(三、二)) ○(白石 嘉次(三、二))

擊劍三本勝負

- 田中 勇亮(三、二) (吉田 實(二、二))
- 齋藤 紫朗(一、一) (佐々木嘉春(一、一))
- 長嶺 治平(一、一) (坂本 治郎(三、二))
- 石津 小平(一、一) (吉岡 昌三(四、二))
- 内山脩一郎(一、一) (横見 莞爾(一、一))
- 田中 吾一(二、三) (藤井 清(五))
- 品川 庸平(二、三) (岡本 精一(五))
- 落合 兼文(二、二) (光藤 健介(五))
- 植木 秀(二、二)
- 有田 貞信(二、三)
- 來賓擊劍三本勝負
 - 光成 恒海(嚶鳴舍) (倉田 宗一(嚶鳴舍))
 - 青水 信一(警察) (伊藤 治郎(五年生))
 - 田中大五郎(嚶鳴舍) (有井宗太郎(嚶鳴舍))
 - 久保田八郎(警察) (岡本 精一(五年生))
 - 善積 七郎(嚶鳴舍)
 - 高橋 由之(五年生)

午後二時よりはベースボール競技に移る。

U.F. L.F. R.F. 3.B. 2.B. SS. 1.B. C. P.	赤組(三十三、勝)
	白石 嘉次(三)
	大賀 幾太(一)
	神野 延一(三)
	岡村 喜與(五)
	松本 淳(三)
	河村 米助(一)
	兒玉 民也(三)
	高橋 信一(一)
	長嶺 治平(一)
Man. Ump. L. 能勢 理事	中村 章一
	山本 政人
C.F. L.F. R.F. 3.B. 2.B. S.S. 1.B. C. P.	白組(十八、敗)
	中村 芳樹(二)
	上田米太郎(三)
	横見 莞爾(一)
	藤井 清(五)
	藤井 勉(四)
	村上 欣一(一)
	大田 明治(三)
	田中 吾一(一)
	中村 三郎(一)

仕合時間、午後一時四十八分—四時〇分
右競技終るや綱引をかし、夜に入りては職員生徒相

合して提灯行列を催し、四百の燈火は隊をちして萩町を狂奔せり、其全く散解せしは午後八時ありき。當日生徒中樹木を學校に寄附せられたる諸君ありたれど。其數おさりに多くして記すべき餘白あきを以てこれを省く。

○英語談話會 英語の必要は今更説くに及はず。只これを研究する方法に至りては諸人の頭を悩ますところあり。殊に會話は彼此の思想を交換する手段ありは、これをよくせずば如何に書を読むこと多くとも闕くる所なしといふべからむ。而してこれに熟達するは、所詮多く聞き多く言ふべき機会を求むるに外なしといへども、學校の課業のみにては頗る此点に遺憾なき能はず。然るに我校英語科の諸先生は夙に茲に見るあり、新たる英語談話會あるものを組織し、學生中の篤志者またこれに加はり、毎週金曜日には此會を開きて總て英語を以て互に事由會話をあし、又は演説等を練習することゝあれり。その斯學に裨益する所多き、固より疑を容れざるあり。此會の例會は既に三回まで開かれ、その第二回の如きは、恰も古澤知事の滞萩中ありしが、これを聞きて大に

其學を美ありとし、親らこれに臨みて半日を此處に費されたり。本會は未だ創造の際かれは不完全の点多きを免れずといへども、興味は一回一回に増しつゝあるは確あり。余輩は我同志諸君の競ふて斯る有益ある會に入りて斯業の爲に勉められんことを望みて止まざるあり。

- 右例會に於ける辯士の名を聽き得たれば左に録す。
- 第一回
- 高野先生 (開會の詞)
 - 雨谷先生 (英語の研究に就て)
 - 小田先生 (ケイデー氏英語教育に關する議論を評す)
 - 高野先生 (レシテーション)
 - 頓野先生 (勉強に於ける獨立の精神)
 - 中村先生 (アンエクトド)
 - 厚東太郎(五) (レシテーション)
- 第二回
- 小田先生 (第十九世紀の孔子教)
 - 高野先生 (勉強と怠惰)
 - 中村先生 (レシテーション)

- 香原 祐江(五) (レシテーション)
- 山本 政人(五) (レシテーション)
- 上原 多一(四) (全) 上)
- 和田 準介(四) (全) 上)
- 佐伯 益豊(四) (全) 上)
- 石津 御楯(四) (全) 上)
- 井關 余一(四) (全) 上)
- 渡邊 儀賢(三) (全) 上)
- 厚東 健郎(二) (全) 上)
- 佐田 健(二) (全) 上)
- 寺西啓太郎(二) (全) 上)

第三回

- 雨谷先生 (米國獨立宣言)
- 高野先生 (磯部四郎君洋行失敗談)
- 頓野先生 (ドント、ギブ、ツーマッチ、フオール、ゼ、ワキツスル)
- 中村先生 (リヤル、ベチフイット)
- 佐伯益豊(四) (レシテーション)
- 原 宇一(四) (全) 上)
- 林 壽香(三) (全) 上)

兼常清佐(三) (全) 上)

中井孝熊(二) (リーディング)

榎本郁輔(二) (レシテーション)

○阿武郡立萩圖書館 編輯子嘗てこれを或米國人に聞くに、彼國に於ては小學校より中學校に至るまでは総て無月謝にして、地方到る處には圖書館の設ありて、商家の手代、鍛冶屋の小僧にも容易に貸與し、以て普通教育の普及を計りつゝありと。又獨逸國の目ぼしき市町には必ず古文書館の設あるか如きも、學術研究の便を考へしあり。余輩はこれを聞きて、歐州文明か其根底にまでも及びつゝあるの偶然にあらざるを悟れり。高等教育は兎も角、普通教育を可成國民の最下層まで徧布せしむるは我國今日の急務と云はざるべからず。先年文部省の定めたる小學校無月謝制度は、未だ充分實施せらるゝに至らずといへとも、余輩は我國教育の漸くこの氣運に向ひたるを喜ぶものあり。圖書館制度に至りては、學者學生の藪淵たる帝國の首府に於てすら甚だ不完全なるの今日、我山口縣は天下に率先して地方圖書館の必要を認め、山口に縣立圖書館を設け、萩に郡立圖書

館を補助するに至りたるは、確かに天下の先覺者たる舉動と謂つべし。就中阿武郡立萩圖書館か我國郡立圖書館の嚆矢たる名譽を負ふは、以て大に天下に誇稱するに足る。従うてこれか經營に與て力ありし同郡人士の功やまた大かりといふべし。何分人智の進まざる今日あれば、此圖書館か當地方の手代小僧等によりてまで利用せらるゝや否やは別問題として、此館か我萩中學校生徒に直接若くは間接に及ぼすところの利益は、實に計り知るべからざるものあり。余輩は嘗に天下の爲に此館の設立を喜ぶのみにあらざるなり。此館は我萩域内にありて地を占むると壹百四十六坪六合四勺、書を藏すること一萬一千〇六十三冊。圖書館建築費五千六十五圓九十二錢九厘は瀧口吉良菊屋剛十郎西村禮作岡十郎四氏の寄附に係り、書籍は凡そ十ヶ年を期し漸次五萬冊を備ふる見込にて本縣會は三千圓を、阿武郡會は五千圓を本年及來年度に於て支出するに決せりと聞く。館長には去一月十五日雨谷校長これに任せられ、全月三十日開館式を舉行せり。

○安藤先生 同先生は昨年十一月執行の文部省國語

科教員檢定豫備試験に應じて首尾よく通過せられしが、本年二月東京に出張せられ、全本試験にも目出度及第せられたり。可賀々々。

○二校生の名譽 第一年一組長嶺治平君の家は萩町米屋町にありて米屋を業とす。君學校課業の餘暇は常に家業を助け、或は俵を負ひ或は車を挽き、未だ嘗て一日もこれを廢せず、而して學力また優等あり。第三年級二組大田明治君は阿武郡吉部村の人、學力特に秀俊にして第二學期試業には平均得點十點を得られたり。古澤知事の本校を參觀せられたる時、知事は特に二君を召してこれを賞し、かは將來ますます奮勵すべきことを戒められたりと。古澤知事の教育に熱心ある洵に多とすべし、二君の名譽豈二君の名譽たるのみにして已むや。余輩は茲にこれを特筆大書せざるを得ず。

○保證人談話會 縣下諸中學校の状況につき見聞する所によりて察するに、學校と家庭の連絡の密なるは、我萩中學の特色の一あるか如し。學校にては凡そ毎學期に一毎生徒の保證人を會して、學校の模様を報告し、生徒家庭の様子を知るに勉め、前學年よ

り既に三回の會合ありたりと。吾等に取りて誠に喜ぶべき事にこそ。

○二月四日の雪合戦 満目皎々溝渠を別たす、萩はさかから白聖城の如し。只見る一隊の黒軍は肅々として南妙寺坂を攀登せり。これかむ指月山下に事あれがしと待ちに待ちたる四百の健兒か雪に乗して其銳氣を養はんとての遊事とは知られたり。彼等は坂を上りつめしよと見る間に、早や先頭は下りて五本杉のあたりへと向へり。彼等は何事をか爲すか如く爲さざるか如く、靜に白き萩町を縦貫して再び校庭に入れり、開ゆるは只雪のギュー〜と踏占めらるゝ音のみあり。果然彼等は分れたり、東西の二手に。忽にして二手は合せり、庭の中央に。玉は飛べり、壁は碎けり、敵は組めり、味方は叫べり。

號令は傳はりぬ、戦は止みぬ、彼等は雪を噛みて汗を拭へり。嗚呼血氣勝る彼等、彼等は實に冬を知らざるをらむ。

○仙崎村民の義侠と我校友生の沈勇 人の心はかゝる時にこそ見るべけれ。去年十月我校友一年生の修學旅

行して仙崎村に至り海上轉覆の難に遭ひける時、村民は非常なる義侠心を顯はして彼等を救ひ、又親切ある手當を爲して彼等を勞はり、頼て以て一人の溺死者なきのみならず、一人の病者若くは負傷者を出すことかくして無事に旅行を終へることを得たり。此時村民は或は二人或は三人と校生を携へて我家に行き或は湯を浴せしめ、或は衣服を着せ、親切に至る所あかりしと、余輩は大に仙崎村民の舉を多とすものあり。又聞く所によれば、船の將に沈没せんとする刹那、校生は或は「まだ定遠は沈まずや」との軍歌を止めず、教官の號令と共に一切に海中に飛込みたりと、校生の落付きたる舉動はまた大に稱すべし。これらは何れも皆平常の心懸にこそよるものあれ。

○我校友生の美舉 吉事相喜ふは朋友の信あり、凶事相憂ふるは朋友の義あり。去る二月三日夜、我同窓ある桑原市松(三二)、田邊準(二二)、村井俊二(二一)、一(の三)君不幸にも祝融氏の襲ふ所とあるや、事頗る不意に出てたればこれを救助するに術あかりしか、其後本校の諸先生及び同窓一同は深く三君の不幸に

同情を表し、十一圓六十四錢八厘を贈金して三君に見舞として分呈せり。殊に三年生よりは別に洋服一領(ゲートル一着を桑原君に贈れりといふ)。

○ボート購入 我校友會ボート部に於ては、今回瀧野少將と高須謙造氏との週旋を以て、ボート一艘(附属品共)を吳軍港より購入することを得、現品は既に運送の途中にありて、その本校に到着するは、まさに春風阿武河面を撫するの頃あるべしと、この項を讀むもの誰か双腕の鳴るを覺むざらむ。

○外國人招聘 既に前項に記する如く、英語の練習は可成多く聞き多く話す機會を求むるにありといへども、直接英國人と交はるは、日本人同士の間にて於てするよりは著しき利益あることはいふまでもなし。聞く本縣下五中學の内、岩國、山口、豊浦の三校には既に外國人を僱聘して教授に従事せしめつゝありと。然るに昨年末の縣會は、縣下各中學共同様に外國人

本會會錄事

本會記事

編者記

本會誌事

校友會雜誌

第一卷

一一三

を僱入るゝとを議決したれば。本校にも來學年よりは外國人の來るべき豫定ありと。果してその曉に至らば英語科の教授上に一大進歩を爲すのみならず、英語談話會は益々其効果を収むるに至るべければ、余輩は實に踴躍に堪むざるあり。

○補習科設置 昨年末の本縣會に於ては來學年より縣下五中學何れも補習科を設け、中學五年級を修了せし生徒に或必要ある學科を教授することを決議せり。余輩は一日も早く公然文部省の認可を得て其實施に至らむことを切望するものあり。

○第二種講習科設置 明治三十三年十二月一日制定したる山口縣師範學校講習科規則により、小學校准教員を養成すべき、第二種講習科は本年一月より萩町に開設せられしが、新樂金橋氏專務教員として來任し、其他本校よりも能勢、持田、中村、濱中の四先生或學科を受持たるゝといふ。

本校が私立萩學校と稱せられたる時代に學術攻究會及び運動會の設ありたりしか、其後山口縣尋常中學

校分校とありて、學術攻究會は中絶し、擊劍、ベースボール、フットボール、ボートの諸部ありて、岩田、杉山、牧等の諸先生これを監督せられしも、未だ大に振ふに至らざりき。明治三十二年九月雨谷校長の本校に來任せらるゝに及び、新たに萩中學校々友會を組織し、分つて擊劍柔道部、フットボール、ベースボール部、ボート水泳部、文藝部の四部とあし次て明治三十三年四月二十一日これか發會式を舉行し、各部に部長及び委員を置き、始めて今日の隆盛を見るに至りたり。故に本會の創立日をは淺しと雖も、擊劍柔道部には青木恭太郎先生玉木保直先生の兩専門家の訓練せらるゝあり、フットボール、ベースボール部には杉山教諭、ボート部には前に岩田教諭後に塚本教諭、文藝部には小田教諭の熱心事に當らるゝありて、四部譽を並へて發達し、現今に於て既に各種の技術に稍堪能の部員を見るに至れり。本會の將來に向て希望劃策する所の事、固より一にして足らざらざらへども、先づ本會か比較的短日月に於てあし得たる好成绩を以て満足せざるを得ず。今各部詳細の記事を掲載するに先ち、左に現任役員の名

名を録す。

- 會長 雨谷善太郎
- 理事 能勢 賴俊
- 擊劍柔道部長 青木恭太郎
- フットボール、ベースボール部長 能勢 賴俊
- ボート水泳部長 塚本又三郎
- 文藝部長 小田 省吾
- 會長 雨谷善太郎
- 理事 能勢 賴俊
- 柔道擊劍部長 青木恭太郎
- 全委員(柔道)
 - 五、佐藤 虎助 四、二、境 半三
 - 三、一、中村文二郎 二、一、日比 豊
 - 二、二、松尾傳三郎
- 全委員(擊劍)
 - 五、高橋 由之 四、一、波多野百三
 - 三、二、末永 隆一 二、三、岩竹 治宗
 - 一、一、佐々木嘉春
- フットボール、ベースボール部長 能勢 賴俊
- 全委員(フットボール)

- 五、梓築 市介 五、河野 厚造
- 五、田中 三造 四、一、原 宇一
- 四、二、境 半三 四、二、渡邊 五六
- 全委員(ベースボール)
 - 五、佐藤 虎介 五、中村 章一
 - 五、齊藤 良亮 四、二、吉岡 昌三
 - 四、一、原 宇一 四、一、林 新作

- 全委員(フットボール、ベースボール)
 - 三、一、藤井 長藏 三、二、阪本 治郎
 - 二、一、濱野 文吉 二、二、岡野 清
 - 二、三、岩竹 治宗 一、一、高橋 平一
 - 一、二、日名内善次
- ボート水泳部長 塚本又三郎

- 全委員
 - 五、坂上 五一 五、齊藤 良輔
 - 四、二、口羽 雅介 四、二、境 半三
 - 四、二、吉岡 昌三 中村 正一
- 文藝部長 小田 省吾
- 全委員
 - 五、河野 厚造 五、宮川 鐵造

○柔道擊劍部記事

我部は本會の設立に後るゝこと昔年、明治三十三年六月一日を以て開く。蓋し道場の建築手間取りしを以てあり。爾後未だ二歳を経過せざ、しかも部員の數、柔道に百五十名、擊劍に百二十名の多きに達し、日々場の上るもの無慮六十名の平均數を算す。擊劍部にありては玉木保直先生最初より訓練の任に當られ、柔道部にありては初の數ヶ月間、小田教諭繁劇ある校務あるに拘らず、親ら奮つて部員を教導せられしか、其後九月青木恭太郎先生の本校に來任せられてより以來、専ら力を茲に盡され、講道館柔道はまた葦地に拓植せらるゝに至れり。加之雨谷校長山本先生の擊劍に於ける、岩田、中村、門司諸先生の柔道に於ける、校務の餘暇には必ず來つて其技を試らる。是に於て部員は一層の奮勵をあし、其技術をた

頗る上達せり。十月十八日本校紀念日を以て第一回勝負を舉行す、その成績は別項雜報欄内に記する處の如し。

そも、技術の進歩は勝負にあり、風雪に鍛へ熱雨に鍊り、一朝敵を擇ひて其技を角す、是に於て彼を知り已を知り始めて大に自覺す。技術の進歩は正に此時にあるあり。されは本部は成べく勝負の回数を多からしむる目的を以て、十月二十二日、柔道紅白勝負を毎月第一土曜日に、擊劔紅白勝負を第三土曜日に舉行するに定め、爾後數回の勝負を重ねたれども、今一々これを記載すべき餘白あきを以て、左に本學年間に進級せられたる部員諸君の姓名を記するに止む。

明治三十三年十月二十五日進級

柔道

- 四級 伊藤 治郎(五)
- 齊藤 良輔(五)
- 佐藤 虎介(五)
- 柏村 博(五)
- 四級 佐藤 虎介(五)
- 高橋 由之(五)
- 吉岡 昌三(四)
- 岡本 精一(五)

擊劔

- 四級 藤井 清(五)
- 桐山 孫一(二)
- 篠原 滿(四)
- 曾野 博篤(二)
- 兒玉 民也(三)
- 松尾傳三郎(二)
- 奧田 又助(二)
- 吉田 實(二)
- 藤津 亮然(一)
- 佐々木嘉春(一)
- 稽 古 始

明治三十四年二月二十日進級

柔道

擊劔

- 都野 正一(五)
- 白石 嘉次(三)
- 上田米太郎(三)
- 中村 正一(二)
- 八木谷梅吉(四)
- 伊藤 治郎(五)
- 光藤 健介(五)
- 四級 藤井 清(五)
- 桐山 孫一(二)
- 篠原 滿(四)
- 曾野 博篤(二)
- 兒玉 民也(三)
- 松尾傳三郎(二)
- 奧田 又助(二)
- 吉田 實(二)
- 藤津 亮然(一)
- 佐々木嘉春(一)
- 稽 古 始
- 四級 内山修一郎(一)
- 横見 莞爾(一)
- 中村 久平(三)
- 伊藤 重郎(四)
- 末永 隆一(三)

明治三十四年一月廿三日午後一時、本部稽古始式を舉行す。先づ雨谷會長より部員一同に向つて仕合に

關しての演説あり、終て勝負を開始す。部員は既に四五回の勝負に馴れ、本日の如き殊に見るべきもの多かりき。勝者は何れも賞品を授與せられしか、就中柔道に於て藤井清、内山脩一郎の兩君、擊劔に於て八木谷梅吉君は確かに技倆に一段の進歩を示されたり。當日の勝敗は左表の如し。

柔道三本勝負

- 三好 謙一(一、二)
- 柳田昇二郎(一、二)
- 内山脩一郎(一、二)
- 小川 毅(一、二)
- 齊藤 紫朗(一、二)
- 林 香(一、二)
- 1. 中村 正一(二、三)
- 兒玉 民也(三、一)
- 2. 藤津 亮然(一、一)
- 曾野 博篤(二、二)
- 高橋 信一(一、二)
- 長嶺 治平(一、二)
- 河村 米介(一、二)
- 竹重 信三(二、二)
- 一井 謙明(一、二)
- 田中 吾一(二、三)
- 吉田 實(二、二)
- 佐々木嘉春(一、一)
- 藤井 清(五)
- 奧田 又助(二、一)

擊劔三本勝負

- 齊藤 紫郎(一、一)
- 柳田昇二郎(一、一)
- 高橋 信一(一、一)
- 長嶺 治平(一、一)
- 白石 嘉次(三、二)
- 佐々木嘉春(一、一)
- 岡本 精一(五)
- 八木谷梅吉(四、二)
- 佐藤 虎介(五)
- 中村 三郎(一、一)
- 河村 米介(一、二)
- 内山脩一郎(一、二)
- 田中 吾一(二、三)
- 中村 久平(三、一)
- 波多野百三(四、一)
- 伊藤 治郎(五)
- 光藤 健介(五)
- 高橋 由之(五)
- 吉岡 昌三(四、二)

門司 先生
山本 先生

○フットボール、ベースボール

部記事

本部は明治三十二年十月設立以來、杉山教諭主として管理經營の任に當られ漸く今日あるを致せしが、同教諭は病痾の故を以て、本月終に職を辞して其郷里に歸られたり。これ實に本部のため悲まざるを得ざる事ありといへども、また是非さき次第といふべし。本部はベースボール部員のみにも既に八十名の部員を有する上に、フットボールは本會々員全体の係はるべき遊技あるを以て、諸般の遊技中如何に本部が重要なる位置を占むるかを察すべし。彼の杉山教諭は夙に此處に見るあり、常に遊技のための特種の躰格を要せず、誰人にも同様に愉快に活潑に運動し得べしフットボールの如きは、學校遊技として最も適當なるものなれば、極度まで發達せしめざるべからずと主張せられたりしが、教諭の持

説は漸々實行の運を見るに至り、去年十二月六日以來、本校生徒は放課後一時間、必ずフットボール若くはベースボール運動を必ずすべき事となり、今は殆ど課業の一部として行はれつゝあるあり。これ實に本部のため慶賀すべき事たるのみならず、學校遊技奨励の方法として最も其の當を得たるものも謂つべし。只右制度を設けられし以來未だ一回もフットボール勝負の催さざりしベースボール部員中我校撰手として覇を天下に争に足るべきベースボールメンを得ざるは、余輩の遺憾とする所あり。左にベースボール仕合中重なるもの二三を掲げて部員の參考に供す。明治三十三年六月廿日舉行の第一回ベースボール大會に於ける競技者及び勝敗の數は左表の如し。當日は終技後一同撮影をなし、次て柔道道場に於て茶話會を催す。席上杉山部長の講評及び小田、能勢兩教諭の談話ありたり。

赤組(三十七、勝)	白組(十四、敗)
P. 中村 章一(五)	P. 境 半三(四)
C. 曾根 昌一(三)	C. 中村 芳樹(二)
S.S. 八谷 俊一(四)	S.S. 栗屋 勝(四)

L.F. 白石 嘉次(三)	L.F. 齊藤 良輔(五)	L.F. 齊藤 高輔(三)	L.F. 林 章貫(四)	L.F. 林 新作(四)
C.F. 齊藤 良輔(五)	C.F. 宮原 朝吉(五)	C.F. 山根 孝一(四)	C.F. 齊藤 高輔(三)	C.F. 口羽 雅介(四)
R.F. 齊藤 良輔(五)	R.F. 山根 孝一(四)	R.F. 齊藤 高輔(三)	R.F. 林 章貫(四)	R.F. 林 新作(四)
3.B. 齊藤 良輔(五)	3.B. 山根 孝一(四)	3.B. 齊藤 高輔(三)	3.B. 林 章貫(四)	3.B. 林 新作(四)
2.B. 齊藤 良輔(五)	2.B. 山根 孝一(四)	2.B. 齊藤 高輔(三)	2.B. 林 章貫(四)	2.B. 林 新作(四)
1.B. 齊藤 良輔(五)	1.B. 山根 孝一(四)	1.B. 齊藤 高輔(三)	1.B. 林 章貫(四)	1.B. 林 新作(四)

Man. 天野 正六(五)	Ump. 佐藤 虎介(五)	L. 杉山 部長
---------------	---------------	----------

Man. 天野 正六(五)	Ump. 渡邊 五六(四)
---------------	---------------

競技時間、午後一時卅分―四時四十五分、全年十一月五日の仕合は、五年級生徒の新たに組織せるベースボール會の催に係り、二三他級生を以て補缺を合せり、同日終技後茶話會及び杉山部長の講評ありたり。

P. 前田 作藏	P. 岡本 精一
----------	----------

本會誌事 校友會雜誌 第壹號

L.F. 三浦 德一	L.F. 三戸 基介	L.F. 御手洗省三	L.F. 天野 正六	L.F. 藤井 清	L.F. 桐山 敏輔	L.F. 横見 莞爾(一)	L.F. 横田 直藏	L.F. 横田 直藏
C.F. 三浦 德一	C.F. 三戸 基介	C.F. 御手洗省三	C.F. 天野 正六	C.F. 藤井 清	C.F. 桐山 敏輔	C.F. 横見 莞爾(一)	C.F. 横田 直藏	C.F. 横田 直藏
R.F. 三浦 德一	R.F. 三戸 基介	R.F. 御手洗省三	R.F. 天野 正六	R.F. 藤井 清	R.F. 桐山 敏輔	R.F. 横見 莞爾(一)	R.F. 横田 直藏	R.F. 横田 直藏
3.B. 三浦 德一	3.B. 三戸 基介	3.B. 御手洗省三	3.B. 天野 正六	3.B. 藤井 清	3.B. 桐山 敏輔	3.B. 横見 莞爾(一)	3.B. 横田 直藏	3.B. 横田 直藏
2.B. 三浦 德一	2.B. 三戸 基介	2.B. 御手洗省三	2.B. 天野 正六	2.B. 藤井 清	2.B. 桐山 敏輔	2.B. 横見 莞爾(一)	2.B. 横田 直藏	2.B. 横田 直藏
1.B. 三浦 德一	1.B. 三戸 基介	1.B. 御手洗省三	1.B. 天野 正六	1.B. 藤井 清	1.B. 桐山 敏輔	1.B. 横見 莞爾(一)	1.B. 横田 直藏	1.B. 横田 直藏

Man. 山本 達吉	Ump. 齊藤 良輔	L. 杉山 部長
------------	------------	----------

競技時間、午後一時三十四分―五時、本部は學期の初に當り小田部長校務の繁劇ありしため諸部に後れて開かれ、明治三十三年六月廿九日初

○文藝部記事

めて發部式を舉行せり。當日小田部長の發部の詞に次て、一、二年生は國文若くは漢文の講讀ををし、三年生以上は演説若くは英語朗讀をせり、今その景況及び演説要旨を記載するの餘白を以て左に講讀演説等をなしたる諸君の姓名を左に録す。

- 大田健太郎(一) 日比 豊(二)
- 寺西啓太郎(二) 村田 發太(二)
- 林 新作(四) 中村文二郎(三)
- 山田 正一(三) 和田 準一(四)
- 兼常 清佐(三) 吉田 光胤(三)
- 山本 松四(四) 岡村 喜興(五)
- 田中 三造(五) 原 宇一(四)
- 茶川 一(四) 瀧野 重威(四)
- 宮川 鐵造(五) 石津 御楯(四)
- 河野 厚造(五)

右の外塚本教諭は「疑」てふ演題にて、「科學の理論は歸納法あり。歸納法は人智の進むに従うて、或は背理とあることあり。理化學の理は千古不變とはいへざるも、今代學者の智識の程度に於て推考して疑なきときは、これを稱して假に原理と見做すあり」と論

森信丸君(四)は讀書にありとし、
石津御楯君(四)は自然界にありとし
嶋田八重丸君(三)は意志と体との平均にありとし。
河野厚造君(五)は死にありとし
勝野清君(五)は軍人とあす。
健全ある精神は健全ある身軀にあり、
横見莞爾君(二)此問題につきて論せらる、
其他雨谷會長の「勉強」、山本教諭の「地球」につきての演説は何れも學生に取りて有益のものありき、
討論題は「ワシントンとナポレオンの優劣」ありしか、都合により當日これを中止せり。
本部第二回例會(明治三十四年二月九日開會)に於ける演説は左の如し。

- 萩 石津 御楯(四)
- 知巳 河野 通毅(四)
- 及第と落第 宮川 鐵造(五)
- 長藩尊攘運動の裏面 河野 厚造(五)
- 自修 森 信丸(四)
- 妖怪 菊屋 孫輔(五)

せられたり。甚簡單ある演説ありしも、吾人を教めること甚大ありき。此日五年生天野正六君病を以て出席すること能はむ、由て歌を寄せて本部の發途を祝せられたるは本部の感謝するところあり。
本部第一回例會は明治三十三年十一月二日これを催せり。今回は豫め左の演題及び討論題を提出して部員の研究に供せしか、本日それにつきて所見を發表せられたる諸君の論旨を簡單に列叙すれば左の如し。

校風振起策

菊屋孫輔君(五)は一致を主とし
瀧野重威君(四)は團結を旨とし
小田教諭は學校に校風あるは社會に社會的道德あると同じければ、これを振起せしめんには、これを形成する要素を培養せざるべからず、一致心、團結力、規律の感念は消極的要素あり、自治心、競争心、向學心は積極的要素あり、校風の振起は此等の統一的發達に賴らざるべからずと論せり。
人生の最大快樂

北京籠城談

竹内 教諭

余輩をして評せしむれば慨して當日の演説は前回に比して遙かに優等にして、就中河野通毅君の考證該博、着眼精緻加ふるに辨舌快明ある、河野厚造君の趣味ある問題を研究せられたる、何れも感服の外ありき。特に竹内教諭の北京籠城談は當日の呼物にして、談を愛親覺羅氏の興起に起し、北京政府の内情を穿ち、進んで去夏事變の破裂より、同教諭が躬親から名譽ある義勇兵の一人とありて奔走せられたる有様を詳述せらるゝや、聴くもの覺ゆるして肉動き血湧き、さかから極東問題の大責任を一身に擔ふの感あらしめたり。右談話の終りたるは既に日暮の頃なりしかは雨谷會長の「第十九世紀」、能勢教諭の「抱負を大にせよ」等は遺憾から次回に譲つることゝあせり。

山口縣萩中學校々友會收支
計算報告

收入之部

一金百五拾九圓拾四錢五厘 明治三十三年三月末日
現在金越高

一金八百參圓參拾七錢參厘

明治三十三年度四月一日より全一月三十一日迄に於ける收入高

内譯

金四百參拾貳圓九拾錢

三十三年度四月一日より全一月末日迄生徒運動會費高

金七拾貳圓七錢

三十三年度四月一日より全一月末日迄秋中學校職員運動會費高

金貳拾四圓四拾五錢

秋地有志者より運動會寄付金

金壹圓八錢參厘

明治三十三年度四月一日より全一月末日迄防長貯蓄銀行預利子高

金貳圓參拾五錢

クラツテ六挺代生徒辨償金及運動會使用殘蠟燭賣却代

金貳百七拾圓五拾貳錢

武術教場板張修繕引宛として借用金高

支出之部

一金七百七拾五圓六拾四錢貳厘

明治三十三年度四月一日より全一月末日迄支出高

内譯

金參圓

志津岐神社松陰神社へ玉串料

金貳百九拾貳圓四拾八錢參厘

武術教場其他修繕代

金貳百貳拾六圓八拾五錢九厘

武術教授用其他運動用諸器具購入代

金貳拾九圓拾五錢五厘

半紙其他消耗品購入代

金五拾八圓五拾錢

運動會及茶話會來賓饗應茶菓代一週年開校式來賓折結及茶菓代

金貳圓九錢

郵便切手購入代

金六拾錢

羽賀臺修學旅行之際喇叭手雇入料

金五拾參錢

ボートに對する船稅

金拾壹圓八拾貳錢五厘

ボート修繕代

金六拾錢

ボート定繫場借上料
但十一月十二月二ヶ月分

金百五拾圓

借用金の内返済高

差引金百八拾六圓八拾七錢六厘

右の外

會債 金百貳拾圓五拾貳錢

來る三月末日までに返済すべきもの

附

錄

山口縣萩中學校概覽

本校一覽は何れ遠からずして出版に當るべき由あるか、本校沿革を初として、其他數種の必要にして且趣味ある統計表等を録載するの許を得たれば、左に一束して附録としたり。

編者識

本校の沿革

本校は其源を舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に發せり。後改めて公立中學校と爲し、明治十一年五月又改めて公立山口中學校の分校とし、大に教則を改正す。其後山口中學校が高等中學校とあり、文部省の管理に歸するや、本校は單に萩分校と改稱し、山口高等中學校の豫科に進學すべき子弟を教授するところの豫備校とされり。明治二十年四月又改稱して萩高等小學校別科といひ、重見經誠氏主幹とありて校務を管理し、同年八月綿貫謙輔氏代て其職に就く。全年十二月萩高等小學校別科を改めて萩學校とし、二十一年一月職制の改正ありて、綿貫氏其校長に任せらる。全二十三年四月には公立を廢して私立と爲し、私立防長教育會これを管理す。然るに三十年九月一日教育會はこれを寄附して山口縣尋常中學校の分校と爲し、全日校則の全部を改正せり。由て今年九月廿八日綿貫氏は萩分校主事を命ぜられしが、三十一年三月三十一日休職とあり、教諭渡邊盛次郎氏次て主事心得とされり。渡邊氏の主事心得は僅かに一ヶ月に過ぎず、全年四月廿二日渡邊盈作氏代て主事に任せられたり。

翌三十二年九月一日、本校は山口縣山口中學校の分校たる資格を廢せられ、初めて獨立して山口縣萩中學校と稱することを得たり、蓋本現在の地所建物の一部を元萩分校の土地建物と交換し、而して他は萩町より一切これを寄附したるによりてあり。是に於てか同日縣令を以て本校規則を發布せられ、且職制並に事務章程を訓令せらる、又同日元萩分校生徒二百九十三名の外、新に百拾名の入學を許し、教諭渡邊盈作氏は校長心得兼務を命ぜらる。全月十八日に至りて現任雨谷羔太郎氏校長に任命せられ、全年十月十八日を以て開校式を舉行せり。これを我校友會の梗概とす。

山口縣立中學校現任職員表

受持學科及掛許學科	就職年月日	職名	氏名	府籍
文科大學卒業	明治三十二年九月十八日	校長	雨谷羔太郎	茨城縣族
理科大學卒業 理學士	明治三十三年四月二十一日	教諭	塚本又三郎	大阪府民
文科大學卒業 文學士	明治三十三年四月二十一日	全	小田 省吾	三重縣民
高等師範學校卒業 英語歷史	明治三十三年四月二十一日	全	能勢 賴俊	山梨縣族
高等師範學校卒業 教育動物植物生理地文	明治三十三年八月十四日	全	高野 圭一	茨城縣民
外國語學校卒業	明治三十三年一月廿九日	全	持田 半六	石川縣族
高等師範學校卒業	明治三十三年五月卅一日	全	宮澤精一郎	群馬縣民
東京國學院卒業	明治三十二年十二月八日	全	古森 重禮	福岡縣族
漢文	明治三十四年一月十七日	全	竹內菊五郎	愛媛縣民

漢國語文	漢文	國語	數學	英語	地文	博物	歷史	理科	倫理	英語	兵式體操	兵式體操	國語	英語	會計主任	庶務主任			
東京美術學校卒業 圖書	明治三十四年一月十七日	全	藤井 百輔	山口縣族	陸軍教導團卒業 兵式體操	明治三十二年九月一日	助教諭	三好 雅美	山口縣族	陸軍教導團卒業 兵式體操	明治三十二年九月一日	助教諭	三好 雅美	山口縣族	私立東京專門學校專修英語科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	中村秀次郎	茨城縣族
陸軍步兵特務曹長	明治三十二年九月一日	全	山本 忠助	全	陸軍步兵特務曹長	明治三十二年九月一日	助教諭	山本 忠助	全	陸軍步兵特務曹長	明治三十二年九月一日	助教諭	山本 忠助	全	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	山本 忠助	全
陸軍步兵曹長	明治三十三年九月廿七日	全	青木恭太郎	福岡縣族	陸軍步兵曹長	明治三十三年九月廿七日	助教諭	青木恭太郎	福岡縣族	陸軍步兵曹長	明治三十三年九月廿七日	助教諭	青木恭太郎	福岡縣族	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	青木恭太郎	福岡縣族
陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	全	門司 嘉	福岡縣民	陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	教授囑托	門司 嘉	福岡縣民	陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	教授囑托	門司 嘉	福岡縣民	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	門司 嘉	福岡縣民
陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	全	溝部 壯六	山口縣族	陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	教授兼教諭	溝部 壯六	山口縣族	陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	教授兼教諭	溝部 壯六	山口縣族	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	溝部 壯六	山口縣族
陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	全	坂田 庫吉	新潟縣族	陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	教授兼教諭	坂田 庫吉	新潟縣族	陸軍步兵曹長	明治三十四年二月十二日	教授兼教諭	坂田 庫吉	新潟縣族	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	坂田 庫吉	新潟縣族
陸軍步兵曹長	明治三十二年十一月十四日	全	河內山太輔	山口縣族	陸軍步兵曹長	明治三十二年十一月十四日	教授兼教諭	河內山太輔	山口縣族	陸軍步兵曹長	明治三十二年十一月十四日	教授兼教諭	河內山太輔	山口縣族	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	河內山太輔	山口縣族
陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	全	波多 政義	全	陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	教授兼教諭	波多 政義	全	陸軍步兵曹長	明治三十二年九月一日	教授兼教諭	波多 政義	全	私立東京專門學校文學科卒業	明治三十二年九月一日	助教諭	波多 政義	全

附錄 校友會雜誌

第壹號

三

附錄 校友會雜誌 第壹號

會務計	事務	事務	事務
第五高等學校醫學部卒業	明治三十四年一月廿九日	明治三十二年十月二十六日	明治三十二年九月一日
草刈經之助	福原貞彦	有福直三郎	全

生徒入學前の成業別取調表

年級	高等小學校第一學年修了					全第二學年修了					全第三學年修了					全卒業					計
	第一	第二	第三	第四	第五	第一	第二	第三	第四	第五	第一	第二	第三	第四	第五	第一	第二	第三	第四	第五	
第一	1	1	1	1	1	24	34	34	34	34	49	36	36	36	36	38	38	35	35	35	122
第二																					106
第三																					84
第四																					66
第五																					43
計	3	1	1	1	1	156	20	41	37	34	132	10	11	26	36	120	13	13	13	13	411

備考 本表は明治三十四年二月十八日現在を以て取調たるものあり

生徒郷貫別取調表

年級	阿武郡	大津郡	美禰郡	厚狹郡	豊浦郡	吉敷郡	佐波郡	都濃郡	熊毛郡	玖珂郡	島根縣	福岡縣	計
第一	80	22	5	2	1	1	1	1	1	1	3	1	122
第二	81	14	4	2	1	1	1	1	1	1	3	1	106
第三	61	10	6	3	1	1	1	1	1	1	2	1	84
第四	53	8	6	1	2	1	1	1	1	1	1	1	66
第五	35	3	6	1	1	2	1	1	1	1	1	1	43
計	310	57	15	7	4	2	2	2	2	2	8	2	411

備考 本表は明治三十四年二月十八日現在を以て取調たるものなり

生徒年齢表 明治三十三年九月一日調

年級	最長	年齢	最少	年齢
第五	廿二年五ヶ月	八	十六年一ヶ月	七

附錄 校友會雜誌 第壹號

度	小計	二六九	九九	三六八	四	七三	二七
三年間合計	六二三	二四七	八六〇	四五	七一	二九	

自明治三十一年七月學年試驗原級者に關する統計表
至明治三十三年三月

年 度	原 級 者 入 學 前 履 歷	
	高等小學二年卒業	全三年卒業
明治三十一年度	六五	二〇
明治三十二年度	四七	三三
明治三十三年度	五二	二八
合計	五四	二八
	全四年卒業	一五

備考 本表數字はすべて原級者百に對する各項の割合を示す

生徒仮定目的分類統計表

明治三十三年
十二月十四日製

仮定目的	五年生	四年生	三年生	二年生	一年生	合計
高等學校	一〇	三六	四八	二七	一三	一三四
海軍	一一	一一	一五	一五	二七	七九
陸軍	一四	八	八	一九	一七	六六
商業	三	三	五	一九	二四	五一
醫學	三	二	四	五	二	二三
工業	三	三	一	二	六	一五
實業	二	一	一	七	二	一三
僧侶	二	一	一	一	五	六
農業	一	二	一	二	一	四
商船學校	一	二	一	一	二	三
教育家	一	一	一	一	一	三
美術學校	一	一	一	一	一	三
未定	二	一	四	一	八	二六
合計	四三	六七	八八	一〇九	一一八	四二五

武學貸費生表

○三度共引續き貸費生と
かりしものは○印を附す

明治卅二年九月採用の武學貸費生

(第四年級)

梨羽次郎熊
宮川 鉄藏
兒玉 良三
岡部 孝介
齋藤 良輔
高橋 由之
三宅彌太彦
阿武 信一
田中 三造
佐藤 虎介
中村 章一
山本 豊

明治卅三年三月採用の武學貸費生

(第五年級)

梨羽次郎熊
宮川 鉄藏
兒玉 良三
香原 祐江
齋藤 良輔
木村 彌三
岡本 精一
阿武 信一
田中 三造
佐藤 虎介
中村 章一
藤井 清

明治卅三年九月採用の武學貸費生

(第五年級)

梨羽次郎熊
宮川 鉄藏
桐山 敏輔
香原 祐江
齋藤 良輔
高橋 由之
阿武 信一
田中 三造
佐藤 虎介
中村 章一
三浦 徳一
山本 豊

(第三年級)

桐山 敏輔
林 新作
前原 清
山本 松四
田坂 信一
横見菊三郎
岡 龜熊
片山 熊雄
佐伯 政一
深井 清
波根 良弼
青水 英一

(第四年級)

桐山 敏輔
三浦 徳一
三戸 基介
山本 松四
田坂 信一
三宅彌太彦
林 新作
原川 國介
前原 清
岡 龜熊
波根 良弼
青水 英一
片山 熊雄
山根 孝一
境 半三

(第四年級)

林 新作
前原 清
山本 松四
田坂 信一
三宅彌太彦
中村喜代藏
原川 國介
河野 安宅
白上貫之助
青水 英一
山根 孝一

明治三十四年四月八日印刷
明治三十四年四月十五日發行

山口縣長門國阿武郡萩町第五百二十八番屋敷居住士族
發行兼編輯者 波多政義

發行所 山口縣萩中學校校友會

山口縣吉敷郡大歲村第四百八十三番地

印刷者 福田龜太郎

山口縣吉敷郡山口町第十四番屋敷

印刷所 防長新聞合資會社



校友會雜誌

第二號

明治三十五年一月發行

山口縣萩中學校之友會